ISSN 1345-224X

静岡大学

# 生涯学習教育研究

第19号

## 目次

**論文**

持続可能な地域の発展に災害遺構を活かすための住民活動の経緯と大学関係者の役割に関する研究
―洞爺湖温泉の560万人観光地づくりを考えるワークショップを事例として―
…… 石川宏之 3

気づきとアクションを生み出すフューチャーセンターのセッション設計
―しずおか消費者教育未来会議を事例として
…… 宇賀田栄次・佐藤直樹・天野浩史 15

**事業記録**

博物館フォーラム「ジオパークにおける博物館の役割と学生参加のあり方
―伊豆半島ジオパークとふじのくに地球環境史ミュージアムについて―」 …… 27

生涯学習指導者研修事業「若者の学びを支える公民館」 …… 45

**事業報告**

2015年度地域連携生涯学習部門事業の実施報告 …… 59

静岡大学イノベーション社会連携推進機構
地域連携生涯学習部門
2017

静岡大学

# 生涯学習教育研究

第19号

静岡大学イノベーション社会連携推進機構
地域連携生涯学習部門
2017

論文

# 持続可能な地域の発展に災害遺構を活かすための住民活動の経緯と大学関係者の役割に関する研究

## ―洞爺湖温泉の 560 万人観光地づくりを考えるワークショップを事例として―

石川　宏之*

## 1．はじめに

### 1.1 研究の背景と目的

東日本大震災のような巨大災害で疲弊した地域を再生するには、新たな官民協働の組織を設立し、その活動に大学関係者を参画させることが必要である。本研究は、持続可能な地域の発展に災害遺構を活かすために、地域が主体となった内発的な経済復興とあわせて地域の人々が心を合わせた人的復興を目指すものである。

これまでに災害遺構に関する既往研究には、災害遺構の保存に至るまでの経緯や維持管理に重きを置いた研究と、災害遺構を観光資源化する地域的な取り組みに重きを置いた研究がある。前者として雲仙普賢岳の火砕流で焼失した小学校被災校舎の保存プロセスと課題を明らかにしたもの（高橋1999）や、雲仙普賢岳噴火と中越地震で被災した災害遺構を事例にあげて維持管理の視点から災害遺構の保存方策について検討したもの（石原2013）がある。一方、後者では有珠山噴火後に洞爺湖温泉街の災害遺構を観光資源化する住民運動の取り組みを明らかにしたもの（中鉢2003）と、有珠山噴火後に虻田町の観光・雇用への影響と復興への取り組みをまとめたもの（奥田2003）がある。しかし、いち早く被災地の復興を果たすために地域住民が大学関係者の支援を受けて災害遺構の価値を見出し、行政と連携して災害遺構を保存・活用していく過程について検証しているものは見られない。本研究では、持続可能な地域の発展の観点から住民が新たな社会関係資本を構築し、減災教育や観光振興に震災遺構を活かすプロセスを研究しており、既存研究とは基本的なスタンスが異なる。

本研究は、持続可能な地域の発展の視点から地域住民が減災教育や観光振興のために災害遺構の価値を見出すプロセスと、大学関係者の役割について明らかにすることを目的とする。そして、東日本大震災の被災地で災害遺構の価値を見出していく過程において大学関係者の役割を提言する。

表1　2000年有珠山噴火後に活動した住民団体の概要

| 組織名 | 有珠山噴火再生住民の会 | 有珠山を知ろう会 | 560万人観光地づくりを考えるワークショップ |
|---|---|---|---|
| 発足年月 | 2000年5月 | 2000年11月 | 2001年1月 |
| 目的 | 噴火対策で多忙をきわめる行政にのみすがることなく、地域住民を巻き込んで、住民自ら学び、噴火災害をプラス材料と捉え、関係諸機関とも勉強会を継続し、その結果を行政判断の一助としてもらうこと。 | 洞爺湖温泉地区の住民が、自ら有珠火山のことを学ぶとともに、観光客に火山のことを知ってもらうこと。 | 560万人の北海道民に洞爺湖温泉へ来てもらい、かつての洞爺湖温泉の繁栄を戻すこと。また、北海道が計画している砂防工事によって生ずる空間の利用を住民の立場から観光資源としての可能性を探り、行政へ提案すること。 |
| 活動内容 | ・毎週、壮瞥町のホテルで北海道内外の学者や有識者を招いて復興まちづくりの勉強会や住民向けのシンポジウムなど11月までに30回開催した。<br>・虻田町へ洞爺湖温泉地区における災害遺構保存の陳情などを行った。 | ・立ち入り禁止区域手前から金比羅火口を見学し、被害を受けた町営浴場、洞爺湖温泉小学校などについて説明した。<br>・有珠山の噴気活動による空振を体験し、その自然現象について解説した。<br>・水～日曜日午前11:00～11:30 | ・洞爺湖温泉街西側の砂防予定地を観光資源として利活用する方法を考えた。<br>・エコミュージアム構想の中で西山山麓および金比羅山山麓の災害遺構を保存・活用できるか検討した。 |
| 財源等 | ・会員：15人（2000年6月現在）<br>・会費：2,000円/月（会場費、お茶代） | ・会員6人（2001年11月現在）<br>・会費：0円 | ・会員115人（2001年11月現在）<br>・年会費 1,000 円 |

*静岡大学イノベーション社会連携推進機構准教授

### 1.2 研究方法と調査概要

研究方法として、まず、行政・大学・住民団体の動きや変遷から住民が災害遺構の価値を見出すプロセスを考察し、官民学の連携体制および大学関係者の役割を検証する。つぎに、東日本大震災後の三陸沿岸の岩手県大槌町で起きている災害遺構の保存・解体問題を考察し、最後に持続可能な地域の発展に災害遺構を活かすために大学関係者の役割を提言する。調査対象は、2000年有珠山噴火後に活動した「有珠山噴火再生住民の会（再生住民の会と略す）」、「有珠山を知ろう会」、「560万人の観光地づくりを考えるワークショップ（観光地づくりWSと略す）」とする（表1）。選定理由としてこれらの住民団体は、2001年3月に北海道「2000年有珠山噴火災害復興計画基本方針」に掲げられたエコミュージアム構想[1]で官民学連携して災害遺構の保存を図り、新たな火山資源と災害遺構を巡るガイドツアーなどを通して持続可能な地域の発展に努めたからである（図1）。

図1　エコミュージアム構想と災害遺構の位置
（「洞爺湖周辺地域エコミュージアム構想」を基に筆者が一部加工）

表2　聴き取り調査の概要

| | 聴き取り先 | 実施日 |
|---|---|---|
| 洞爺湖有珠山 | 洞爺湖町観光振興課 | 2016年6月20日 |
| | 有珠山噴火再生住民の会 | 2016年6月19日 |
| | 有珠山を知ろう会（現、有珠山ガイドの会） | 2016年6月19日 |
| | 560万人観光地づくりを考えるワークショップ | 2016年6月19日 |
| 三陸 | 岩手県立大学 | 2017年2月15日 |
| | 大槌町総合政策課 | 2016年6月21日 |
| | (一社)おらが大槌夢広場 | 2016年6月21日 |

洞爺湖町（旧虻田町）には、北海道を代表する洞爺湖や有珠山などからなる支笏洞爺国立公園がある。洞爺湖町は、2006年3月に虻田町と洞爺村が合併し、その面積は約180㎢で、そこに約9千人の住民が観光業や農業で生計を立てている。観光地の洞爺湖温泉などには、年間約3百万人の観光客が訪れ、中には北海道の外からこの地域へ移住する活動的な新住民も多い。2000年3月31日に有珠山が23年ぶりに西山山麓から噴煙をあげた。すでに有珠山周辺の自治体では、北海道大学有珠火山観測所から適切な火山観測情報を受け、地域住民へ避難勧告を出していたので、死者は無かった。しかし、その後、金比羅山山麓の大噴火で多くの住宅団地や公共施設が被災し、約1万6千人が同年7月まで避難生活を余儀なくされた。虻田町の被害総額は、約250億円に達した。

調査は、洞爺湖温泉地区の復興まちづくりに携わった町職員と地域住民、岩手県大槌町の町職員と地域住民に聴き取りを行った（表2）。質問事項は、①災害遺構の保存に関わる住民活動の経緯、②災害遺構の整備と維持管理、③行政・大学・住民団体との関係、④大学関係者の役割と働き、である。また、現地で収集した行政資料と文献（文末にリストを記載）を参照して、考察していく。

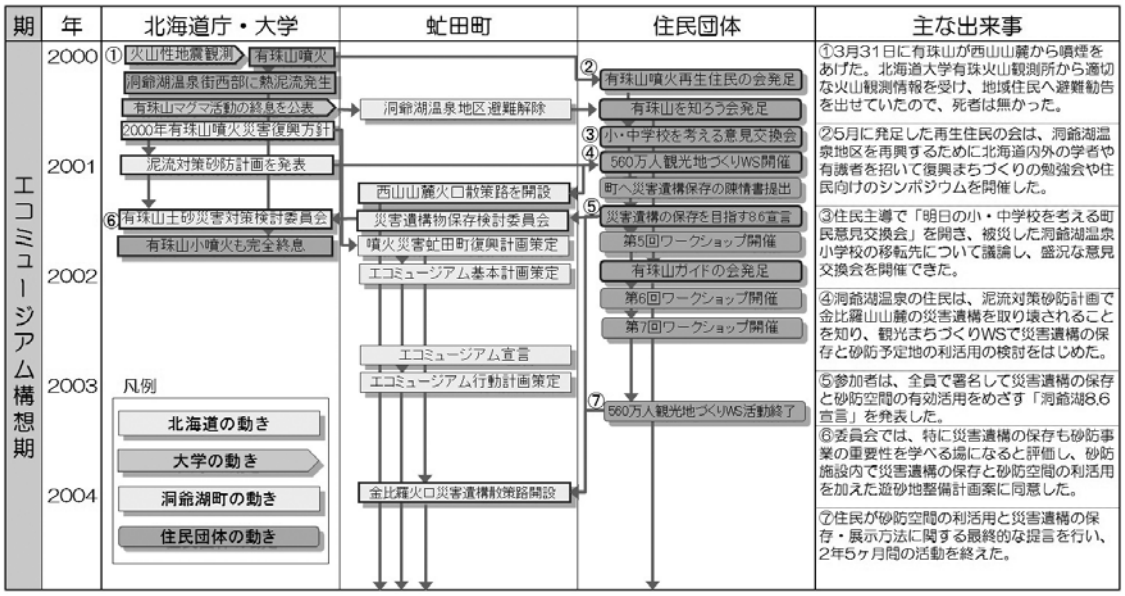
## 2. 住民が災害遺構の価値を見出すプロセス

### 2.1 有珠山噴火再生住民の会の発足

表3は、2000年有珠山噴火後における北海道庁・大学、虻田町、住民団体の動きと変遷をまとめかたものである。まず、住民団体の動きとして、有珠山噴火2ヶ月後の5月30日に有珠山噴火再生住民の会が発足した。発足のきっかけは、洞爺湖温泉地区を再興するために土産物店を営む柴田賀生が友人知人9人に呼びかけて、壮瞥町のホテルに集まったことである。再生住民の会の目的は、「噴火対策で多忙をきわめる行政にのみすがることなく、地域住民を巻き込んで、住民自ら学び、噴火災害をプラス材料と捉え、関係諸機関とも勉強会を継続し、その結果を行政判断の一助としてもらうこと」とした。再生住民の会では、会長を松田忠徳（札幌国際大学教授）、事務局長を柴田にすることとした。毎週、壮瞥温泉のホテルで北海道内外の学者や有識者を招いて復興まちづくりの勉強会や住民向けのシンポジウムなど2000年11月までに30回開催した（環境防災研究機構北海道2008, p.146）。また、虻田町へ洞爺湖温泉地区における災害遺構保存を陳情した。

つぎに大学関係者の動きとして、6月に北海道大学有珠火山観測所の岡田弘教授が、再生住民の会主催

表3　官民学の動きと住民団体の変遷




（「1977年有珠山噴火30周年記念事業記録集」など文献を基に筆者が作成した。）

の勉強会で「火山と共生する街づくりと今後の有珠山噴火」を講演した。岡田は、学術的・教育的な観点から金比羅山山麓で被災した町営浴場・町営アパート・国道橋（写真1・2）を災害遺構として保存した野外博物館にすることを提案し、住民へ自然の迫力を体験できる観光資源にもなることを教えた。その時、柴田は天からのメッセージだと思い、すぐに地再生住民の会で動こうと決意した。その4日後に再生住民の会では、虻田町長へ災害遺構の保存と野外博物館（エコミュージアム）構想を求めて陳情した。8月になると北海道大学農学部教授の新谷融が、「来るべき防災工事と対策・第2次泥流の懸念とその対策」を講演した。噴火後に起こる土石流による二次災害の対策について、洞爺湖温泉地区で新たな砂防工事の必要性を語った。その際に新谷は、野外博物館構想を実現するために住民側から建設省や北海道庁へ提言するよう教えた。9月に松田の同僚で札幌国際大学観光学部の中鉢令兒教授が、「観光地再生の核施設 エコミュージアム」を講演した。中鉢は、洞爺湖温泉地区を再生するためにエコミュージアムの理念を紹介し、地域住民が災害遺構を保護しつつ住民自ら価値ある遺産をつないだストーリーを作ることを教えた。10月には北海道大学理学部の宇井忠英教授が、火山学者の立場から「噴火火口周辺の観光的価値と観光の方法論」について講演した。まず、米国のハワイ島やワシントン州のセントヘレンズ火山などに手本となる公園があり、そこに多くの観光客が訪れていることを紹介した。つぎに、金比羅山山麓にまとまった災害遺構を保存すれば被災体験を語り継ぐことができ、修学旅行生を誘客できることを語った。最後に、洞爺湖温泉地区を新しい火山観光地として、①広域火山公園の特色を生かした観光地づくりを行うこと、②箱物（火山科学館）から本物（野外博物館）志向にすること、③ターゲットは子どもたちで減災教育を行うことを提案した。つまり、地域経済の再生の観点から災害遺構の保存および展示方法を論じ、新たな観光振興のあり方を住民に教えた。12月に宇井教授は、虻田町長へ「虻田町復興計画案」の助言として、新たな観光振興のあり方を伝えた。後に虻田町は、復興計画に災害遺構を活かした「エコミュージアムの推進」を記載した（虻田町2001,p.14・17）。

最後に自治体や他団体の動きとして、2000年秋頃から被災した洞爺湖温泉小学校の移転先をめぐって議論が始まった。11月に開かれた虻田町教育委員会と生徒保護者の懇談会では、双方の考えにギャップがあり、保護者側の考え方も一本化していない状況であった。そこで、再生住民の会や洞爺湖温泉小・中学校PTAなど地元8団体は実行委員会を組織し、虻田町教育委員会などが後援となり、12月に洞爺湖文化センターで住民主導の対話集会「明日の小・中学校を考える町民意見交換会」を開催した。参加者63人が7グループに分かれて議論し、各グループの代表者が検討案を発表した。傍聴者を含めると110人に達し、盛況な

写真1　熱泥流で押し流された国道橋

写真2　町営アパート（桜が丘団地3号棟）

意見交換会を開催することができた。この様な経緯から再生住民の会は、すでに他の団体と社会関係資本を築いていたので、後に北海道庁から洞爺湖温泉街泥流対策砂防計画を提示されると間もなく災害遺構の保存と砂防施設の利活用を考える「560万人観光まちづくりを考えるワークショップ」を発足させていく（虻田町史編集委員会2002,p573）。

### 2.2有珠山を知ろう会発足

虻田町の多くの住民は観光業関係の仕事で生計を立てているので、避難解除後にはできるだけ早く観光客を呼び寄せることが課題であった。2000年7月に虻田町は、洞爺湖温泉地区の立ち入り規制を解除した。しかし、噴火口に近い洞爺湖温泉地区の一部では継続され、そこの住民は仮設住宅等で避難生活を送っていた。

住民団体の動きとして、8月に三浦和則社長が洞爺観光ホテルの営業を再開したら、宿泊客がエレベーターホールの窓から金比羅山の湯気が立ち上る様子を眺めていた。その客は、火口の水蒸気爆発による空気の振動で窓がゆれることや、火口から噴石が吹き飛ぶ様子を見て自然の脅威に驚き、感動していた。発足のきっかけは、三浦がその様子を見て勉強会で聞いた宇井教授の提言と現実がつながったことで、すぐにホテルの屋上で宿泊客向けにガイドをはじめたことである。後にその活動が新聞やテレビ番組で紹介されたことで、それを見た多くの観光客が、洞爺湖温泉地区を訪れるようになった。11月に再生住民の会の有志6人（三浦・柴田・立野・他3人）は「有珠山を知ろう会」を発足し、毎週水曜日から日曜日の仕事の合間に交代して金比羅山周辺を無料で案内することとした。そのメンバーには、金比羅山から流出した熱泥流で被災した町営アパートの元住民も参加していた。有珠山を知ろう会の目的は、有珠山を知ることで地元住民に安全性を再認識してもらうことも含んでいた。なぜなら、観光業者は洞爺湖温泉地区に戻ってきたが、多くの住民は火口の水蒸気爆発による空気の振動を恐れて仮設住宅で暮らしていたからである。つまり、観光客は洞爺湖温泉地区に宿泊しているのに、地元住民が住んでいない状況であった。その後、マスコミが有珠山を知ろう会の活動を取り上げてくれたことで、風評被害や人情被害が無くなってきた。

一方、自治体の動きとして、虻田町は、有珠山を知ろう会にガイド用の拡声器やウインドブレーカーを支給して応援した。また、ガイドする場所に洞爺湖町立火山科学館（現在、洞爺湖温泉バスターミナル）の屋上を開放した。2001年7月に町が西山山麓火口散策路を一般公開したことで、多くの個人旅行者が洞爺湖温泉地区を訪れるようになった。観光業者は、有珠山を知ろう会に有料ガイドを委託し、2002年4月に「有珠山ガイドの会」と改名された（虻田町史編集委員会2002,p576）。

### 2.3 560万人の観光地づくりを考えるワークショップの発足

2001年1月に洞爺湖温泉地区の住民は、洞爺湖温泉街西側の「洞爺湖温泉街泥流対策砂防計画」（図2）において北海道庁により金比羅山山麓の災害遺構を取り壊されることを知った。その計画は、2001年秋に砂防施設の工事を開始し、2004年度に完成を目指す内容であった。住民は、北海道大学農学部の新谷融教

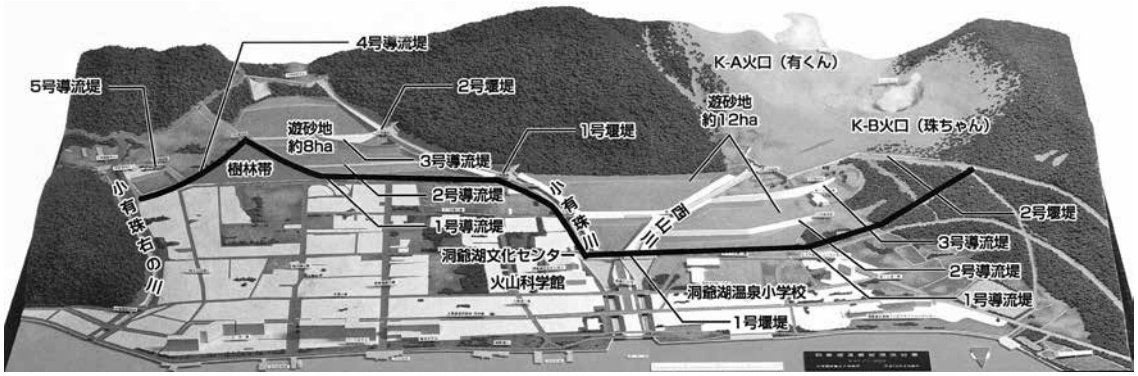



図2　洞爺湖温泉街泥流対策砂防計画
（出典：北海道「有珠山対策事業」http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kn/kss/ssg/usuzan.htm）

授から美瑛町白金温泉の砂防施設の事例を教わり、住民側から災害遺構の保存について砂防予定地の利活用と併せて提案すれば可能かもしれないことを知った。「明日の小・中学校を考える町民意見交換会」で実行委員を務めた有志12人は洞爺湖温泉地区のホテルに集まり、1月17日に「560万人観光まちづくりを考えるワークショップ」を発足させた。会の名称には、560万人の北海道民に洞爺湖温泉へ来てもらい、かつての洞爺湖温泉の繁栄を取り戻したいという願いが込められていた。会の代表は三浦昭三（元虻田町教育委員長）、事務局長は柴田、渉外に立野広志（虻田町議会議員）、会計に三浦和則（洞爺観光ホテル社長）が務めることとした。その後、2001年には洞爺湖温泉地区西側の砂防予定地や洞爺湖文化センターなどで5回のワークショップを実施した。

### （1）第１回ワークショップ（2001年1月28日）

表4は、2001年に実施された5回のワークショップの課題・活動内容・活動成果をまとめたものである。第１回の課題は、洞爺湖温泉地区西側の砂防予定地を有効活用するあり方を明らかにすることであった。活動内容として、はじめに北海道大学の宇井（火山地質学）・岡田（火山物理学）・新谷（砂防学）が、学術的な知見から災害遺構の保存の重要性、その保存対象（町営浴場・町営アパート・国道橋など）、保存方法について講演を行った。つぎに、参加者が8グループに分かれて、観光客を誘致するためにいかに砂防予定地を有効利用するか議論した。そして、札幌国際大学の中鉢がコーディネーターとなり分かりやすくポンチ絵に起こして、各グループの代表者が発表した。最後に大学関係者と北海道職員が講評した。活動成果として、参加者が砂防予定地の平常時の利活用について北海道庁へ国や虻田町との調整を要請できたことである。また、砂防予定地で災害遺構を保存した公園などが住民案としてあがり、砂防施設と共存するあり方を模索することができた。参加者は87名で、その中に将来の観光地づくりを担う地元の高校生も出席し、傍聴者も含めると約300人に達した。

その後、観光地づくりWSの役員会を開いて次回の開催日を検討し、今回のワークショップで出された提案をさらに具体化しつつ、観光地づくりとまちの活性化に活かすために金比羅山山麓の他に立入禁止区域の西山山麓も合わせて検討することとした。

### （2）第２回ワークショップ（2001年5月13日）

第2回の課題は、参加者が西山山麓および金比羅山山麓を歩きながらエコミュージアム構想において災害遺構をいかに活用できるか検討することと、泥流対策砂防計画の概要を把握し、住民の提案で計画変更の可能な範囲や条件を明らかにすることであった。活動内容として午前中に参加者は、2グループに分かれて西山山麓コースと金比羅山山麓コースを踏査した。助言者として参加した北海道大学の岡田は、地表にできた断層、熱泥流の跡、松の木の側面が変色し枯れている原因など、学術的に噴火時の自然現象を説明した。見学後、参加者は、保存すべき災害遺構や見学ルート案を話し合った。午後には、洞爺湖文化センターで北海道室蘭土木現業所から泥流対策砂防計画の説明を受けたあとに質疑応答を行った。活動成果として、参加者は、北海道職員との対話の中で保存したい災害遺構、その維持管理と運営体制など具体的に検討すべき項目を明らかにできた。しかし、参加者は60名に減り、高校生は不参加であった。

表4　560万人の観光地づくりを考えるワークショップの目的･活動内容･成果（2001年）

| 開催月日 | 課題 | 活動内容 | 活動成果 |
|---|---|---|---|
| 第1回<br>1月28日<br>（参加者87名） | ・洞爺湖温泉地区西側の砂防予定地を有効活用するあり方を明らかにすること。 | ・北海道大学教授3名が、災害遺構の重要性、その保存対象、保存方法を講演した。<br>・参加者が8班に分かれて砂防空間の利活用について議論した。<br>・各グループの代表者が発表し、大学関係者と北海道職員が講評した。 | ・参加者が砂防予定地の利活用を検討するとともに、北海道庁へ調整を要請できた。<br>・砂防予定地で災害遺構を保存した公園などが住民案としてあがり、砂防施設と共存するあり方を模索することができた。<br>・傍聴者も含めると約300人に達した。 |
| 第2回<br>5月13日<br>（参加者60名） | ・西山山麓と金比羅山山麓を歩き、エコミュージアム構想で災害遺構の利活用を検討すること。<br>・泥流対策砂防計画の概要を把握し、住民の提案で計画変更の可能な範囲や条件を明らかにすること。 | ・参加者は、午前中に2班に分かれて西山山麓コースと金比羅山麓コースを踏査した。見学後、保存すべき災害遺構や見学コースのルート案を話し合った。<br>・午後に北海道職員から砂泥流対策砂防計画の説明を受け、その後に質疑応答を行った。 | ・参加者は、北海道職員との対話で保存すべき災害遺構、その維持管理と運営体制など具体的に検討すべき項目を明らかにできた。<br>・参加者は60名で高校生は不参加であった。<br>・5月20日に早急に西山山麓火口散策路を整備するよう洞爺湖町に陳情した。 |
| 第3回<br>6月16日<br>（参加者70名） | ・砂防予定地の活用内容を具体化することと、や災害遺構者の保存対象を特定すること。 | ・参加者は砂防予定地で北海道職員から工事の説明を受け、堤防の建設位置を確認した。<br>・洞爺湖文化センターで北海道大学教授３名と札幌国際大学教授１名が講演した。<br>・参加者が3班に分かれて3テーマを議論し、大学関係者が発表内容を講評した。 | ・参加者は、砂防施設の利活用について災害遺構を巡るルートやパークゴルフ場など具体的にアイデアを出すことができた。<br>・災害遺構を残すことは可能だが、北海道庁が維持管理できないことが明らかになった。<br>・参加者は町民など70人であった。 |
| 第4回<br>8月6日<br>（参加者60名） | ・西山山麓火口散策路の開設に続き、金比羅火口災害遺構散策路も開設する方向で砂防施設内の有効利用を検討すること。 | ・参加者は、砂防予定地で3班に分かれて保存する範囲、災害遺構物の特定、保存方法、散策ルートについて議論した。<br>・参加者は、各班の意見をまとめて発表し、災害遺構の保存と砂防施設の有効活用をめざす「洞爺湖8.6宣言」を発表した。 | ・大学関係者の支援を受けて災害遺構の学術的・教育的価値が認められ、北海道職員の協力を得て砂防施設内に災害遺構を残す方向性が示された。<br>・参加者は60人であったが、高校生も含まれていた。 |
| 第5回<br>11月22日<br>（参加者65名） | ・砂防施設と金比羅山火口を結ぶ散策ルート、さらに西山山麓へつなぐ散策ルートについて考案すること。 | ・北海道大学教授の同行のもとで白煙が立ち上がる金比羅山火口の縁に近づき内部を観察したあと、山麓の砂防ダムや災害遺構を巡った。<br>・西山山麓火口周辺の地熱地帯で地中温度を測定するなど、合わせて24箇所のポイントを調査した。 | ・参加者65人の中に虻田町・壮瞥町・北海道・国土交通省の職員25名が参加し、自然の脅威と地球の営みを実感できた。<br>・洞爺湖周辺地域エコミュージアム構想のあるべき姿について、官民学で共通認識が図られた。 |

（「1977年有珠山噴火30周年記念事業記録集」を基に筆者が作成した。）

その後、5月20日に事務局は、早急に西山山麓火口散策路を整備するよう虻田町へ要望書を提出し、散策路沿いにロープや案内標識、仮設トイレ、管理人、駐車場を設置するよう陳情した。虻田町では、北海道から補助金4,300万円を受け（北海道2003,p.208）、西山山麓火口散策路の整備を始めようとしていたが、町役場内でワークショップの情報が共有されていなかったので、ブルドーザーで西山山麓の災害遺構（階段状になった旧国道のアスファルトや傾いた電柱）を取り除こうとしていた。すぐに事務局は町役場に出かけて旧国道の脇に遊歩道を整備するよう要請した。5月下旬から週末に地元の建設協会・観光協会・消防職員・町職員・地元住民などのボランティアが、西山山麓や火口周辺に散策路にJR北海道から安く譲り受けた約1500本の枕木を敷き詰めていった。

### （3）第３回ワークショップ（2001年6月16日）

第3回の課題は、砂防予定地の活用内容を具体化することと、災害遺構の保存対象物を特定することであった。事前に役員は、北海道大学の新谷の紹介で砂防施設の利活用の先進事例である白金温泉の砂防施設を視察した。また、被災した町営アパートの元住民にワークショップの案内状を出し、参加を呼びかけた。活動内容として、まず、参加者は砂防予定地で北海道室蘭土木現業所職員から工事の概要について説明を受け、被災した町営浴場・町営アパート・国道橋など自然災害の爪痕を見ながら堤防の建設位置を確認した。つぎに、洞爺湖文化センターで北海道大学の宇井が「火山との共生と防災」、岡田が「未来に備えて今すべきこと」、新谷が「洞爺湖温泉砂防施設の可能性」、札幌国際大学の中鉢が「エコミュージアムと雲仙普賢岳噴火遺構施設」を講演した。最後に参加者が3グループに分かれて3テーマ（自然公園、スポーツ施設、イベント）を議論し、大学関係者が各グループの発表内容を講評した。活動成果として、参加者は、北海道職員から現地で砂防施設の説明を受けられたことで、その利活用について災害遺構を巡るルートやパークゴルフ場など具体的にアイデアを提案できた。砂防予定地内にある災害遺構については、砂防施設完成後も残すことは可能だが、北海道庁が維持管理することはできないことも明らかになった。参加者は町民など70人であった。

その後、宇井の助言を受けて6月8日に事務局は、虻田町と虻田町議会へ金比羅山山麓で保存すべき災害遺構（町営浴場、町営アパート2棟、国道橋）を明記した要望書を提出し、陳情した。また、3人の大学関係者も虻田町へ保存を求める災害遺構を明記した要望書を提出した。7月10日に西山山麓火口散策路が開設されたことで、7月17日に事務局は、散策路の補修、管理人の増員、水洗トイレの設置など、持続

可能な散策路の維持管理を求めて入場者から協力金を徴収するよう虻田町へ陳情書を提出した。その後、虻田町では散策路入口に募金箱を設置した[2]。同月20日に事務局は、これまでの活動の報告と次回の開催案内を記載した「ワークショップ新聞（第1号）」約8,000枚を発行し、町民や関係者へワークショップの参加を求めた。

### （4）第４回ワークショップ（2001年８月６日）

第4回の課題は、砂防予定地内に金比羅火口災害遺構散策路も開設する方向で有効利用を検討することであった。今回も事前に事務局から被災した町営アパートの元住民に加え、虻田町議会議員にもワークショップの案内状を送り、参加を呼びかけた。活動内容は、まず、参加者が3グループに分かれ、大学関係者同行のもと砂防予定地で保存する範囲、災害遺構物の特定、保存方法、散策ルートについて議論した。参加者から町営浴場、町営住宅（桜ヶ丘団地1号棟・3号棟）、国道橋、ゆかりの碑について、できるだけ現状保存を望むことや砂防工事期間中でも見学できる場所を設けるなど意見があげられた。つぎに、参加者が洞爺湖文化センターで各グループの意見をまとめて発表し、大学関係者と北海道職員が見解を述べた。最後に参加者全員は署名して災害遺構の保存と砂防空間の有効活用をめざす「洞爺湖8.6宣言」[3]を発表した。活動成果として、大学関係者の支援を受けて災害遺構の学術的・教育的価値が認められ、北海道職員の協力を得て砂防予定地内に災害遺構を残す方向性が示された。参加者は60人であったが、高校生も含まれていた。

その後、8月9日に事務局は、北海道開発局室蘭開発建設部・北海道室蘭土木現業所・虻田町へ災害遺構の保存を求める要望書と関係資料を提出した。その関係資料を作成する際には札幌国際大学の中鉢の協力を得て、砂防予定地のゾーニング（自然公園、スポーツ公園、親水公園）・災害遺構の保存対象・展示方法・散策ルートを図にして、具体的に砂防施設全体の利活用方法を示すことができた。同月15日に事務局は、「ワークショップ新聞（第2号）」を発行し、「洞爺湖8.6宣言」の内容と詳細図を掲載して、町民や関係者へ理解を求めた。これを受けて虻田町では、同月29日に学識経験者と地元団体の代表者からなる「有珠山噴火災害遺構物保存検討委員会」を開き、観光にプラスとなり、学術的にも貴重であるなどの理由から災害遺構の保存に賛成する委員が多数を占めた。しかし、一部の委員には年間の維持費が数千万円かかることや、被災した町営アパートの元住民に対する配慮などから保存に慎重な意見も出されたため、検討委員会ではその内容も併記して虻田町へ意見書を提出した[4]。9月21日に虻田町は、北海道庁へ「有珠山噴火災害遺構物に関する要望書」を提出した。10月25日に洞爺湖温泉地区のホテルで砂防などの専門家や行政機関で構成する「有珠山土砂災害対策検討委員会（委員長・新谷融北海道大学教授）」が開かれた。委員会では、遊砂地に災害遺構を残しても土砂災害対応に支障なく、氾濫土砂を捕捉できるとの判断から、砂防施設内で災害遺構の保存と砂防空間の利活用を加えた遊砂地整備計画案に同意した。特に災害遺構の保存も砂防事業の重要性を学べる場になると評価し、北海道室蘭土木現業所に最終計画をまとめるよう指示した。

### （5）第５回ワークショップ（2001年11月22日）

第5回の課題は、砂防施設と金比羅山火口を結ぶ散策ルート、さらに西山山麓へつなぐ散策ルートについて考案することであった。午前中に北海道大学の宇井の同行のもとで白煙が立ち上がる金比羅山火口の縁に近づき内部を観察したあと、山麓の砂防ダムや災害遺構を巡った。午後には西山山麓火口周辺で隆起して階段状になった国道を見学したあと、激しく蒸気を噴き上げる地熱地帯で地中温度を測定するなど、合わせて24箇所のポイントを調査した。活動成果として、参加者65人の中に虻田町・壮瞥町・北海道・国土交通省の職員25名が参加し、自然の脅威と地球の営みを実感できた。また、洞爺湖周辺地域エコミュージアム構想[5]のあるべき姿について、官民学で共通認識が図られた。

### （6）第６～８回ワークショップ（2002年６月～2003年６月）

2002年6月16日に第6回が開催され、北海道大学の岡田の同行のもとで、約60人の参加者が新たなルート（四十三山から有珠山新山・外輪山）を散策した。その後、10月20日に第7回が開催され、北海道大学

写真3　砂防地区の現地調査

写真4　砂防地区利活用のワークショップの様子

（写真：立野広志氏提供）

の新谷と北海道室蘭土木現業所職員の同行のもとで砂防工事中のエリア内を歩いて、現実的な砂防空間の利活用（親水公園の可能性、災害遺構の保存・展示方法、散策ルート）を検討した。2003年6月8日に第8回が洞爺湖文化センターで開催され、住民が砂防空間の利活用と災害遺構の保存・展示方法に関する最終的な提言を行い（写真3・4）、2年5ヶ月間の活動を終了した。その後、2004年に北海道庁が金比羅火口災害遺構散策路を開設した。

### 2.3 考察（官民学の協働体制と大学関係者の役割）

図3は、観光地づくりWSを取り巻く官学民の連携体制を示したものである。まず、各住民団体は、互いに連携しながら信頼関係を醸成し、住民団体間で結束型の社会関係資本（観光地づくりWS）を築いた。つぎに、地域外の大学関係者が、観光地づくりWSへ復興課題について適切な情報を提供しながら支援し、水平型（橋渡し型）の社会関係資本を築いた。最後に、官民学が連携して住民の意向を行政施策に反映できる垂直型（連結型）の社会関係資本を構築できた。観光地づくりWSは、公開で住民間の意見調整を行う機会を何度も提供し、地域住民の合意形成を図り、住民主体で災害遺構の保存と砂防予定地の利活用案を作り上げられたことは画期的であった。とかく官主導で進められがちな災害復興に、住民主導で将来の観光地づくりを目指して円滑に復興を進められたことは、極めて意義のある取り組みであった。ゆえに、大学関係者の役割とは、住民に適切な情報を与え、災害遺構の学術的価値や教育的価値のあるストーリーを伝えるコミュニケーターと、住民の意見を行政施策に反映するボトムアップ型の社会関係資本を築くコーディネーターである。

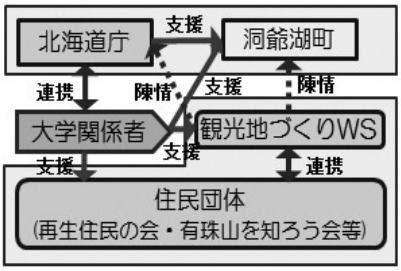



図3　官民学の協働体制

## 3. 東日本大震災後に将来の命を守るために災害遺構の保存・活用

### 3.1 官民学で取り組む大槌町旧役場庁舎の保存・解体問題の経緯

岩手県大槌町では、職員が役場庁舎から高台の公民館へ避難しなかったことで、町長をはじめ計40人の命が奪われた。いわば大槌町旧役場庁舎（旧庁舎と略す）は、「負の遺産」であるが、それだけに津波の教訓を後世に伝えられる震災遺構である（写真5・6）。

2011年3月11日地震発生後、大槌町では、町長をはじめ30人程の職員が役場前の駐車場に机などを持ち出し、災害対策会議を開いていた。その後、役場の近くで「津波だ」という叫び声がした時に、職員らは庁舎の階段を駆け上がり、屋上へ上がろうとしたところで2階天井まで達した津波にのみ込まれた。本来、防災計画では、役場庁舎が使用できないと判断した場合、現地対策本部を高台にある中央公民館に設けることが決められていた。その後、8月に町長選挙が実施され、前大槌町総務課長の碇川豊が当選する。

写真5　大槌町旧役場庁舎

写真6　おらが大槌夢広場・語り部ガイド

激しく損傷したまま放置され津波の痕跡をとどめる鉄筋コンクリート造の旧庁舎の保存を求める契機は、2011年秋から始まった。復興ボランティアとして大槌町を訪れていた大阪の英語塾代表者が中心となって「大槌被災現場永久保存実行委員会」を組織し、津波の怖さを一目瞭然で後世に伝え、子孫の命を守るために半年かけて町内外で請願の3,535人の署名を集めた。しかし、問題として町議会は、旧庁舎の保存について遺族の思い、建物の維持管理、今後の復興に向けたまちづくりなどに支障をきたすと判断し、2012年6月に不採択とした（大槌町旧役場庁舎検討委員会2013,p.5）。請願不採択で旧役場庁舎は解体への流れが強まったに見えたが、2012年11月に碇川町長は、幅広い見地から検討するため、大学関係者・議員・職員遺族・高校生など11名からなる「大槌町旧役場庁舎検討委員会」を開催した（碇川2013,p.236）。岩手県立大学の豊島正幸教授が委員長となり、検討委員会で各委員の意見を傾聴し、論点と認識を深めた上で「①震災犠牲者の鎮魂の場の設定、②後世への伝承・防災教育、③町の歴史を踏まえた公園として利用」を提言した（大槌町旧役場庁舎検討委員会2013,p.37）。2013年3月に報告書が町へ提出され、町長が最終的に旧庁舎の保存または解体を判断することとなった。同月に碇川町長は、旧役場庁舎の一部を保存する方針を表明した。その理由として「二度と同じ悲劇が繰り返さないためには、災害の記憶を風化させないようにすること。防災教育の充実を諮ること。震災遺構の旧庁舎は、被災地住民だけでなく国民全体の財産と捉えること」をあげた。2013年4月に東京大学生産技術研究所が、減災教育に役立てるために旧庁舎を3次元映像で残す事業に取り組んだ。そして、解体を唱える遺族に配慮し、2014年4月に震災遺構として正面の大時計がかかる建物だけを残して、全体の7割が解体された。工事費は2,840万円で、国の震災関連予算が全額充てられた。

その後の対応として2014年12月に碇川町長は大学関係者からなる「大槌町旧役場庁舎保存調査技術専門委員会」を設け、岩手大学工学部の南正昭教授が委員長を務めた。専門委員会では、震災遺構として旧庁舎の価値を認めた上で、保存方法と併せて維持管理費を検討した。委員会では、初期整備費8,400万円をかけて壁の修復と見学棟の整備を行い、年間の維持管理費約120万円である案を評価し、2015年11月に20年以上の保存を前提とした補修・整備案が最適とする結論を町へ進言した。しかし、同年8月に旧庁舎の解体を選挙公約で当選した新町長が、三役で大槌町東日本大震災津波復興計画に係る事業を見直し、旧庁舎一部保存事業を廃止と評価し、解体する方針を示した。その理由として「中心市街地の再生、まちづくりの進展に影響があること、将来にわたって町が維持管理費用を負担すること、住民感情の考慮」をあげた。同月に町内で旧庁舎の解体に向けた説明会を開催し、お寺の住職、高校生などと意見を交換した。3名の住職は、保存の意向を表明した。その理由として、「供養碑では命を守れないこと、大槌町で残っている震災遺構は旧庁舎しかないこと、震災を経験した人が決めてはいけないこと、町内外の多くの人が手を合わせてきており魂が入っていること」をあげた（東野2016,p.169）。同様に大槌高校の生徒たちも保存の意向を表明し、12月に生徒有志でつくる「復興研究会」が、新町長へ解体の延期を求める要望書を提出した。その他にも町議会からは、新町長に定例会で解体予算の提案を見送る要望書を提出した。その後の

対応として新町長は、2015年度内に解体を断念する意向を表明した。

### 3.2 考察

大槌町では、住民同士で互いの旧庁舎の保存解体問題について誰もが自由に参加して意見を出せる機会は無かった。検討委員会では、限られた人の意見であって、代表者が全住民の意見を反映した訳ではない。つまり、委員の選定方法やサイレントマジョリティについて懸念が残る。

たとえ地震や津波という自然災害で人命が奪われたとしても、避難指示の判断ミスなどの人的災害の場合もある。役所トップの人為的判断ミスにより、親族の命を奪われた町職員遺族は、責任を負うべき役所トップへ激しい怒りを抱いているかもしれない。しかし、旧庁舎では多くの職員が亡くなり遺族にとっては辛い出来事であるが、亡くなった人は戻ってこない。もし、旧庁舎が解体されたら、生き残った人へ亡くなった人の無念さは届かない。亡くなった命を次世代へ伝えるためにも旧庁舎（本物）を保存するべきで、それで将来の命が助かると考える。震災遺構を保存するのは、将来の子どもたちのためであり、現在生きている人が解体を判断すべきでないと考える。

三陸の津波は周期的に発生する。旧庁舎が残っていることで後世の人たちは、津波が2階天井の高さまで達した事実を一目で分かる。町長や遺族に、金比羅災害遺構散策路など他地域の災害遺構を視察してもらい、将来の子どもたちに津波災害を伝えていくための有効なツールとして本物に価値があることを認識してもらうことが必要である。被災者が、長い年月をかけて身近な人や来訪者に被災体験を話し合うことで過去の体験と現在の生活のつながりを探り、克服するのに役立つのであるなら、私は震災遺構を保存して被災体験を語れる場を整備するべきと考える。

## 4. まとめ（大学関係者の役割）

### （1）住民自ら災害遺構の価値発見を支援する伝達者

地域住民が災害遺構を残す価値をどう見出すかが問われる。災害遺構の被害の受け方から自然現象を捉え、自然の脅威を学ぶことができる。それは、本物がそこに存在するからわかる。知識があると見え方が変わり、災害遺構の大切さがわかる。地域住民は、大学関係者を通して震災遺構の価値を見出し、次の自然災害に備えられる。大学関係者の役割とは、学術的に災害遺構の被災状況から自然現象を解明し、そのメカニズムやストーリーをわかりやすく住民へ教え、本物（災害遺構）の教育的価値を伝えていくコミュニケーターを担うことである。

### （2）地域住民の合意形成を図る調整者

時時間が経つにつれて記憶は風化していく。記憶にまつわる感情の強度が、被災者と遠隔地の人たちで二極化していく。遠隔地の人たちは、次第に被災地や被災者に無関心になり、場合によって批判的になり、被災者を厳しく見ることもある。この様な状況に陥らないためにも災害遺構を保存することは有効なツールである。情報が溢れてかえっている現在、災害遺構その物、その場所の放つ本物のリアリティは、記憶とその強度を維持するためにも貴重である。大学関係者の役割は、復興の進捗に応じて災害遺構の保存・活用について地域住民の合意形成を図り、住民の意向を行政施策に反映するボトムアップ型の社会関係資本を築くコーディネーターを担うことである。

### （3）被被災者に寄り添い思考を変化させる相談支援員

被災者は、災害遺構を見ると再体験のきっかけとなり辛いかもしれない。大学関係者は、心的外傷に苛まれる被災者に寄り添いながら、過去の記憶として整理してあげ、気持ちをコントロールできるように支援するべきである。特に、被災者が災害遺構の保存について肯定的に捉えられるように思考を変化させるカウンセラー的役割が大学関係者に求められる。

大学関係者が、被災地でこれらの役割を担うことで、持続可能な地域の発展に災害遺構を生かせると考える。

**謝辞**　本調査を進めるにあたり、岡田弘先生（北海道大学名誉教授）、立野広志氏（洞爺湖町議会議員）、柴田賀生氏（エゾップランド柴田屋）、三浦和則氏（洞爺観光ホテル社長）、洞爺湖町職員、豊島正幸先生（岩手県立大学教授）、大槌町職員、（一社）おらが大槌夢広場スタッフの方々にご助力を仰いだ。ここに記して感謝の意を表する。なお、本研究は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)24560756の助成を受けたものである。

## 註

(1) エコミュージアムとは、フランスで1960年代後半に誕生した概念で、仏語のエコミュゼの英語訳である。エコミュージアムの父と呼ばれるジョルジュ・アンリ・リヴィエールはエコミュゼを「地域社会の人々の生活とそこの自然環境、社会環境の発展過程を史的に探求し、自然遺産および文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを通して当該地域社会の発展に寄与することを目的とする博物館である」と述べている(大原1999,p.8)。

(2) 西山山麓火口散策路の周辺は、自然公園法で支笏洞爺湖国立公園の特別地域に指定されている。したがって、散策路で入場料を徴収することは自然公園内では出来ないので、虻田町では散策路の案内リーフレットを配り、協力金（寄附金）を募ることとした。その他に環境省に許可申請したあと、駐車場を整備して駐車料金を徴収することはできるので、噴火により土地が隆起し地積が正確に測量できない状態であったが、図面で町有地と民有地を確認した。しかし、2003年になると町と地権者の間でトラブルがあり、虻田町は普通自動車用駐車場の民有地を借り上げられなくなった。ただし、大型バス専用駐車場については、現在でも民有地を借り上げている。2002年度(4月～11月)の入場者数は約57万人で、収入は駐車料金3,189万円と、協力金約300万円で、採算がとれた。表5から2002年度の西山山麓火口散策路の維持管理費をみると、支出は3,162万円で、その内訳は委託料（散策路管理・トイレ管理・散策路清掃）2,202万円、賃貸料（土地借上・仮設建物借上）805万円で、委託料による人件費が70%、駐車場の民有地借上料などが26%を占める。しかし、近年の収入は協力金約40万円だけで、不足分は一般財源の入湯税で補っている。洞爺湖町では、地元のNPO法人洞爺にぎわいネットワークへ西山山麓および金比羅火口散策路管理と協力金回収業務（(2015年4月～11月）を642万円で委託し、各散策路入口に計2名を配置している。

表5　西山山麓火口散策路の維持管理費（2002年度）

| 項目 | 万円 | 内訳（万円） |
|---|---|---|
| 委託料 | 2,202 (70%) | 散策路管理：1,983 |
| | | トイレ管理　：119 |
| | | 散策路清掃：100 |
| 賃借料 | 805 (26%) | 民有地借上料(普通車用)：500 |
| | | 民有地借上料(大型バス用)：203 |
| | | 仮設建物借上料：92 |
| | | 携帯電話：10 |
| 需用費 | 110 (3%) | 消耗品費：50 （ﾄｲﾚｯﾄﾍﾟｰﾊﾟｰ, 清掃用具等） |
| 役務費 | 45 (1%) | 汲取り料：10 |
| | | 夜間金庫借上料：35 |
| 合計 | 3,162 | |

（洞爺湖町の資料を基に筆者が作成した。）

(3) 将来、地域住民や修学旅行生などが砂防施設内の災害遺構公園を訪れることで、いかに噴火や土石流の脅威から地域を守るのか、なぜ砂防工事が必要かなど減災対策や砂防事業の重要性を理解できる学習の場となること。地域活性化の観点から地域住民は、災害遺構を他の地域遺産と関連づけてエコミュージアムの創設を求めていくことを宣言した。

(4) 洞爺湖温泉地区の住民は観光業と関わりをもっているので、観光振興に災害遺構の町営アパートを活かすことは仕方が無いという風潮もあった。つまり、多くの観光客が洞爺湖温泉地区に戻ってこなければ、地元住民は生計を立てられなくなってしまう。後世に災害の記憶を残すという理由は仮設住宅で暮らす住民を納得させる後付けでもあった。一方で、観光業者の中には汚い物・危ない物を除去せよという考えもあった。

(5) 9月4日に西胆振6市町村からなるレイクトピア21推進協議会でエコミュージアム構想の計画を策定する部会が発足した。11月に中間報告、2002年2月に整備構想・計画を策定することとした。洞爺湖周辺地域エコミュージアムの基本的な考え方とは、地域の特性や遺産のまとまりによる領域を「テリトリー」とし、エコミュージアムの情報提供・広報運営組織の中枢機能施設を「コアセンター」、地域に存在する遺産（災害遺構）などをテーマに沿って位置づけたものを「サテライト」、サテライト周辺の散策路を「トレイル」と呼び、コアセンターやサテライトを結ぶ交通連絡網「ネットワーク」で構成されるとした。

## 引用・参考文献

虻田町2001「平成12年有珠山噴火災害虻田町復興計画」

虻田町史編集委員会2002『2000年有珠山噴火その記録と教訓』北海道虻田町

新谷融2003「流域自然緑地空間の保全技術としての治山・砂防」会計検査研究,第27号,会計検査院

碇川豊2013『希望の大槌 逆境から発想する町』明石書店

石原凌河・松村暢彦2013「維持管理の観点から見た災害遺構の保存に関する研究」,都市計画論文集,48-3,日本都市計画学会,pp.861-866

大槌町旧役場庁舎検討委員会2013「大槌町旧役場庁舎の今後のあり方に関する報告書」

大槌みらい新聞2013「旧役場庁舎前途多難な一部保存方針」http://otsuchinews.net/article/20130502/453（2017年2月検索）

大原一興 1999『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会

奥田仁2003「有珠山噴火と虻田町の観光・雇用」,開発論集,72,北海学園大学,pp.46-51

環境防災研究機構北海道2008『1977年有珠山噴火30周年記念事業記録集 火の山の囁き』環境防災研究機構北海道

高橋和雄・他3名1999「雲仙普賢岳の火砕流で被災した大野木場小学校被災校舎保存構想の策定に関する調査」,土木学会論文集, 612,1-46,土木学会,pp.359-371

中鉢令兒2003「有珠山噴火災害と住民参加運動」,日本都市学会年報,36,日本都市学会,pp.46-51

東野真和2016『理念なき復興　岩手県大槌町の現場から見た日本』明石書店

北海道2000「2000年有珠山噴火災害復興方針」

北海道「有珠山対策事業」http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kn/kss/ssg/usuzan.htm（2017年2月検索）

北海道総務部総合防災対策室2003『2000年有珠山噴火災害復興記録』北海道

レイクトピア21推進協議会エコミュージアム構想策定部会・(財)北海道地域総合振興機構2002「洞爺湖周辺地域におけるエコミュージアム構想」

レイクトピア21推進協議会2003「洞爺湖周辺地域エコミュージアム構想アクションプラン　地域資源活用構想策定等支援調査報告書」

論文

# 気づきとアクションを生み出すフューチャーセンターのセッション設計
## ―しずおか消費者教育未来会議を事例として

宇賀田　栄次*，佐藤　直樹*，天野　浩史**

### 1. 問題意識―「課題解決」に向けたフューチャーセッションの設計

公益社団法人経済同友会が2015年4月にまとめた提言では、企業や社会が求める人材について資質能力の視点から以下の4つが示された。

・変化の激しい社会で、課題を見出し、チームで協力して解決する力（課題設定力・解決力）
・困難から逃げずにそれに向き合い、乗り越える力（耐力・胆力）
・多様性を尊重し、異文化を受け入れながら組織力を高める力
・価値観の異なる相手とも双方向で真摯に学び合う対話力（コミュニケ―ション能力）

これらの背景として、「グローバル化や技術革新の波が急速に押し寄せるなかで、膨大な情報から課題を発見、設定して、その解を見出すことは容易ではない。単純に先行モデルを模倣して成功する時代ではなくなっている」（経済同友会 2015:5）状況を説いている。

大学教育においても、2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」で「グローバルな知識基盤社会や学習社会において、学問の基本的な知識を獲得するだけでなく、知識の活用能力や創造性、生涯を通じて学び続ける基礎的な能力を培うことが重視されつつある」と指摘し、「問題解決力」を含む＜汎用的技能＞＜知識・理解＞＜態度・志向性＞＜統合的な学習経験と創造的思考力＞を、学士課程共通の学習成果、いわゆる「学士力」として示した。企業や社会は、「課題（問題）解決」に向けた取り組みや教育を大学に求めていると言えるだろう。そこには答申でも触れられているように、現代社会が直面する「多様化・複雑化した課題」がある。

筆者らが関わるフューチャーセンターは、「スウェーデンを本拠地に世界20か国以上で保険事業を展開するスカンディア社が、1996年に同国ストックホルム郊外のヴィラを改築し開いた「知的資本」を創造する実験場が発祥とされる」（宇賀田 2016:39）が、野村が「『複雑な問題』を素早く解決するための場として、欧州各国の政府に広がった」（野村 2013:207）とするように、「課題解決」の場としての役割が期待されている。例えば、杉岡は、フューチャーセンターに関する実践と先行研究を分類的に整理した上で、「企業・行政・大学・NPO など組織やセクターを超えて、多様な当事者及びステークホルダーが集まり、未来志向で対話し、関係性を構築し、そこから創発されたアイデアに従い、相互協力のもと協調的なアクションを起こし、地域や組織の課題解決をする場や空間」（杉岡 2016:118）とフューチャーセンターを定義している。

しかし、フューチャーセンターを「課題（問題）解決の場」と短絡的に捉えることはできない。野村がフューチャーセンターを「組織を超えて、多様なステークホルダーが集まり、未来志向で対話し、関係性をつくる。そこから創発されたアイデアに従い、協調的なアクションを起こしていく。そのための『つねに開かれた場』」（野村 2012a:157）と捉え、筆者のひとりである宇賀田も、静大フューチャーセンターの

*静岡大学学生支援センター　**NPO法人静岡フューチャーセンター・サポートネット ESUNE

活動を通して「学生はそれぞれの課題に対して当事者意識をもって考え、主体的に関わってきた。つまり『自分事』として地域や社会を捉えてきた」（宇賀田 2016:45）と指摘するように、フューチャーセンターそのものが課題解決の役割を果たすのではなく、参加者が主体的に課題に関わり、アクションを起こしていく過程こそが課題解決につながると見るべきだろう。

さらに、ここで検討しておきたいのは、フューチャーセンターの機能限界といったことである。フューチャーセンター自体は、物理的にも存在しうる空間や場であることは間違いないが、アクションの場であるかどうかについては議論の余地があると思われる。少なくも現在知られているフューチャーセンターにおいて、アクションそのものが一時的にではなく、継続的に行われているという事例は管見の限りない。フューチャーセンターについて、特徴的活動を敢えて短く表現すれば、未来志向の対話の場ということになるであろうし、よく知られている構成要素を見ても、アクションにつながる、あるいはアクション自体を包括するような要素は見当たらない。例えば、野村（2012b:38）によれば、共通する4つの構成要素がある。＜空間＞、＜ファシリテーター＞、＜方法論＞、＜おもてなし＞である。事例として取り上げる静大フューチャーセンターの特徴として、宇賀田（2016:43）は、これらに＜学生ディレクター＞の存在と、＜ビジョンとセッションのルール＞を付け加えた説明を、野村（2012 b:38）を参考にしながら、次のように整理する。

①空間：立場の違う、多様な人たちがいつでも課題を持ち込みオープンに対話できる、創造的な空間
②ファシリテーター（創造を促す人）：フューチャーセッション（対話の場）で対話を促進する
③方法論：様々な対話の手法や問題解決の方法論を目的に応じて活用する
④おもてなし：通常の会合とは異なり、おもてなしの心で、参加者の関係性づくりを促す
⑤学生ディレクター：②の役割に加え、継続的なフューチャーセンターの運営や広報を担う
⑥ビジョンとセッションのルール：参加者が、場の目的や役割、ゴールを共有する

こうした構成要素がどのように組み合わさることで、アクションにつながっていくのかについては先行研究では詳しく論じられていない。また、フューチャーセンターで行われるセッション（対話の場）は、フューチャーセッションと呼ばれるが、フューチャーセッションをどのように設計すればアクションにつながるのかについても同様に明らかにされていない。

野村は、フューチャーセッションの典型的なプロセスとして次の5つ、すなわち＜問いの設定＞、＜多様な参加者＞、＜経験の演出＞、＜気づきの対話＞、＜協調のアクション＞を示しているが、ケーススタディによって詳細にそれらの内容が検討されてはいない。ただし、＜協調のアクション＞の説明には、「マルチステークホルダーが一堂に会し、新たな視点で一緒に行動することでより良い未来が描けるという参加者全員の深い気づきがあったとき、協調アクションによって社会を変えることができる」（野村 2013:213）とあることから、参加者の深い気づきによってアクションが生まれると解釈できる。さらに、野村は、フューチャーセッションは、「共通の認識を持つフェーズ」、「未来への洞察を得るフェーズ」、「アクションを起こすフェーズ」というステップになるとし、3つ目のステップで重要なのは「誰でも主体的にアクションを起こせるような信頼関係を築くこと」（野村 2013:214）だと説いている。

これらのことから、本稿では、課題解決に向け、信頼関係構築のもとでの参加者の深い気づきとアクションがどのようなフューチャーセッションの設計によって生まれてくるかについて明らかにしたい。これまでのフューチャーセッションの先行研究や実践報告では、ケーススタディといえども、詳細にセッションの設計が論じられることはなかった。設計について論じていくことで、フューチャーセッションの特徴とされるいくつかの構成要素が具体的にどのように組み合わさっているのか、そしてその組み合わせによって、どのように気づきやアクションが生まれているのかを検討することが可能になるだろう。さらには、前述したように、フューチャーセッションとアクションの関係についても考察を深めることができると考える。

本稿の以下の構成は、2節で、静大フューチャーセンターの取組について2016年の概要とこれまでの特徴あるケースについて示す。3節以降では、これらの取組のうち、事例として取り上げるしずおか消費者教育未来会議について調査・分析し、フューチャーセンターにおけるセッション設計の詳細と「気づきやアクション」との関連について検討する。

## 2. 静大フューチャーセンターの取り組み―2016年の活動から

静大フューチャーセンターは、2013年8月から筆者のふたり（宇賀田・天野）が静岡大学のキャンパス内で始め、これまで定例会52回、番外編25回を数える。そのうち2016年は、定例会14回、番外編8回を開催した（表1）。なお、定例会は、静大フューチャーセンターが開催主体となるもの、番外編は、他の団体等が開催主体、あるいは共同開催となるもののうちフューチャーセッションを静大フューチャーセンターが担うものとして区別している。

表1　2016年の静大フューチャーセンターの開催

| 回 | 開催日 | アジェンダ |
|---|---|---|
| 番外18 | 2016.1.15 | ＜介護の未来ナビゲーター×静岡時代×静大FC④（静岡県主催）＞ in静岡県庁　・自分達（大学生）に必要な介護学を考える |
| vol.39 | 2016.2.17 | ・国内唯一の県立劇団SPACを誇る静岡の大学生に演劇文化を根付かせるのにはどうすればよいのか |
| 番外19 | 2016.2.22 | 静大FC（松崎町主催）in 松崎町役場<br>大学のゼミやサークルで松崎町を活用してもらうには |
| 番外20 | 2016.3.12 | ＜地方創生のためのフューチャーセッション（ESUNEと共同運営）＞　in静岡商工会議所　（第1部　講演：赤澤清孝氏　第2部セッション「学生が活躍し続ける静岡の未来」 |
| vol.40 | 2016.3.16 | ・静岡市の「非定番」サイクリングコースをつくろう |
| vol.41 | 2016.4.12 | ・朝比奈大龍勢に大学生サポーターを呼びたい！ |
| vol.42 | 2016.4.27 | ・『テープ』を様々な人に知ってもらうには？ |
| vol.43 | 2016.5.19 | ・学生が三保で何ができるだろうか |
| vol.44 | 2016.6.7 | ・マイノリティ支援を考えよう |
| vol.45 | 2016.6.23 | ・エコな取り組みってどんな取り組み？ |
| vol.46 | 2016.7.14 | ・どうすれば自分の団体に人を呼ぶことができるのか |
| 番外21 | 2016.8.6 | ＜静大FC　3周年記念フォーラム（ESUNEと共同開催）＞<br>inMIRAIEリアン コミュニティホール七間町　・静大FCと静大FCを求めている人が出会うには |
| vol.47 | 2016.8.30 | ・静大FCと静大FCを求めている人が出会うには<br>（どうすれば自分の団体に人を呼べるのか　完結編） |
| 番外22 | 2016.9.1 | ＜きくがわフューチャーセンター（菊川市市民協働センター主催）＞ in 菊川市市民協働センター　・きくがわの未来を考える |
| vol.48 | 2016.9.14 | ・恋愛ネタをフューチャーセンターでどう対話できるか |
| vol.49 | 2016.9.30 | ・地域イノベーターとの出会い |
| vol.50 | 2016.10.27 | ・あなたが大学職員だったら何をする |
| 番外23 | 2016.11.15 | ＜しずおか消費者教育未来会議（静岡県主催）＞　inパルシェD会議室　・若者の「消費」を知ろう |
| vol.51 | 2016.11.17 | ・新聞の未来を考えよう in 朝日新聞社静岡総局会議室 |
| 番外24 | 2016.12.2 | ＜しずおか消費者教育未来会議（静岡県主催）＞　inパルシェ1・2会議室　・「消費者教育が劇的に広まった未来」は？ |
| 番外25 | 2016.12.20 | ＜しずおか消費者教育未来会議（静岡県主催）＞　inパルシェ2・3会議室　・「世界がハッピーになる買い物がつくる未来」に向けて今できること |
| vol.52 | 2016.12.21 | ・「オーライ東海道」「ヴァーチャルリアリティ」を使って何ができるだろう |

（2016年12月29日現在）

アジェンダと呼ばれるセッションのテーマは毎回異なり、テーマの持込者（アジェンダオーナー）も、学生、自治体職員、企業経営者、地域活動支援者など多様である。静大フューチャーセンターが「多様化・複雑化した問題」に対する解決の場として、多方面から期待されていることが分かるが、参加者の立場、年齢、職業もさまざまである。参加者の多くはテーマや課題に対する専門的知識や経験を必ずしも持ってはいない、加えて言うなら、課題解決をしたいという思いで参加している者ばかりではない。「そのテーマ（アジェンダ）に興味がある」という場合が多いが、学生なら「さまざまな社会人と話してみたい」、社会人であれば「学生とじっくり話してみたい」という思いで参加する者も少なくない。

では、なぜそのような参加者が課題解決の主体者になることができるのか。宇賀田が、静大フューチャーセンターの課題解決に向けた役割として、「学生たちが解決の主役になることではなく、人と人との関係性を高めることで地域が『地力（じりき）』を発揮するための場づくりに貢献すること」（宇賀田 2016:47）と指摘するように、学生が参加者同士をつなぐ「鎹（かすがい）機能」を果たしていると考えられる。実際に静大フューチャーセンターをきっかけに人と人がつながり、形となったケースを示しておこう。

### ①山梨の雪害をきっかけに観光まちづくりコンテストに応募した大学生たちのケース

2014年3月の定例会（vol.12）のアジェンダオーナーは山梨県出身の静岡県立大学の学生であった。当時山梨県で大きな雪害があり、この具体的な支援についてアイデアと仲間を求めていた。フューチャーセッ

ションを通した参加者の多くは「隣の県なのに山梨県のことを知らない」という気づきがあり、その後、学生数名が山梨県の大学生との観光旅行交流を数回行うようになった。そうしたなか、JTBが母体となる「大学生観光まちづくりコンテスト」で山梨県が対象となることを知った学生のひとり（アジェンダオーナー）が、静大フューチャーセンターで知り合った、大学も学年も学部も違う学生4名を集め、チームを結成し実際に山梨県に何度も足を運びながら、コンテストに応募した。入賞はできなかったが、大学のゼミ単位での応募が多いなか、異色のチーム編成で注目された。

②静岡の観光をきっかけに連携が生まれ大学の授業に発展したケース

2014年9月に開催した番外編「プロジェクト市場」のアジェンダオーナーの1人はタクシー業界のシステム開発を行う企業経営者であった。タクシーを使った観光の取り組みを広げたいとアイデアを求めていた。フューチャーセッションを通した参加者から「学生を含めた地域住民の対応も観光資源になる」という気づきがあった。半年後の2015年4月の定例会（vol.30）のアジェンダオーナーは訪日外国人観光客に静岡をもっと選んでほしいと考える観光業経営者であった。静大フューチャーセンターがきっかけとなり、両者は通訳案内士らとも連携し、客船で寄港する外国人観光客を対象として、学生がコミュニケーターとなるタクシーツアー商品を提供した。観光客と共に学生の満足度も高いことから、これをアクティビティとした実践的な英語科目が開発され、2016年度に正課授業として開講された。

以上の2例からうかがうことができるのは、フューチャーセンターという結節点を媒介にして、人と人とがつながり合い、気づきやアクションが生まれている様子である。結節点としてのフューチャーセンターの機能と見ることができるであろう。

## 3. セッションを構造的に捉える―しずおか消費者教育未来会議を事例として

### 3-1. 事例の選択理由と調査手法

本稿では、ひとつの事例を取り上げ、より詳細に、フューチャーセンターのセッションを通じて、気づきやアクションが生まれる設計について見ていきたい。事例として取り上げる「しずおか消費者教育未来会議」は、分析対象として、次のような特徴を持つ。1つは、3回連続のフューチャーセッションであったこと、もうひとつは、静大フューチャーセンターの学生ディレクターOBが全体をオーガナイズ・設計しているという点である。このような2つの特徴から、1回限りのフューチャーセッションよりもより厚みのある記述が期待できること、また、静大フューチャーセンターを対象とする場合でも、経験年数の長いOBが全体をオーガナイズしている点で、振り返りの際にフューチャーセッションをより俯瞰的に捉えることが可能となる。

では、気づきとアクションが生み出される設計を分析するにはどうすれば良いであろうか。あまた行われているフューチャーセッションを網羅的に分析することは原理的にも、物理的にも困難を伴う。またフューチャーセッション自体はデータを残すための設計が行われているわけではなく、1つのケースを取り上げる際にも、母集団を把握することが困難である。このような場合、社会科学的アプローチは、理論的サンプリング[(1)]や仮説演繹的探究などを採用してきている（cf. 佐藤 2008, 渡辺2015, Glaser & Strauss 1967）。佐藤郁哉による、理論的サンプリングの説明によれば、「理論的サンプリングというのは、少しずつデータを集めて、それをそのつど丹念に分析していく作業を通して、母集団の姿を次第に明らかにしていくだけでなく、その姿をとらえるレンズとしての理論的枠組みを徐々に磨き上げていこうという発想」（佐藤 2008:126）であるという。フューチャーセッションの分析に当てはめれば、全体像が見えないフューチャーセッションの意義や役割について、問いを限定し、かつ分析視点を明らかにして、ケーススタディなどから徐々に検討を深めるということになるであろう。本稿の課題を超えるが、佐藤郁哉の言う理論的枠組みに当たるのは、フューチャーセッションの方法論に当たり、新たな方法論的視点からの提示を目指

したい。

本稿の場合には、フューチャーセッションの「設計」に着目することで、問いの限定と分析視点を明確化しようとしている。前述の再確認となるが、気づきとアクションが生み出される設計とは何かということが問いであり、そのための分析視点を提示することとなる。分析視点については項を改めて、3-3で説明をする。

さらに、本稿では、今回の対象事例のデータ取得に当たって、通常の聞き取り調査ではなく、設計者本人を対象として、当事者とともに振り返りを兼ねたインタビューを実施し、フューチャーセッションの設計の実際に接近するというアプローチをとった。質的調査分野においては、アクティブインタビューと呼ばれる手法に近いが、本稿では、加えて実践的により良いフューチャーセッションを作り上げていこうとする意志を当事者と共有し、かつ聞き取り対象者が執筆者にも加わる点で、新たな手法を開発する手掛かりとなると考えている（cf. 佐藤 2016[(2)]）。

次項からの記述は、聞き取り時のデータとしずおか消費者教育未来会議に関する資料に基づく。

### 3-2. 事例概要―しずおか消費者教育未来会議

しずおか消費者教育未来会議は、2012年12月に施行された「消費者教育の推進に関する法律」に基づき、消費者教育に関するテーマについて、若者を中心に、自らの頭で考え、解釈し、解決策を模索する活動の場として静岡県が設置した。「若者の、若者による、若者のための消費者教育」を理念として掲げており、「静大フューチャーセンター」、「『静岡時代』編集部」、「静岡大学消費者研究サークル」の3団体、および有識者、並びに静岡県庁くらし・環境部県民生活局県民生活課の職員によるフューチャーセッションを行い、フューチャーセッションの設計と企画運営を静大フューチャーセンターとNPO法人静岡フューチャーセンター・サポートネットESUNEが引き受ける実施体制である。今年度は、筆者のひとりである天野が、設計から企画運営のマネージメント、及びセッション実施のリーダー（当日のファシリテーター含む）を担当した。

表2　しずおか消費者教育未来会議の開催概要

| 回 | 開催日時 | テーマ | 参加者数と内訳 |
|---|---|---|---|
| 第1回 | 2016年11月15日（火）<br>18:30〜20:30 | 若者の「消費」を知ろう | 17名<br>（学生9名　社会人8名） |
| 第2回 | 2016年12月2日（金）<br>18:30〜20:30 | 「消費者教育が劇的に広まった未来」は？ | 16名<br>（学生7名　社会人9名） |
| 第3回 | 2016年12月20日（火）<br>18:30〜20:30 | 「世界がハッピーになる買い物がつくる未来」に向けて今できること | 20名<br>（学生10名　社会人10名） |

静岡県では、消費者教育について、消費者トラブル防止に留まらず、エシカル消費の理解も若者を中心に進めたい考えがあったことから、事前の打ち合わせにおいて、設計者である天野は、エシカル消費を理解するために、参加者が「消費を楽しく、自分事化でき」、さらには「消費で社会を変えることができる」と実感できることをセッションのゴールに設定した。

会議の開催概要は表2のとおりである。計3回のセッションが計画され、都度、参加者を募集した。参加者は消費者教育について検討するという大枠を理解した上で、セッションに参加している。

各回のセッションの運営や具体的なテーマ設定、セッション内の時間ごとの目的が詳細に検討され、運営がされた。第1回目は、「若者の消費を知ろう」というテーマが設定され、消費という行為への気づきが共有された。この点は、後段（4-2）で、気づきのための仕掛けとして詳しく見ていきたい。第2回目は、前回の振り返りを踏まえ、消費者教育が広がった未来がテーマとなった。この回は、結論は出ず、セッションでのグループワークの大切さや消費者が生産にも影響を及ぼしているという当事者意識に対する気づき

などが共有されている。最終回の第3回目は、第2回目終了後に打ち合わせが企画側でなされ、3つの問題（フェアトレード、消費者トラブル防止、地産地消）を決め、消費者教育全体ではなく、問題ごとの未来像（今回は「未来新聞」）を描く作業がなされた。この点は、後段（4-3）で、アクションへのつながりとして詳しく見ていきたい。セッションに関する詳しい内容は、しずおか消費者教育未来会議のホームページと静大フューチャーセンター情報局のfacebookページにて公開されている。

ファシリテーションをする筆者のひとり天野

セッション中のプレストの様子

### 3-3. しずおか消費者教育未来会議のセッション構造

フューチャーセッションなどワークショップを捉える視点についてはいくつかの視点があるが、北野（2016:12）によれば次の4つに整理することが可能である。

①スキル：ワークショップの進行技術など個人スキルに着目する
②形式：双方向型の新しい学習形式としての方法論や効果に着目する
③手法：合意形成の手法や場づくりのプロセスに着目する
④組織：ワークショップを一時的な組織として捉え、組織構造やマネージメントに着目する

従来ワークショップは①～③にあるようなスキル、形式、手法として捉えられることが多く、セッションの実際を捉えることはできても、セッションの成り立ちやその後の影響をうまくとらえることができていない（ただし、③の一部では、セッションの成り立ちやその後の影響へのアプローチもあると筆者らは考える）。そこで、本稿では④の組織として捉える北野らの試みを応用し、セッションの事前と事後も捉えるため、構造的に捉えることを提案したい。事例とした、しずおか消費者教育未来会議を構造的に捉えると次のように表すことができる。

北野らは、社会学者アーヴィング・ゴフマンのドラマツルギー（演劇論）を頼りに、ワークショップの分析視点を検討している。北野らは、ゴフマンのドラマツルギーによれば、パフォーマンスが発揮される場を表舞台（レストランで言えば料理が提供される場所）、パフォーマンスが準備される場所を裏舞台（レストランで言えば料理が作られる場所）と解釈する（北野2016:23-251）。ここでは、北野らに従って、セッションを表舞台とし、セッションの事前と事後を裏舞台として、セッションの構造と捉えると、3つの分析視点が導出される。1つ目は、裏舞台のひとつである打ち合わせを中心とする事前の場面、2つ目は、表舞台であるセッション当日、3つ目は、もうひとつの裏舞台である交流・振り返りを中心とする事後の場面である。

次節では、これら3つの視点に分け、特徴的な事柄を記述しながら、いかにして気づきやアクションを生み出そうとしているのかについて検討していきたい。その際に、参加者の気づきや感想をあわせてエビデンスとして示していく。

図1について説明を加え、以下の3つの分析視点に沿った検討につなげたい。まず、1つ目の分析視点で

ある事前の段階では、アジェンダオーナー（この場合は静岡県）とディレクター（主に天野）、静大フューチャーセンターをはじめとする学生団体やプロジェクトメンバー（NPO、行政、企業）が加わって、セッションの詳細な打ち合わせ、すり合わせが実施されている。ここで、天野は、次節4-1で確認するように設計に5つのキーワードを埋め込んでいる。次いで、2つ目の分析視点は、セッション当日（計3回）である。セッションでは、アジェンダが提示され、ディレクターによるファシリテーションのもと、参加者による対話が進行する。気づきが生まれる様々な仕掛けが遂行されているが、それについては4-2にて検討をしたい。最後に、3つ目の分析視点は、セッション後に当たる、事後に実施される振り返りや交流である。4-3で検討するが、どのようにして気づきとアクションにつながるような流れが作り出されているかを見ていきたい。

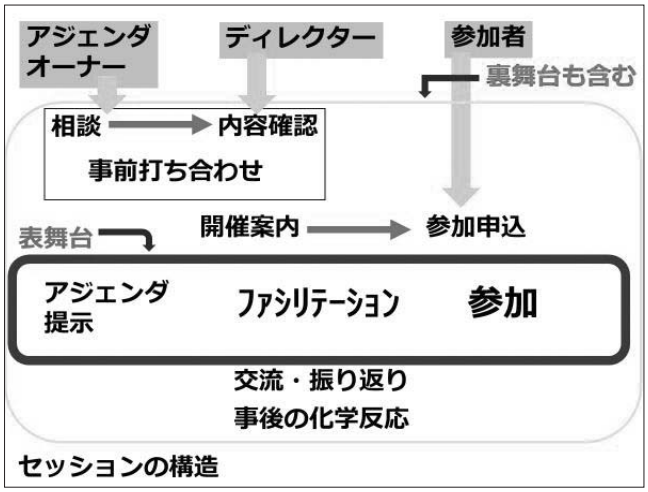


図1　しずおか消費者教育未来会議のセッション構造

## 4. 参加者をモチベートする設計―「自分事化」という目的

### 4-1. 設計の留意点―「自分事化」の論理

設計の際に、留意した点として挙げられているのが「自分事化」である。天野の言葉によると、「テーマや問題を自分の私生活の中の出来事として置き換えることができる」、「自分ならばどうするかという問いに答えを出すことができる」、すなわち「当事者意識の醸成」ということである。こうした「自分事化」は、フューチャーセッション自体の大きな目的でもあるが、天野は、「自分事化」が効果的に生じるように、木下（2007:13-15）が提唱するワークショップの特徴である5つのキーワードを設計と実際の運営に盛り込んだという。5つのキーワードとは、＜身体性＞、＜協働性＞、＜創造性＞、＜共有性＞、＜プロセス重視＞である。各キーワードの意味内容とセッションでの活用を表化すると次のようになる。

表3　設計時に留意した5つのキーワードの内容と活用例示

| キーワード | 内容 | 例示 |
|---|---|---|
| 身体性 | 身体まるごとの知覚と働き（食べる、動くなど） | フリータイムにフェアトレードチョコを試食、グループサイズの変更 |
| 協働性 | 参加者が協力をしあってつくりあげる | チェックイン時に確認、場のルール設定、参加者同士の協力によって完成するワーク設計 |
| 創造性 | 目標に向かって前向きに積み重ねていく | チェックイン時に確認、場のルール設定、個人ワークとペアワークの繰り返し |
| 共有性 | それぞれの意見、情報をシェアする | チェックアウトを合間、終わりに設ける |
| プロセス重視 | 結果ではなく、その過程に目を向ける | まとめのフレームを準備 |

セッション特有の用語も含まれているので、順に解説を加えたい。まず、身体性とは、体を動かしたり、食べるなどの五感や全身を使った行為を指す。セッションでは、フリータイムの時間が何度か取られ、フェアトレードチョコや地産地消商品などを試食し、味覚を伴ったアクションの体験があった。また、2人、3人、会場全体など、グループサイズの変更をして、セッション中に移動する時間があった。

次いで、ファシリテーション用語で、セッションのはじめに位置づけられるチェックインと、セッションの中途、ないし終わりに位置づけられるチェックアウトというスキルがある。

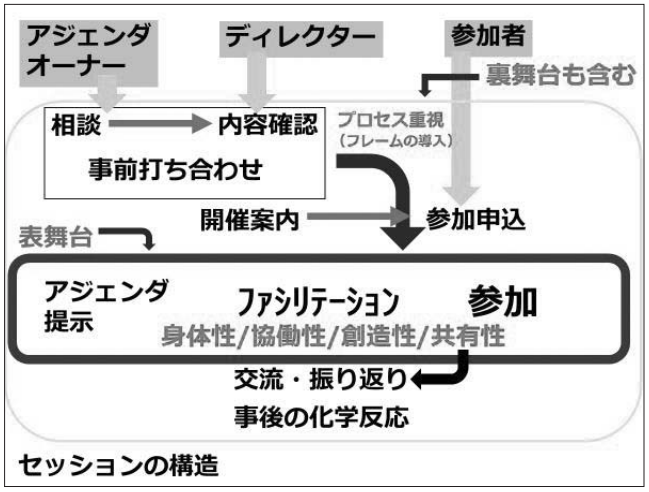


図2　5つのキーワードを盛り込んだセッションの構造

チェックインとは、セッションの導入部に当たり、その場にいる参加者全員の名前（あだ名）がわかるようにすること、目的やその場が作られている理由、ゴールの理解やルールの理解に充てられる。チェックアウトとは、セッションの切れ目や終わりに当たり、個人の気づきを振り返り、共有することに充てられる。気づきの共有のことを、気づきを収穫するという意味で、ハーベストと呼ぶ。気づきの共有における「気づき」は、やや広めの意味内容を持つ。参加者各人の思い付きをきっかけとしているため、思い付きの範疇を出ない気づきもある。しかしながら、複数の気づきの中には、セッションの狙いと合致する気づきがあり、思い付きの範疇を超えるものがある。それらの気づきのことを、本稿では特に問いの対象になる「気づき」として捉えている。表3にあるように、チェックイン時には、協働性や創造性の意味内容がチェックインの説明とともに同時に確認され、チェックアウト時には、共有性の表現として、各自A4用紙に自分の気づきを記入しグループ内で共有が図られている。最後に、プロセス重視として、セッションごとに、結論付けていくための枠組み＝フレームがファシリテーターから提示されている。このことによって、その日の結論に向けた思考プロセスが可視化され、グループ間でも比較できるようになっている。

図2は、5つのキーワードをセッションの構造に盛り込んだものである。ここでどのように自分事化が起こるかについて仮説立てをしておきたい。フューチャーセッションにおいて自分事化（当事者意識の醸成）が生じる対象は、参加者にとっては馴染みの薄い事柄や普段は意識をしない事柄であり、あるいは専門的に知識を持っている者にとってもアプローチの方法や視点の異なった見方を要求される事柄である場合もある。そうした馴染みの薄い事柄を、自分にとっての問題に置き換えることが、フューチャーセンターの重要な役割である。フューチャーセンターの活動内容は、この文脈では、その時に集まった人々が馴染みの薄い事柄について話し合い、オンタイムで意見を協働で可視化・共有し、ある地点までの結論を導き出そうと創造性を発揮するというものであるということになるであろう。また、こうした場には、物理的に存在する身体活動の重要性も忘れてはならないだろう。

4-3で詳細を検討したいが、天野の事前準備には、プロセス重視を目的としたフレームがあった。フレームのうち、最も特徴的であるのは、未来新聞の作成である。グループで議論した未来が実際に起こったとしたらという仮定で、それが一面で取り上げられた新聞記事を作成する。本事例では、３つの問題が議論され、共通のフレームで未来新聞が作成された。各グループでは、協働作成・共有された未来新聞という未来の世界（創造性の発揮）を対象化し、かつ自分ならばどうするかを考えるという時間が作られる。そこには、リアルではないヴァーチャルな自分が未来の世界の住人として存在している。つまり、どんな思考・行動をするのか、セッションを通じて参加者は想像することになる。

自分事化を言い換えるならば、対象化された未来の住人である自分の思考・行動の想像とでも表現することができるだろう。自分事化が生じるためのきっかけは、「未来世界の対象化」である。フューチャーセッションにおいては、それは様々なファシリテーション技術とともに、参加者の協働・共有による創造性の発揮によって成立する。協働・共有という点では、未来世界の住人には、自分だけではなく、その場にいる他者も含まれる。ヴァーチャルな自分の他に、多くのヴァーチャルな他人が存在するということも未来世界の充実には欠かせないだろう。この意味では、自分事化のきっかけは他人事であるとも言えるかもしれない（この点は、さらに、社会学、および心理学でいう社会化論、例えば、模倣行動やモデリング

の理論との対照によってより厚みのある分析になるであろう）。

以下では、自分事化の仮説、すなわち「未来世界の対象化」について、1）気づきのための仕掛け、2）アクションへの係留という視点から検討したい。

### 4-2. 気づきのための仕掛け―ファシリテーションスキルの駆使

気づきのための仕掛けについて検討するために、ある場面にフォーカスを当てて検討したい。第1回目では、セッションの終了後に、次のような振り返り（気づきの共有）があった。「私って自分勝手な消費者だなぁ。無知って罪なのかも…？→教育が大切ね。」、「予算との戦い（選びたくても…）」、「やっぱりちゃんと選んで買ってる!! !!、自分の中の基準がある！ものによって値段、質、けっきょく自分ゆうせん（フェアトレードとかしっててもう）」、「何も考えていない。けど、何を考えているか考える機会もない、と気づいた」、「割と関心があると思っていたけど…無意識の行動に気が付いた」といった風である。これらは、自身の消費の振り返り、この場合は、消費をする際の自分自身の消費対象の選択理由について検討したことが示されている。

第1回目のセッションでは、まず、「1週間で買ったもの」を付箋に書き出し合うという作業が行われている。その後、全員で買い物リストが共有され、一旦中座し、消費者教育に関して一定の知見のあるメンバーから話題提供があった。そこで問いが再度設定され、「若者は消費するときに何を考えているのか」について、グループ別に対話が実施された。この流れは、チェックアウト→テーマに関するインプットと問いの設定→チェックアウトという風に解釈することができる。

消費行動の理由を考えるために、実際の消費対象物のリストアップを踏まえて、テーマに関連する問いの設定、この場合は「それらの消費の際に想定していること」という問いが出される。その問いに沿って対話が行われ、チェックアウト時に、個々の気づきが共有されるという流れである。消費→消費理由という2段階のチェックアウトを通じて、セッション終了後の気づきにつながっていると考えることができる。

2段階の流れについては、例えば、最初から消費者の消費理由を対話するよりも、段階的に思考・対話することで、その都度の問いがより明確になっていると考えられる。そのため一定数の参加者に同様の傾向の気づき―この場合は、消費理由への焦点化が見られるのではないだろうか。表3で示した5つのキーワードについて言えば、チェックアウトに代表される共有性だけではなく、チェックイン時に確認されている協働性や創造性を発揮しやすいように、グループサイズが変更（最初は全員で次はグループに分かれて）されたり、セッション終了時のアウトプットのフレームがあらかじめ提示されていることも、より思いの強い（単なる思い付きを超えた）気づきを促される仕掛けとして加えておいてよいだろう。

以上は、しずおか消費者教育未来会議の一場面の検討に過ぎないが、消費理由への気づき・見直しによって、消費を今後どうしていくかという動機付けが起こっていることが確認できるであろう。次いで、そうした消費の見直しという動機付けがどのようにアクションにつながるか検討してみたい。

### 4-3. アクションへの係留―スキルと目的の融合化

第3回目のセッションは、前述の通り、未来新聞が作成されるワークが行われた。各グループで、実現する未来を考え、それを報道する未来新聞の見出しや記事内容を対話形式で検討した。「フェアトレード」グループでは、「フェアトレード」が定着し当たり前になる未来を想像した。「フェアトレード商品が無くなる？」というコピーが付けられ、消費者志向の変化や企業の取引の見直しや商品価格の適正化が起こることを記事にした。「消費者トラブル防止」グループでは、消費者トラブルの大きな問題点のひとつを、「高齢者が孤独」であるという点に定め、消費者同士がICTによって結ばれ、国際的にも連携が図れるような未来を描いた。「地産地消」グループでは、静岡の代表的な水産物と想定されている「しらす」が、静岡県産でないものも多いことに着目した。同問題に関する高校生の団体が設立され、農家や商店主が興味を示し、大きな動きになる未来を描いた。

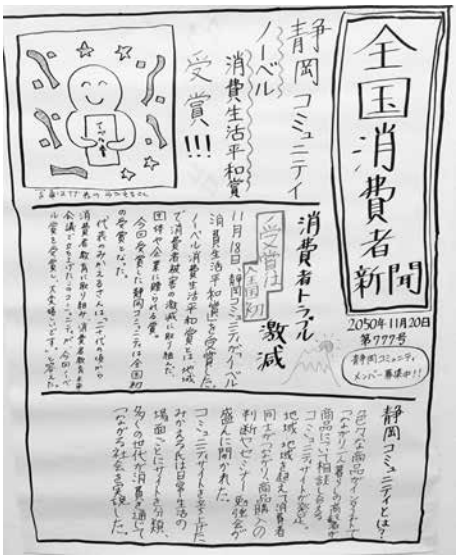
セッション終了後の振り返りに、アクションを明示する参加者がいた。

学生時代の経験から「消費者教育＝フェアトレード」しか浮かびませんでしたが、もっとすそ野の広い教育なのだと、今回で知りました。“社会を良くしたい”と思っても、自分の無力さに一歩を踏み出すことをためらってしまうことがよくありますが、「自分の友だち1人に話してみる」それだけでも、世の中を変えるひとつの大事なアクションなのだと思わせてもらいました。自分にできることを少しずつやってみたいと思います。

ここでは、ヴァーチャルな自分が積極的に行動を起こしている様子が語られている。そのほかの振り返りは、アクションを明確に示唆することはなかったが、その一歩手前のアクションへの関心や想像を示す振り返りはあった。

なお、セッション時の振り返りには具体的アクションを明示しなかったが、このセッションを通じてエシカル消費への興味関心が高まった参加者が、後日、浜松市で行われた「はままつエシカルビジネス会議2016」（主催：公立大学法人静岡文化芸術大学下澤研究室、はままつフェアトレードタウン・ネットワーク）へ参加した。

セッション当日にはアクションへの関心や想像の段階でも後日にアクションにつながることがある。そうした意味でも、アクションへの関心や想像を示す振り返りも、アクションにつながるとして積極的な評価をして良いのではないだろうか。これらのアクションへの係留には、ファシリテーション技術（フレームの提供＝未来新聞）と、当初設定した目的「消費で社会を変えることができる」との融合があったと考えられるであろう。未来新聞に描かれた未来の住人として、自分自身をヴァーチャルに想像することでアクションへつながっているのである。



未来新聞の一例

以上のように、前節での気づきの発生からアクションへの係留までの状況を検討してきた。最後に、本稿で検討してきたフューチャーセンターのセッション設計について、未来世界という観点からまとめたい。

## 5. 未来世界というヴァーチャルリアリティの可能性

『問題解決フレームワーク大全』のなかで、堀は、フューチャーセンターについて、「フューチャーサーチでは“現在”の利害関係者を集めます。それに対して“未来”の利害関係者を集めるのが、フューチャーセンターの取り組み」（堀 2015:195）だとする。このことを本稿の検討から解釈すると、未来のステークホルダーとは、未来世界の住人のことを指す。そして、その住人は、フューチャーセンターに参加した一人ひとりのヴァーチャルな姿である。個人の回想では限界があるが、その回想の世界に他人を介在させることができる。フューチャーセンターのセッションでは、協働性・共有性で他人の介在を可能にし、創造性を活かすことで、その介在を未来へと向けることが可能である。無論、現実のセッションでは、成否があるであろう。またすべての参加者にそれが感じられるという保証はない。しかしながら、本稿で検討してきたように、様々なファシリテーション技術が駆使され、参加者の想像力や創造力を掻き立てるような設計（本稿の事例の場合には5つのキーワード）によって、未来世界の出現が可能となる。未来世界とは現実にはないという意味で、文字通りヴァーチャルリアリティである。その可能性が出現することまでは本稿で確認することができた。冒頭で示した構成要素に沿っていえば、＜ファシリテーター＞や＜学生

ディレクター＞が、当事者とともに、＜方法論＞や＜おもてなし＞を駆使した「設計」を行う。セッションの最中、時には、セッションの進行度に応じて、「設計」の修正（本事例の場合には第2回目の結果を受けて第3回目の変更）も余儀なくされるが、＜ビジョンとセッションのルール＞を踏まえた参加者間の協働•共有（＝信頼関係の構築）によるワークが実施され、ゴールが目指される。そうした＜空間＞がフューチャーセンターの内実である。

気づきとアクションを生み出すセッション設計の意義の一端を明らかにしたところで、稿を閉じたい。

## 註

1）理論的サンプリングについては、グラウンデッド・セオリーとの関連で、グレイザー＆ストラウス（1967）を参照のこと。他にも渡辺（2015）は、社会学者アーヴィング・ゴフマンの調査方法論との比較検討を行っている。

2）筆者のひとり佐藤（2016）が、不十分ながら、分野が異なるが、社会運動（NPOやNGO活動も含む）に対する調査方法論の新たな視点について同様の方向性で検討を始めている。

## 引用・参考文献

宇賀田栄次　2016「地方国立大学におけるフューチャーセンターの意義と役割―『静大フューチャーセンター』の実践を通じた地域連携の観点から」『静岡大学生涯学習教育研究』第18号, pp.41-49.

北野清晃（宇野伸宏・久保田喜明監修）　2016『組織論から考えるワークショップデザイン』三省堂.

木下勇　2007『ワークショップ　住民主体のまちづくりへの方法論』学芸出版社.

Glaser B. & A. Strauss　1967　The Discovery of Grounded Theory, Aline.(= 1996, 後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ型対話理論の発見』新曜社).

公益社団法人経済同友会　2015「これからの企業・社会が求める人材像と大学への期待～個人の資質能力を高め、組織を活かした競争力の向上～」（https://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2015/pdf/150402a_02.pdf　2017.2.4）.

佐藤郁哉　2008『QDAソフトを活用する実践質的データ分析入門』新曜社.

佐藤直樹　2016「ホネット理論の運動研究への応用可能性―「方法論としての承認論」の可能性」社会運動・集合行動研究ネットワーク・キックオフカンファレンス第1セッション　2016.10.07

杉岡秀紀　2016「京都市におけるフューチャーセンターを活用した次世代市民協働政策のための一試論」『同志社政策科学研究20周年記念特集号』, pp.115-125.

中央教育審議会　2008「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm　2017.2.4）.

野村恭彦　2012a『フューチャーセンターをつくろう』プレジデント社.

野村恭彦　2012b「フューチャーセンターの本質：地域にフューチャーセッション文化を生み出す」公職研『地方自治職員研修』第45巻12号（通巻638号），pp.38-40.

野村恭彦　2013「フューチャーセッションによる参加型イノベーションの可能性」『研究　技術　計画』vol. 28, No. 2, pp.207-218.

堀公俊　2015『問題解決フレームワーク大全』日本経済新聞社.

渡辺克典　2015「ゴフマネスク・エスノグラフィー」, 中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン―やりとりの秩序の社会学』, pp.26-45.

博物館フォーラム

# ジオパークにおける博物館の役割と学生参加のあり方
## ―伊豆半島ジオパークとふじのくに地球環境史ミュージアムについて―

| | |
|---|---|
| 日　時 | 2016年1月28日（木）12：40～14：30 |
| 会　場 | 静岡大学共通教育B棟301教室 |
| 講　師 | 鈴木　雄介（伊豆半島ジオパーク推進協議会専任研究員） |
| | 岸本　年郎（ふじのくに地球環境史ミュージアム准教授） |
| 発表者 | 井口　美奈（登呂博物館ボランティア・静岡大学人文社会科学部2年） |
| パネリスト | 上記3名および坂内沙紀（登呂博物館ボランティア・静岡大学理学部2年） |
| コーディネーター | 石川　宏之（静岡大学イノベーション社会連携推進機構准教授） |

講演 1

# 伊豆半島ジオパークは地球の活動を伝える博物館になりえるか

鈴木　雄介（伊豆半島ジオパーク推進協議会　専任研究員）

## ■伊豆半島ジオパークの概要

伊豆半島は、本州からはるか遠く離れた南の海からフィリピン海プレートに乗って、日本の本州に衝突して誕生しました（図1）。本州の中でも、まったく違う成り立ちを持った半島です。それゆえに災害もありますが、面白いことがあったり、きれいな景色があったり、非常に多様性に富んだ半島です。これを楽しもうというのがジオパークの趣旨です。

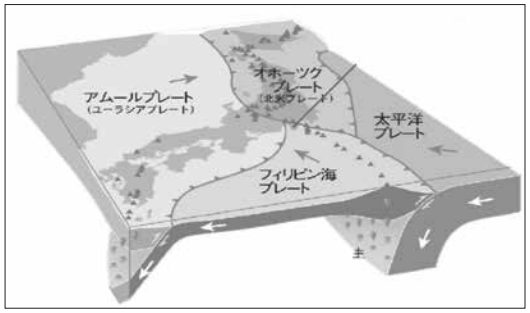



図1　日本周辺のプレートと伊豆半島　小山真人作成を一部加工

伊豆半島には細かい行政体があって、15市町があります。面積は結構広く、人口も一つ一つの自治体はとても少ないですが、合計すると70万人近くにもなります。この15市町は今までなかなか一体になれなかったのですが、伊豆半島が南からやってきた大地であることをテーマにして、15市町をつなぎながら、住民あるいは観光客に対してさまざまなことを伝えようとしています。

ジオパークは地質公園と捉えられることが多く、新聞などでもそう書かれることがありますが、実際は地質だけを対象にしているわけではありません。半島のほぼ中央にある浄蓮の滝や鉢窪山を事例としてそのことを見ていきたいと思います。

伊豆半島には、小さな火山があちこちに生まれるという変わった特徴を持つ、伊豆東部火山群という活火山があります。この活火山が1万7000年前に噴火したとき、鉢窪山という小さな山ができました。伊豆半島に行ったことがある方はご存知だと思いますが、どこもかしこもぐねぐね道で、車で走ると結構大変です。しかし、浄蓮の滝付近にはわずかですが平らな土地があります。鉢窪山から溶岩が噴出し、険しい谷を埋め立てて、平地を生み出したのです。これが茅野の溶岩台地で、今は田んぼが作られたりして観光地にもなっています。つまり、鉢窪山が噴火しなければ、ここに田んぼを作ることはできなかったわけです。また、溶岩はある程度厚みを持っているため、溶岩流の末端には崖ができ、そこに滝ができることが多いです。『天城越え』で有名な浄蓮の滝も、鉢窪山の噴火が作った滝です。伊豆のほかの地域を見ると、他にも河津七滝などの滝があり、そのうちの幾つかは溶岩の縁にかかっています。

さらに、溶岩流には多くの亀裂があるので、雨が降ると亀裂の中などにたくさんの水をかん養し、溶岩流の末端部から非常に豊富な湧水が生まれます。富士山の周りに湧き水が多いのはそのためですが、伊豆の火山でも同じことが起きています。伊豆では、そうした豊富な湧き水と気候を利用して、ワサビ田を作っています。ワサビを育てるにはきれいな水が流れ続けていなければならず、たくさんの湧き水が必要です。ですので、これも鉢窪山の噴火のおかげといえるかもしれません。

その溶岩台地の上にある茅野集落のカフェに行くと、鉢窪山から噴出したスコリア（scoria）という火山弾や溶岩の破片などを積み上げて作ったピザ窯があります。オーナーいわく、溶岩は多孔質なので保温性がいいそうです。台地の上には田畑があり、地場の食材を栽培しているので、そうした食材をたくさん載せてピザを焼いています。

## ■ジオパークは学びの機会

このように、1万7000年前の火山噴火によって、非常に険しく人が住むことなどできなかった所に溶岩の台地ができ、人が住むようになりました。たくさんの湧水や美しい景色など多くの恵みがあり、美味しい食べ物が食べられる、ジオパークとはそうした自然と人々の暮らしをつなぐ物語づくりそのものです。つまり、地場の面白いものをきちんと科学的に明らかにしつつ、それを大切にして、持続的に地域を回していく取り組みです。ですから、ジオパークのジオは地質だけでなく、地酒の「地」、地の物の「地」、地域文化の「地」だともいえます。例えば、火山があれば温泉が湧き、温泉が湧けば観光が生まれます。一定の動植物が住んでいれば、それを特産品にもできます。そうして地面からつながっているさまざまな物事をストーリーで結びつけて、楽しく学びながら地域づくりを行うのがジオパークです（図2）。

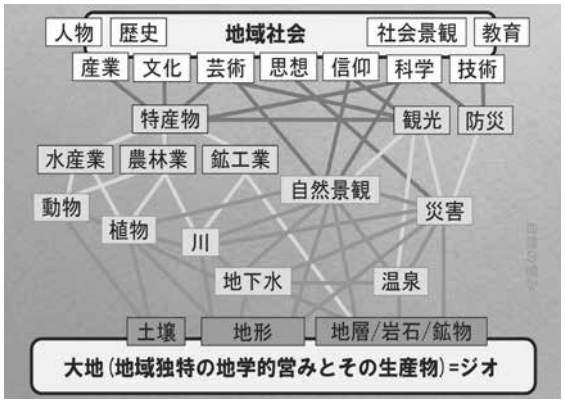



図2　地面の上にあるものぜんぶジオパーク
小山真人作成を一部加工

それは、伊豆のことだけを知るにはとどまらないと思います。例えば、伊東市に大室山という小さな山があります。4000年ほど前に噴火した火山です。この火山が噴火したときも溶岩が流れ出し、海を埋め立てて、日本の領土を少しだけ広げました。そこに新しい土地ができ、城ヶ崎海岸は大きな観光地となっています。さらに世界を見渡すと、大室山にそっくりな成り立ちの山があちこちにあります。メキシコのパリクティン（Paricutin）という山は、トウモロコシ畑のど真ん中でいきなり噴火が始まり、溶岩がたくさん噴出し、数年で山ができました。それと同じ様子を、大室山を見ることで学べるかもしれません。

図3　西之島　2014年6月13日　　撮影：海上保安庁

大室山から城ヶ崎海岸まで、楽しめる場所がたくさんあります。溶岩でできているので岩がごつごつしていて、とても面白い海岸です。非常に特徴的な地形をしていて、溶岩流が海に流れ込んだ形跡が残っています。先に流れ込んだ溶岩はすぐに冷やされてそこにとどまるので、それを避けながら後から流れ込んだ溶岩が手のひらを広げるようにして流れ出たという特徴がよく分かります。

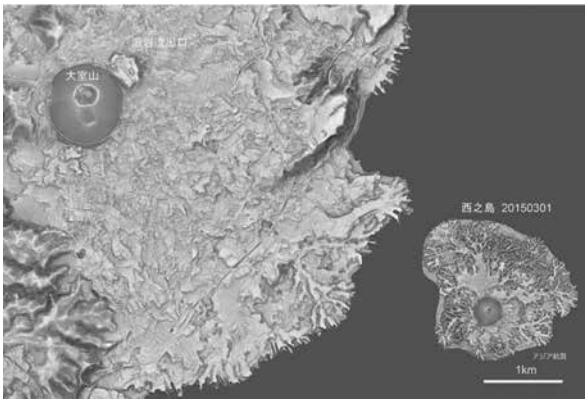



図4　西之島と大室山　同一縮尺で比較　　作成：千葉達朗

これととてもよく似た状況なのが、伊豆半島から800km南にある西之島です。最近噴火が止まってしまいました。図3は一昨年（2014年）の写真なので、まだだいぶ小さいですが、真ん中に大室山にそっくりな山があって、周りに溶岩流が流れています。同じスケールで地図を作ると図4のようになり、大室山とよく似た山が真ん中にあります。どちらも海に溶岩が流れ込んでいます。西之島まで見に行くのは難しいですが、伊豆のことを知れば、西之島で何が起こっているのかとてもよく分かります。こうした地元の自然から世界で起こっていることを学

んだり、世界の出来事から地元で起こってきたことを学ぶことで、自然災害や環境保全のことをより考えるきっかけにもなります。

## ■ジオパークの使命

ジオパークの活動には、三つの大きな柱があります。教育、保全、地域振興です。教育というと、学校で勉強するイメージを持たれるかもしれませんが、「知る」と言い換えるといいでしょう。その景色がどうやってできたのか、その景色があることでわれわれの生活がどうなっているのかを知ることが最初です。もし溶岩流の湧水がなくなってしまったら、ワサビを作れなくなると知っていれば、溶岩流の作った地形や湧水を大切にしなければならないということが分かるでしょう。知ることで、大切なものであることが判断でき、保全する取り組みにつながっていきます。しかし、教育と保全だけをしていても、地域はしんどくなるばかりなので、守ったものを使って、例えばワサビ栽培で地域を盛り立てていったり、観光客を呼んで景色を見ていただいたりします。そういうサイクルを回すことがジオパークの使命です。地域の大切なものを守りながら、持続的に地域あるいは地球全体を盛り上げていくという壮大なテーマがあります。

世界ジオパークはユネスコが認定を進めていて、世界中に111地域あります。各国には国内ジオパークというものもあって、日本には39地域あり、さまざまな活動をしています。

## ■地域をまるごと使って地球の姿を伝えるために

地域を使って地球の姿を伝えるためには、さまざまな工夫をしなければなりません。一つは、話のうまい人が、お客さんや地域の人に伝えていくことです（図5）。話す人は非常に重要なので、認定ジオガイドという制度を作りました。試験に合格した方を認定し、現在140人ほどのガイドさんたちが活動しています。また、書籍、パンフレット、スマートフォンのアプリなどもあります。

図5　ジオガイドによる活動風景

私たちは伊豆半島全体を博物館として捉えていきたいと思っているので、動線を作る必要があります。例えば三島の道の駅などには総合案内的な看板があって、どこに行くと何が見えるかが書いてあります。行きたいエリアに近づくと、エリア案内があって、伊豆半島を10等分したぐらいのエリアごとに紹介してくれます。さらに目的地に近づくと、歩けるぐらいの単位でサイト案内が作られていて、そこで見られる景色やグルメ、アクティビティを紹介しています。さらに個別のポイントまで行くと、目の前にあるものを解説しています。このように、伊豆全体からエリアに入って、サイトを紹介し、最後にポイントを紹介するという形で段階的に案内することで、ガイドがいなくてもある程度、地域を楽しめたり学習できるように設計してあります。それから、道路に誘導看板なども必要です。

図6　かわかんじょう

もちろん、ここは「お勉強パーク」ではないので、景色を見たあと、そこでいかに楽しむかということも紹介しなければなりません。例えば城ヶ崎海岸ではシュノーケリングやスキューバダイビングが盛んなので、次の行動につなげるための情報も積極的に入れています。

また、地学や生き物の生態だけでなく、災害伝承にも取り組んでいます。看板に狩野川放水路という防災施設がなぜ必要なのか、それがあることで人々の暮らしがどう助かっているのか、自然とのかかわりはどうなっているのかといったようなことが書いてあります。図6は「かわかんじょう」という行事です。狩野川という川は昔から氾濫が多く、たくさんの人が亡くなっているので、死者を弔ったり、氾濫を防い

だりするための儀式です。こうした防災施設や災害の記憶、地域の行事や神事なども、地球の動きや伊豆半島の成り立ちを語るツールと言ってもいいかもしれません。

その他に、各地に小さなビジターセンターが幾つもあります。人が配置されているところもあって、パンフレットをくれたり、道案内をしてくれたりします。ビジターセンターは現在10カ所にあって、それらを束ねる中央拠点のミュージアムが今年（2016年）4月、ジオリアという名前で修善寺にオープンします（図7）。もちろん展示施設もありますが、大学生や地域の自然を調べている人たちが作業できるフィールドラボ的な機能も併設します。

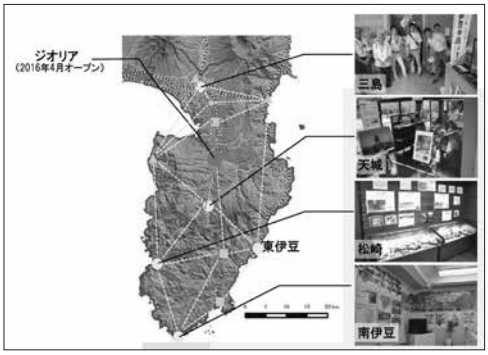


図7　ビジターセンター　ジオリア

## ■ジオパークを始めて何が起きたか

ジオパークの見せ方については、まだ試行錯誤しています。「東」「西」「南」「北」と書かれた伊豆半島ドライブジオマップにもいろいろな細かい書き込みがしてあるように、移動中にも見てほしい景色があるわけです。そうすると、だんだん目が景色を読めるようになっていきます。

図8　ジオガシ

これまで、ジオパークでの活動に5年ほど一生懸命取り組んできました。まず、ジオガイドがたくさんいるので、商品として多くのジオツアーができました。カヤックで崖を見に行って、洞窟探検をしたりするのですが、遊びの一環として地球を学んでもらっています。常時実施しているツアーもあれば、時々実施するというツアーもあります。

他にも、「ジオガシ」というお菓子ができました（図8）。ジオガイドの女性2名で作り始めてくれたもので、枕状溶岩や斜交層理、スコリアなど、地学の景色は特徴的な形状をしているので、それをクッキーやキャンディーにしてくれました。解説が裏面にきちんと書いてあって、地図がついているので、そこに遊びに行けるという優れものです。また、「伊豆ジオパン」という伊豆半島の形をしたパンもできました（図9）。

図9　伊豆ジオパン

ここで私が言いたいのは、何でもありだということです。入り口はたくさんあって、そういうところから入ってもらってもいいのです。すると、高校生たちも語りだしました。彼らは自分たちで勉強し学会発表もして、その成果を持って地元の小学校で出前授業をしたり、ジオツアーを運営したりしています（図10）。そういった高校生たちの動きが活発になると、大人たちも何かしなければいけないと思うようになり、学びの機会が増えました。静岡県教育委員会が県内の高校生を集めて、伊豆半島ジオパークで自然や防災を学ぶ取り組みも行っています。

生け花も生けられました。ジオガイドの中に生け花の師匠がいて、生け花を使ってジオサイトを再現しました。いろいろな特技を持った方がいらっしゃって、絵本を描いた方もいるし、お菓子を作った方もいます。そうした多様な入り口からジオパークを楽しんでいきます。

図10　高校生による取り組みの様子（左：学会発表、右：小学生とその親を対象としたジオツアー）

地域課題を解決するために、大学とつながりが生まれ始めています。今日の取り組みもその一つです。災害体験の聞き取り調査などを静岡大学などと連携して進めています。私たちは別に災害のことを強く言っているわけではないのですが、自然のことが分かっていると、自然災害のことが何となく分かってきます。ですので、防災の取り組みにきちんと自分事として参加してくれる住民が増えていると思います。

図11　被害地図ワークショップの様子

図11は西伊豆の被害地図作りワークショップの様子です。みんなで町歩きをして、避難経路を検討していくものです。小学生からおばあちゃんまでが参加していて、中学生は走って避難所に着くまでの時間を計ったりしました。老若男女が参加するのは面白いことで、「もう私は逃げられないから、おうちで死ぬんだわ」と言っていたおばあちゃんが、孫と一緒に歩くことで「逃げられるような気がする」と言うようになりました。そういった人々のつながりをつくる活動にも広がってきていると思います。

図12　町内会と高校生による保全活動

大切なものがあることが分かると、保全活動も自主的に始まっていきます（図12）。法律などによって守るということももちろん大切ですが、「展示物」は地域の人が価値を知って自分たちで守るというのが、ジオパークではとても大切と考えています。実際に町内会と高校生が一緒に清掃活動をしたり、崩れそうな崖を保全したりする取り組みも始まっています。

NHKの番組「ブラタモリ」も来ました。熱海の放送回に私が案内して、温泉地熱海を支えたものを紹介しました。ブラタモリは地質や地形だけでなく、歴史も交通も何もかも取り込んで、その地域のことを見ていこうとしています。それはジオパークにとてもよく似ているのではないかという話をNHKのスタッフとしていたら、「まさにそんな感じですね」とおっしゃっていました。

## ■おわりに

ジオパークは、私たちのような専門家が行う活動ではありません。舞台作りは私たちがお手伝いしますが、その上でさまざまな人が好きな方法で踊っていただければいいのです。あるところまでいくと、勝手にさまざまな人たちが動きだすタイミングがあると思います。そうした仲間たちをつないでいって、活動を継続していかなければならないし、仲間をどんどん増やして、楽しく取り組めるような雰囲気づくりや輪づくりをもっとしなければならないと考えていますが、なかなか行き届いているとはいえない状況です。

最後に、伊豆半島ジオパークの地域はいろいろな課題を持っています。観光も、保全も、商品開発も、教育も、防災も、すべて取り扱っているので、さまざまな分野で、どんな人でも参加できると思います。大学生には少しだけ助成金も出ていて、交通費ぐらいにはなると思うので、卒業論文や修士論文のテーマとして伊豆半島地域に興味を持った方は、ぜひ声を掛けてほしいと思います。

## ■質疑応答

**会場**――伊豆半島は世界ジオパークを目指して活動されていると思いますが、そのための課題などを教えていただけますか。

**鈴木**――世界ジオパークには認定制度があります。伊豆半島には博物館がなく、自然科学を扱った大学が

ないので、その中でいかに学術的な価値をきちんと高めていくかというところも強く言われています。そういった意味でも、小さいながらミュージアムがオープンしますし、うまく連携して、皆さんの活動を入れていきながら、学術的な価値を高めていく努力もしなければならないと思います。

講演２

# ふじのくに地球環境史ミュージアムの挑戦

岸本　年郎（ふじのくに地球環境史ミュージアム准教授）

私は昆虫を研究しています。子どものときから虫が好きで、大学で9年間研究して学位を取り、自然環境保全関係の財団法人に就職した後、昨年（2015年）、静岡に来ました。その中で、自分がただ好きで研究していた虫が、社会につながるにはどうすればいいか、ずっと考えてきました。

## ■ふじのくに地球環境史ミュージアムの概要

2016年3月26日、静岡大学に隣接して静岡県立の自然系博物館「ふじのくに地球環境史ミュージアム」がオープンします。図1がふじのくに地球環境史ミュージアムの全景です。元は静岡南高校があった場所で、静岡大学からは目と鼻の先です。皆さんとはぜひいろいろ協働していきたいと思っています。昨年（2015年）4月に開設し、組織としては既に動き始めています。旧校舎である既存施設を有効活用するとともに、静岡大学や静岡県立大学、登呂博物館、県立美術館など有度山を中心とした高等教育機関、施設、研究所と連携していきたいと考えています。

図1　ふじのくに地球環境史ミュージアム全景

開館までの経緯ですが、ミュージアムは突然できたわけではなく、とても時間がかかっています。静岡県には、大学で研究をしていたが、退職されてもなお研究を続けている先生や、趣味として生物や地質を調べている方がたくさんいます。そういう人たちから、県に自然系博物館を作ってほしいという要望があり、検討が始まったのが1986年でした。そのころから、紆余曲折があり、途中でバブルがはじけて話が後戻りもしたのですが、2013年にようやく建設が決まりました。行政側から作ろうと言って作ったわけではなくて、市民の気持ちが届いて、ようやく開館することになったのです。

「ふじのくに」という言葉は、静岡県のことでもあり、日本の象徴でもあると捉えています。また、あえて「ミュージアム」と付けているのは、旧来のイメージの博物館を覆したいという気持ちを込めています。例えば、「博物館行き」という言葉は、時代遅れであるさま、役に立たないさまを指すことがあります。博物館は古くさいところだと思っている方がいまだにいると思うので、そのイメージを変えたいと思いました。

それから、「地球環境史」の意味についてです。自然系博物館は自然史博物館と呼んでいるところが多いですが、自然史とはnatural historyの訳語で、naturalとは「自然の、天然の」という意味です。ですから、自然史といえば、自然の物事を学ぶことが第一になっています。historyには、歴史以外に知識、記憶、話、経験、物事を究めることという意味もあるので、natural historyを「自然史」ではなく「自然誌」と訳すこともあります。

一方、「環境史（environmental history）」は、人を含めた環境が対象です。ですから、われわれが自然史でなく環境史と言っているのは、人と自然の歴史、知識、記録を究めるという意味を込めているからです。そして、グローバル（global）なことは地域だけでなく、地球全体に広がっているという意味で、「地球」を付けました。

ふじのくに地球環境史ミュージアムを設立するに当たって、基本構想をつくりました（図2）。その中で、新しい博物館の目指す姿として、重要なことが三つあります。まず、環境史という名前を付けた博物館は全国初であり、environmental historyという名前を冠した博物館もないので、おそらく世界初だということです。次に、従来の博物館に多くあるように、建物や展示に資源や予算を充当するのではなく、調査研究活動や教育活動の充実を図ります。展示は箱物であり、非常にお金がかかるので、お金をかけずに県民・市民の皆さんに認めてもらえる活動をするために、三つめとしてハードではなくソフトパワーである調査研究や教育の充実を図りたいと考えています。これについては、NPO、県内の研究機関、研究者など、多様な主体と協力しながら展開していこうと考えています。

**○新しい博物館の目指す姿**

・自然史と環境史を研究領域とする全国初の地球環境史を扱う博物館を目指し、調査研究、収集保管、教育普及、展示・情報発信等の博物館機能の充実を図る。

・従前の博物館のように、建物や展示に資源・予算を充当するのではなく、調査研究活動や教育活動の充実を図る。

・NPO、県内研究機関、国内外の研究者等、多様な主体との協力を重視しながら、県内全域から日本をそして世界を活動空間とする「ソフトパワー重視」の活動を展開する。

図2　ミュージアムの基本構想

私たちは、「百年後の静岡が豊かであるために」という大きな活動テーマを作りました。毎日の生活や数年先のことだけでなく、もっともっと長い先のことにも思いをはせていただいて、本当の未来の豊かさのために、私たちに何ができるかを考えるミュージアムにしたいと思っています。

## ■博物館の基本機能

一般論として博物館は、展示、教育普及、調査研究、収集保管の四つの基本機能からなります（図3）。

図3　博物館の4つの基本機能

展示の部分では、見る展示ではなく考えてもらう展示、思考を拓く展示と呼んでいますが、そういう展示を作ろうとしています。ここで一番考えていただきたいのが「豊かさ」です。100年後の静岡が豊かであるために、豊かさを持続させるとはどういうことかを考える内容にしたいと考えています。例えば自然の豊かさ、地形景観の豊かさ、生物多様性の豊かさなど、さまざまな豊かさがあると思いますが、われわれ人間が普通に生きている中で考えるわかりやすい豊かさは、社会経済的な豊かさです。安定・安心した生活ができること、金銭的な余裕があること、そしてもう一つ個人的に非常に重要だと思うのが心の豊かさです。幸福感や、人と人との絆、つながりです。どれを欠いても本当の豊かさは見つけられません。そういったことを考えてもらうために、常設展はもちろん、特別展、企画展も定期的に開催します。

図4　教育普及事業（左上：ミュージアムキャラバン、右上：出前講座、左下：館外体験講座、右下：館内体験講座）

教育普及の部分では、博物館は既に組織として動き始めていて、移動展示（ミュージアムキャラバン）といった形で、「化石の世界」「昆虫の世界」などの展示を県下の小中学校や公共機関などで展開しています（図4）。併せて出前講座や館外での観察会、生き物を調べる講座も始めています。

調査研究では、研究員が6名採用されました。博物館では通常、学芸員という名前で呼びますが、われわれは研究員という職種で、教授、准教授、研究員という名前を使うという新しい試みです。大学院を出て学位を取って、論文を書いて研究者になろうと思った人間をあえて集めて、オリジナルな調査研究を行い、地域の人に発信していくことを目指しています。ただ、この6人だけで地域のことを成し遂げられるとは考えていません。そこで、共同研究員制度をつくり、一緒に研究してくださる研究者、大学院生、学生と共に取り組もうと考えています。人数が少ないことに関しては、みんなで話ができますし、来館者に

とって顔が見えやすいという良さもあります。

収集保管は一番地味ですが、博物館にとっては未来につながる最も重要な機能だと考えています（図5）。在野の研究者の方も公共機関にはない貴重な自然史資料を多く持っていて、県内各地に散らばっています。それらを集めて保管していくことは大きな仕事です。標本については登録作業をして、全国規模の「サイエンスミュージアムネット」というデータベースに協力することで、ここに何があるかを発信しています。また、NPO法人静岡県自然史博物館ネットワークとも協働しながら、収集保管を続けています。

図5 収集保管（左上：昆虫標本の登録作業、右上：6万冊の収蔵図書、下：解剖室風景）

図6 左：キッズルーム@東京おもちゃ美術館
右：図鑑ルーム@三重県総合博物館

また、博物館にはアミューズメント性も求められるので、静岡県産材を使った素朴なおもちゃで遊べる部屋や、図鑑カフェといって、お茶を飲みながら最新の図鑑や写真集を見られる部屋を作りたいと思っています（図6）。この部分については無料で開放し、博物館を身近に感じてもらえるような仕掛けとして整備しようと考えているところです。

## ■ジオパークと自然系博物館の連携を目指して

調査研究からの可能性は、研究者によっていろいろな立ち位置があると思いますが、私は虫の研究をしているので、私の専門性の中からお話しすると、生物地理学、分子系統学、この二つが合わさった分子系統地理学という学問があります。この学問について考えることで、ジオパークの新たな可能性を提示したいと思います。

まず、生物地理学は、生物や生態系が地球上の分布を歴史的連関と共に研究する学問です。フンボルト（Humboldt）という探検家・航海家が、地球を巡っている間に、場所によって異なる生物が住んでいて、さまざまな生態系、景観、自然があると感じたのが最初です。そして、進化の研究で有名なウォレス（Wallace）やダーウィン（Darwin）が基盤をつくりました。

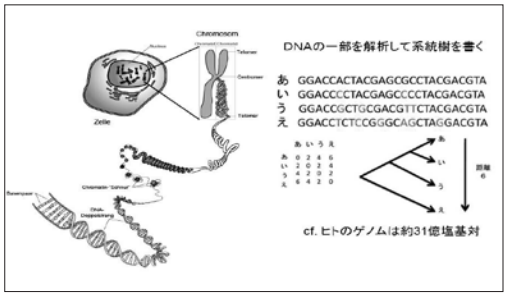



図7　DNAから系統樹を書く　分子系統学

それに対して分子系統学は、非常に新しい学問です。生物地理学には200年近い歴史がありますが、分子系統学にはまだ数十年の歴史しかありません。1980年代、生物が持っているDNA情報を塩基配列で特定できるようになりました。生物を構成する遺伝子の実態が分かり、それらはたった四つの塩基でできていることが分かったのです。DNAは2本の鎖の構造で配列されていますが、1個の細胞の染色体内に、人間でも長さ2mほどの塩基がずっと連なっているといわれています。具体的には、連なったDNAがヒストン（histones）に巻きついてビーズ状につながったもので、まさに毛糸でマフラーを編むような感じで染色体ができています。これが、1個の細胞に人間では46本入っています。それぞれのDNAに四つの塩基があるので、その四つの塩基を読み解くのが分子系統学の基本です。塩基の並びの違いを解析することで、系統樹を書くことができ、生物の進化の距離の遠近を表せるようになりました（図7）。

すると、現世の生物がどのように進化してきたかが分かるのです（図8）。例えば、クジラはカバの親戚だったことがはっきり分かりました。もともと生物の由来は、化石を調べたり、骨格を比べたりして分かっ

たのですが、クジラとカバ、クジラとキリンぐらい離れていると、本当に近いのかどうかがよく分からなくなります。それが分子系統学では、証拠と共にしっかりと分かるようになりました。

これらを合わせて、分子系統地理学が生まれました。そこに住む生物同士を比べることで、その地域に住んでいるものの進化の距離が分かり、地域の歴史が分かります。生物の分布は、その地域の歴史を物語っているのです。

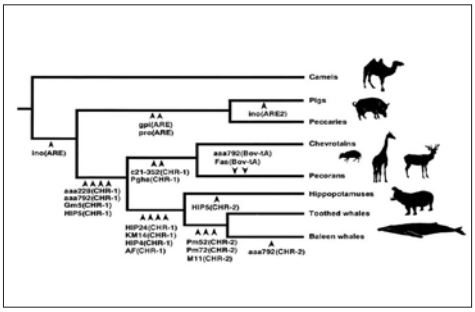


図8　クジラはカバの姉妹群　Nikaido et al., 1999

## ■分子系統地理学で伊豆を見る

この分野でも幾つかの論文が既に出始めています。例えば、分子系統学以前、本州全域のトカゲはニホントカゲで、伊豆諸島にのみオカダトカゲが分布していると思われていました。ところが、DNAを調べてみると、伊豆半島のトカゲは伊豆諸島にずっといるオカダトカゲと同種であることがはっきりと分かったのです。さらに、ニホントカゲとオカダトカゲは富士山の辺りで分かれていることも分かりました。歴史的に考えてみると、南から移動してきた伊豆半島に乗って来たのではないかと考えると筋が通ると思います。

他にも、伊豆半島のシマヘビは、伊豆諸島の一部と同じ集団であることが分かりました。ただし、伊豆諸島のシマヘビは、三つの集団に分かれていることも分かりました。そうすると、このシマヘビは島にどうやって渡ったのかということが、次の疑問になってきます。あるいは、イモリは両生類ですから、海を渡ることができないので、伊豆諸島には分布していません。しかし、伊豆半島には分布しています。それを調べてみると、面白いことに、中伊豆の集団と南伊豆の集団は全く異なることが見えてきました。南伊豆の集団は北日本のイモリと同じで、中伊豆の集団は中部日本のイモリと同じ集団であることが分かりました。では、どのようにして伊豆半島に入ってきたのでしょうか。分子系統学を使うことで、その複雑な過程を調べることができるようになり、それによって新たな疑問も湧いてきます。地質的、地学的、地球科学的に分かることを重ね合わせることで、なぜその場所にその生き物がいるのかを追いかけることができます。

研究は始まったばかりです。私が専攻している昆虫では、伊豆に注目した研究はされていません。ですから、衝突によってできた半島であることが地球科学的に明らかになったその場所で、分子系統地理学によって、生物がどこからやって来たのかを調べることは、世界的に見ても非常に面白い研究です。その最良のフィールドが伊豆半島であり、伊豆諸島なのです。南から来た伊豆半島にどんな生き物が乗ってきたのか、火山活動の中を彼らはどうやって生き延びてきたのか、そういった生き物の侵入の歴史も見ることができる、世界でも非常に素晴らしいフィールドだと考えています。こういったことをつなぐことで、現場を持つジオパークとインドアである博物館がつながるのではないかと思います。これはごく一例です。

## ■ミュージアムの挑戦

最後にまとめとして、私たちが挑戦したいことをお伝えします。一つ目は、地球環境史は未来のためにあると私たちは考えているので、過去と現在を正しく理解して、未来を考える場所にしたいと思っています。二つ目は、100年後の静岡が豊かであるために、長い時間スケールで考えることの重要性を伝えたいと思います。私たちは、目先の利益を追求して、自然から資源を収奪し、生物多様性を劣化させてきました。それを、巻き戻せるかどうかが重要です。三つ目は、博物館の既存の枠をできるだけ取り払いたいと考えています。博物館は一部の人しか来ないイメージがあると思いますが、そうではなくて、博物館に興味がなかった人々をいかに引きつけられるかが課題だと思っています。そのためには、さまざまな主体の方々と協働していくことが重要だと思っているので、皆さまの参画をお待ちしています。

発表

# STVの活動経緯と今後の課題

井口　美奈（静岡大学登呂博物館ボランティア）

STVとは、静岡大学登呂博物館ボランティアの略です。静岡市立登呂博物館は登呂公園の一角にあり、弥生時代後期の水田・住居跡である登呂遺跡に隣接しています（図1）。この遺跡の特徴は、そのころの人たちの生活をとてもよく知ることができる点です。登呂博物館にも、人々の生活に関して詳しく知ることができる展示物があり、当時の暮らしの体験学習もできます。図2は、屋上から見た遺跡の写真です。弥生時代の人々が日常的に生活していた場所で、私たち現代人も日常生活を送っていることがよく分かる写真だと思います。

## ■STVの活動

私たちSTVは、登呂博物館のイメージキャラクター「トロベー」に変身して、博物館に来た皆さんや館外で行われるイベントに登場することで、博物館についてより知ってもらうきっかけづくりをしています。トロベーと触れ合い、親しみを持ってもらうだけでも、登呂遺跡に興味を持ってもらうことができ、教育普及につながると考えています。

STVのメンバーは、歴史コースが含まれている人文社会科学部だけでなく、教育学部、理学部を含めて1〜3年生計12名で活動していて、歴史や学芸員とはそれほど関係のない進路を志向している人も入っています。

STVの活動は、学芸員だけでトロベーを動かすのは難しいことから、山田真才前館長の発案によって始まりました。最初は短期ボランティアの予定でしたが、山田館長が転任するときに、活動の継続について話し合われ、博物館と学生の関係性を維持していくことは双方にとって必要だという結論に至り、現在のSTVが創設されました。現在行っている活動は、トロベーに扮して来館者と触れ合う、登呂地区内外のイベントへの参加と企画、ミーティング、そして最近始まった新聞製作です。それぞれの活動について、写真を見ながら説明します。

図1　上：登呂博物館外観、下：登呂遺跡

図2　屋上からみた登呂遺跡

図3は活動の様子ですが、さまざまな人と触れ合って、登呂遺跡と博物館をアピールしています。子どもたちが近寄ってきたら、トロベーの頭が竪穴住居になっていることをクイズ形式で伝えたりしています。また、館外のイベントにも出張して、皆さんに知っていただく活動をしています。

「シズオカ × カンヌウィーク」というイベントでも活躍しました（図4）。博物館の方から、トロベーがおめかしして登場できないかというお話があったので、メンバーで話し合い、フェルトのフランス国旗を付けた帽子などを作って、特別なトロベーを演出しました。

地域で毎年行われている登呂まつりのときには、お祭りに来た子どもたちに登呂遺跡や弥生時代について知ってもらうための企画をしています。このまつりは登呂遺跡の広場を利用して行われるので、博物館自体に興味を持っていただけるように、クイズラリーやスタンプラリーなどを行って、子どもたちにトロベーのシールなどを景品としてあげています。また図5のように、私たちも他のボランティアが行っている体験活動にお邪魔して火起こしの体験をするなど、メンバーにとってもいい思い出になる活動です。

図3　トロベー活動風景

月1回程度のミーティングでは、活動日の決定やイベントの企画、活動方針の確認などを行い、メンバー内で意見交換して、いい案を吸い上げています。新しい活動の新聞製作は、私たちが登呂遺跡にいらっしゃる他のボランティアや職員の方々とのコミュニケーションを図る目的で始めました。その方たちの活動や思いを知るためにインタビューを行っています。

図4　シズオカ×カンヌウィークでの演出

これらの活動は、新聞などのメディアにも時々取り上げられています。その他、YouTubeに「まるちゃんの静岡音頭」がアップされていて、トロベーが踊っている姿が3秒ほど映っていますので、ぜひ検索してご覧ください。

しかし、STVには大きな課題もあります。それは人員不足です。私たちは、負担の重くない、学習や部活と両立できる組織でありたいので、活動も月1回程度にし、不定期なイベント参加も私たちが活動できる範囲で行っているのですが、みんな他のこともしていて忙しく、全体のメンバーが少ないためなかなか活動に人が集まれないのが課題です。

図5　火おこし体験

## ■学生団体を創設・維持していくには

そこで、これまで私たちが活動を通して感じたことを皆さんにお伝えすることで、これから何か活動をしていきたい人の参考になればと思い、学生団体を創設・維持していくにはということでお話させていただきます。それにはまず、ミッションの確立・明文化がとても大切です。これは、モチベーションを維持する上で不可欠です。ミッションはずっと同じではなく、時には変更されるかもしれませんが、定期的に話し合いが行われることで、メンバー間で共有されていきます。目標を明確にすることが大切なのです。

そして、博物館にとってのメリットと、学生にとってのメリットが両立されていることが大切です。そのためには博物館と学生側がこまめに連絡を取り合い、お互いの意図を伝え合って、コミュニケーションをとることが重要で、一方的であってはいけません。コミュニケーションがないと、メンバーは自分たちがただの労働力として使われているような印象を抱きがちです。ですから、学生自身も自分たちのやりたいことを伝えられ、博物館側も学生にしてほしいことを伝えられるような、双方向のコミュニケーションが必要です。

次に、活動する学生の幅を広げていくことです。私たちは春に勧誘活動をしています。これは新入生に興味を持ってもらうためです。また、STVは学芸員資格取得希望者にとってメリットのある活動ですが、そのような括り方をするとメンバー不足につながる恐れがあります。子どもとのコミュニケーションやふれあいができるなど、資格を抜きにしたPRも必要だと考えています。これまでの宣伝は、学芸員科目の授業での簡単なガイダンスとビラ配りが主流でしたが、これだけでは不十分だったかもしれません。学生の限られた時間であっても、例えばTwitterやFacebookなどのSNSや生協への協力依頼など、まだできることはあると思います。さまざまなメディアや他の団体との関わりを通して、メンバーを広げていくことが

とても大切だと思っています。

さらに、短期的な活動だけでなく、長期的なプロジェクトにしていくにはどうするかということです。普段の活動以外にも自分たちで企画を行い、活動を活性化させることが大切です。同じ活動をずっと続けるだけでなく、イベントへの参加など突発的な誘いがあったときにはその中で何を行うか企画をし、成功することによって、「私たちはできる」という良い循環をつくっていくことが重要だと思っています。しかし、そのためには環境と計画性がなければいけないと思っています。みんなで話し合うミーティングの場や、言いたいことを言える雰囲気をつくることも大切ですが、やはり時間の問題があり、テストの期間など忙しいときはどうしても活動に参加できないことがあるので、時間的な余裕なども含めた環境や計画性がとても大切になってくると思います。

そして、仕事の分担も重要です。忙しくて長い間活動に参加できないときでも、各自が常に何らかの関わりを持てるようにすることが必要です。それほど負担にはならないけれども、少し仕事があるという状態をずっと続けていけるような仕事の割り振り方が、活動から疎遠にならずに続けていくための下地になると思います。また、他のボランティア団体との連携も必要です。私たちだけで活動するのではなく、地域の方や博物館の別団体でボランティア活動をしている方々と良い関係を築きながら交流していくことがとても大切だと思います。

STVがこれからどうなるか、いろいろと考えなければならないことはありますが、登呂博物館のボランティアはまだまだ必要だと思います。

## パネルディスカッション

石川――ジオパークや博物館の活動に、学生はどのように関わることができるでしょうか。

鈴木――活動への入り口は結構たくさんあります。私たちも課題が山のようにあって、やってほしいこともあるのですが、やれることをやってもらえることが一番いいのです。こちらからやってほしいと言うよりは、皆さんが持っている特技や専門分野などをジオパークを使って発揮してもらう方が、ジオパークにとってはいいことです。こちらがやってくださいと言ったことをしてもらうだけでは、私たちの想像した範囲の中でしか、ジオパークは進んでいきません。

ガイドさんのひとりが生け花を生けてくださったときは、とても驚きました。そういうふうにしないと、進化していけないのではないかと思います。ただ、そういった発露の仕方が分からないこともあるでしょう。そのときは具体的な相談にも乗りますし、場をつくることはこちらでできると思うので、いろいろなところでぜひ関わってほしいと思います。

岸本――今の学生さんはとてもよく勉強していると思います。しかし、なぜ勉強しているのかと聞かれて、答えられる人がどれだけいるでしょうか。勉強しなければならないから勉強しているうちはあまり面白くないし、それだけでは人間的に成長しないと思います。本当に勉強したいことができれば、恐らく人間的に成長できると思います。

大学の講座はどちらかというと、受け身になってしまうことが多いので、いろいろなところに出かけていって、人とのつながりや経験を通じて、これを勉強したいと思うものが見つかればいいと思います。そのために、いろいろなボランティアなどを活用するといいでしょう。興味を持ったらやってみて、あまり面白くないと思ったらやめればいいぐらいに思ってもらってもいいと思います。

石川――ボランティアは、自発的であって義務ではないという意味では、自ら意識を持って関わるものです。それがある程度達成できれば、また次の展開や選択もあります。そういう意味では、博物館やジオパークは受け皿としての土壌環境を持っていて、いつでも受け入れ可能なので、お互いに企画を持ち合って、何ができるかを一緒に考えていくという形でしょうか。

岸本――そうですね。要望や提案をどんどんしていただけるとうれしいです。私たちは、それを職業にしているので、できないことはできないと言いますから、皆さんは思ったことを言ってくだされば、私たちも成長できるのでいいと思います。

石川――今回、STVの学生に2年間、登呂博物館で活動してもらって一番強く思ったのは、ただの労働力と思ってしまったら、当然、学生も身を引いていくだろうし、メンバーも飽きてしまい、結果として持続できなくなる危険性があるということです。

事前アンケートで、成功体験の積み重ねで正のスパイラルをつくるという提案をされていて、とてもいいなと思いました。今回のSTVの活動では、具体的にどんな成功体験がありましたか。

坂内――登呂まつりへの参加です。登呂まつりには、私たちがゼロからやりたいことを提案して、企画・準備しました。最初は、博物館の中に人を呼び込むにはどうしたらいいかという課題をみんなで考えて、スタンプラリーを企画しました。このように、やりたいことをやらせてくれる場があることがとてもうれしいと思いました。終わった後もメンバーからは楽しいという声が聞かれ、自分たちでやりたいことをできたという体験が正のスパイラルにつながっていると思いました。

石川――そういった成功体験、自分たちの夢が形になったことが充実感につながって、次の活動の活力になっていったのだと思います。

鈴木――おっしゃったとおり、やはり楽しく活動することが一番大切ですから、成功体験を持つことはとても重要です。そのためには、お互いにきちんと話せる場が必要です。そうしないと、やらされている感じがするし、頼む方も何となく労働力だけを期待するようになって、不幸なことになってしまうと思います。それから、成功体験を共有できる人たちが一緒にいることが大切だと思います。ジオパークが世界遺産と違うのは、ジオパーク間の横のつながりが非常に重視されている点です。各地で暗中模索しながら成功体験や失敗体験を持っているので、それをジオパーク同士で共有し、うまくいったところはみんなで評価するし、まねもするという形になっています。ボランティアもそうだと思います。自分たちだけで閉じこもるのではなく、他の仲間をどんどん増やすことで、楽しみが増えると思いますし、しんどいことが少し減るのではないかと思います。

岸本――やはりコミュニケーションが大切だと思います。ボランティアとはいえ、主体的に新しい企画を立案して実行するまでやっていると思うので、何がしたいのかを博物館側としっかり共有することが大事です。話を聞かないと何を考えているか分からないことがあると思うので、関わっている人たちが一体何を考えているかを知り、自分が何を考えているかを伝えることが基本です。しかし、案外それができていないことが多いですね。一回システムができてしまった制度では、それが当たり前になっていて、もっと良くしたり、駄目なところをやめたりしなくなるので、そういうことを発見するためにも、まずは互いに言いたいことを言うことが重要だと感じます。

石川――そのための「環境や計画性」「仕事の分担」ということでしょうか。

坂内――「仕事の分担」というのはメンバー一人一人が常に活動に参加できる組織でありたいので、必要性を感じています。ミーティングに参加できる学生とできない学生が出てくると、方向性や進捗状況の把握に差が生まれ、取り残されてしまうメンバーが出てしまいます。そうなってくるとみんなのやりたいことを十分に汲みとることもできなくなり、モチベーションが下がっていってしまいます。メンバー内でだんだん二極化してきた部分があったので、「仕事の分担」を挙げました。

石川――井口さんたちは、そういう学生に対して何かフォローしたことがありますか。

井口――根本的な対策は私たちもあまりできていないのが正直なところです。LINEを使って情報をなるべく出すようにはしています。中にはほとんどLINEを見ない子もいて、その辺は難しいのですが、アクセスしようと思えば、みんなが何を考えているか分かる状態をなるべくつくるようにはしています。もし、一人の人に仕事が集中していたら、なるべく他の人に「これやってくれる人いますか」と言えるようにしたいと思っています。

石川――今回のフォーラムは、今後、ジオパークと地球環境史ミュージアム、大学職員、学生さんたちをつなぎ、地域のいろいろな課題に対して教育研究などに協働して取り組んでいく上で、地元の受け皿として地域やNPOと協働するためのキックオフ的な意味合いで開催させていただきました。今後とも静岡大学は、登呂博物館の事例を含めて、ジオパークや地球環境史ミュージアムと協働できるような企画なども考えていきたいと思っています。

最後に、会場から質問や意見などの時間を取りたいと思います。

質問――STVのメンバーが少ないということでしたが、私のように末端のジオガイドですと、自分に仕事がないかなと思ったら、自分から動くようにしています。自分が受付をする場合、席から離れて、次々に子どもたちに声を掛けるようにしていて、今日は何人に声を掛けたということを実績するのです。すると、次のイベントのときにも出たくなるものです。ですから、たくさんの人に接してほしいと思います。

先日、ジオパークの方にたまたま、上智大学の学生2人が卒論のために伊豆半島に来ていて、多くのジオガイドさんに次々と自分からアタックしていました。私たちがお花会で三島のジオを表現したときも、そこにいた方々が驚くほど、密着して取材していました。そういうことを皆さんならできると思うので、とにかく伊豆半島の推進協議会に電話やメールでアタックするなりして、伊豆半島にたくさん訪れて、魅力を自分の体で感じていただきたいと思います。

もう一つ、私は虫嫌いだったのですが、箱根ビジターセンターに行って、昆虫はこんなにすごいのかと感じました。小さな昆虫を虫眼鏡で見ると素晴らしく、なぜ私はこの年まで昆虫に興味がなかったのだろうと思いました。ですので、自分が不得意な分野でも飛び込んでいってほしいと思います。そして、箱根ビジターセンターでは、日曜朝の周辺散歩で昆虫や植物を見せているのですが、そういうものに参加することは学生や若い人たちにはとても大切です。大学のお隣にあるので、ウオーキングのつもりで、四季折々の植物や昆虫の動きを見に来てほしいと思います。

質問――地元の人は、意外と地元のことが分からないと思うのですが、ビジターセンターの他に、観光従事者が集まって、取り組みをしていることは何かありますか。

鈴木――地元の方はすごくよく見ないと、当たり前過ぎて気が付かないのですが、外から来た人の方が意外と面白がることはあります。観光従事者の方々については、行き届いているとは言いませんが、ぼちぼちやっているという感じです。例えば、タクシーの運転手さんは、彼ら専用のあんちょこ本が作られていて、それを配って講習会をしたりしています。仲居さんにしても、観光協会という単位になりますが、講座を開いたりしています。

一番大切なのは子どもたちです。今、小学校や中学校で出前授業をしているのですが、その子たちが大人になったとき、伊豆半島でいろいろな活躍をしてくれると信じています。そういう子たちが半島各地にいるので、あと10年ぐらい後になるかもしれませんが、本当に全ての人が解説者になってくれるのではないかと思っています。長い目で見ていただけるとうれしいです。

石川――ここまで皆さんお付き合いしていただいて、どうもありがとうございました。

岸本――皆さん、私たちのフィールドに、まずは気軽に遊びに来ていただければと思います。今後ともよろしくお願いします。

鈴木――ジオパークは特にそうですし、ミュージアムもそうだと思いますが、皆さんを受け入れる態勢はいくらでもあると思いますので、思いつきでも構わないので、どんどん入ってきていただけるとうれしいです。これからもよろしくお願いします。

生涯学習指導者研修事業

# 若者の学びを支える公民館

日　時　2016年11月24日（木）10:20～16：00
会　場　静岡市興津生涯学習交流館
講　師　遠藤　健（富士市教育委員会富士市立高等学校　教育推進指導主事）
　　鈴木　剛（富士市市民部まちづくり課）

基調報告 1

## 「若い世代の学びを支える」社会に繋がる学びをめざして

**遠藤　健**（富士市教育委員会富士市立高等学校　教育推進指導主事）

私は富士市教育委員会の中でも、ちょっと珍しいのですが、富士市立高等学校に勤務していて、教育推進を担当する指導主事を務めています。

実は昨日、静岡大学のラウンドテーブルにも参加させていただき、そこで蒲原西小学校の山口校長先生の話を聞くことができました。普段は高校という立場なので、どちらかというと小中学校は地域に残っているけれども、高校になると少し地域から離れてしまうとすごく感じていたのですが、山口先生の話を聞いてやはり、小中学校は公民館（富士市ではまちづくりセンター）を中心に、若者と地域のつなぎ役になっていることを実感しました。

今日は、「社会に繋がる学びをめざして」をテーマに話させていただきたいと思います。皆さんもご存じかと思いますが、教育界は大きく変わってきています。これから学習指導要領も変わりますし、平成32年には今までの大学入試センター試験の形が大きく変わります。今までの大学入試の評価はテストの点数が中心でしたが、これからは考えたり、活動してきたことを報告したり、知識を活用したりすることを大学が評価してくれます。

なぜなら、社会がそうなっているからです。本校でも、そこを「目指していこう」ではなく、「目指していくべきではないか」と考えています。今の時代は、子どもたちに教えることがなくなってきているので、気付きをどのように与えてあげるかを考えるべきだと強く感じています。そのためには座学ではなく、教室から実社会に出て学ぶしかなく、それには答えがありません。だから考えなければならないと本当に痛感しています。

### ■富士市立高校の紹介

最初に高校の説明をさせていただきたいと思います（図1）。学校自体はもともと、吉原商業高校という地元に根付いた専門高校でした。創立50年を期に、富士市立高校に名前を変え、高校の3年間と大学の4年間の計7年間をかけて若者を育てていくことにし、そのために地域と連携するという大きな柱を立てました。目指す学校像として「CDI」を掲げていて、Cは「コミュニティーハイスクール」、Dは「ドリカムハイスクール」、夢（Dream）をかなえることです。夢といっても遠い夢ではなく、人生を楽しく生きてい

くための夢です。それから、Iは探究（Inquiry）ハイスクールです。この3本柱で、高校を立ち上げました。今年（2016年）で6年目になり、卒業生は3期生まで輩出しています。

図1　富士市立高校コンセプト

大学では、静岡大学に今年（2016年）から地域創造学環ができましたが、そこに昨年1人合格しました。他に、北海道教育大学の地域・環境教育専攻、今年（2016年）は東北芸術工科大学にも出しています。まちづくりデザインといったところをやっているのですが、まちと協働しながら取り組むことで、生徒が何となく大学へ行ってその先の仕事を探していくという志向ではなくて、社会に貢献していくためにはどういう経験ができる大学に行けばいいかを考えるようになってきていると実感しています。吉原商業時代はそんなに大学志向ではなかったのですが、自分が興味あることを4年間かけて追究しながら、生徒にも、最終的には自分の思いがあるところで将来頑張ってもらいたいと伝えています。

部活動にもかなり力を入れている学校です。文化部は、吹奏楽部が最近、中学校へ行って合同練習をしたり、お祭りに呼ばれてもただ何となく行くのではなく、生徒たちがそこに行ってこうしたいという気持ちを持って行けていると感じています。それから、ビジネス部があるのですが、放課後を使って児童クラブや福祉施設へ行き、駄菓子をツールにしたコミュニティ活動をしています。

実際に探究学習の「市役所プラン」で、市の方とまちづくり協議会長を中心に約80名、本校へ来ていただき、1クラスに10人ほどずつ入って、輪になって話をしていただきました（図2）。「PIR room」という部屋も作りました。今まではパソコンが並んでいて、とにかく事務的な作業を1年間こなしていました。そういう部屋ではなく、広くして椅子も机も動かせるようにし、電子黒板も置いて協働的作業ができる部屋を、高等学校の施設として富士市から許可を得て作りました。ここで協働的なことをいろいろと行っています。

図2　協働的学習と企画開発

これは有名な話ですが、創造性を必要としない仕事はすべてテクノロジーに代行されていくといわれています。10年後に47％の仕事が機械によって代行され、15年後には15％の人が今はまだない仕事に就くであろうといわれています。計算や漢字も必要なのですが、それに代わることがこれから起きてくるので、学校において協働的に何かやっていく必要があるのではないかということを指針として感じて取り組んでいます。

## ■探究的な学び

本校では、週2時間、「究タイム」を設けて、探究的な学びをしています。探究にはいろいろあると思うのですが、例えば何か新しい機械、最近で言うとドローンやカーナビゲーションを作る場合、本校での探究的な学びとは仕組みについて考えることです。今までの社会の仕組みは、本当にそれで合っているのかどうかということです。

本校の生徒がまちづくり未来会議などで大人と話をするときに、意見を受け入れてくれるかどうか、高

校生の立場で言ってもいいのかということで、最初は躊躇していたのですが、学校の中では良い意味でどんどん疑いの目を持って意見を発していこうと言っているので、そういう子が増えています。ですので、地域の公民館も企業も、高校生にどんどん関わっていくといいと思っています。

まず生徒たちは、今どうなっているのかという現状を調べます。今の子は早いです。先生よりもどんどん先に行って現状を調べます。そして、求める理想は何ですかと聞くと、これもグループになって、ああでもない、こうでもないと話をし始めます。なぜなら、後でアンケートを紹介しますが、今はお金の価値よりも、社会に貢献したいという価値が生徒からすごく出てきていると感じるので、理想を聞くと結構意見を出してきます。ただ、気を付けなければいけないのは、よく富士市に対して「ディズニーランドを造ってくれよ」という意見が聞かれます。しかし、それは自分事になっていないことが多いので、高校生が働きかけて何か仕組みが変わるととてもいいのではないかということで、理想を考えさせるようにしています。そうしていると、その理想とのギャップを埋めるための課題が出てくるので、課題意識を持たせることを授業の中でやっています。すると今度は、その課題を埋めるために必要な情報を集め始めるので、生きた知識になってくることを実感できます。そこから興味が湧いて進学したり、実際に活動したりしている子もいます。

今年（2016年）は、FUJI未来塾に高校生で唯一参加した生徒がリーダーになり、まちおこしのために何かしたいと言ってビブリオバトル（biblio battle）を開催しました。本の紹介をして、その順位を決めるイベントです。その生徒は、やりたいことに対してさまざまなことが知りたくなり、どんどん勉強しました。そのためにはこの大学へ行きたいと言って、受験勉強もし始めました。それが一番理想だと思っています。興味を持って、それに対して勉強していくことにつながっているので、探究的な学びが生きていると思います。

授業では次に、その蓄えた知識で実際にどうなるかという仮説を立てさせ、それをきちんと言語化、構造化させて、しっかり試させます。ですので、夏休みに課題を出しています。まちづくりセンターには、「高校生が夏休みを使ってそちらへ行くかもしれませんが、受け入れてやってください」とお願いしています。まちづくりセンターは今のところ快く引き受けてくれていますが、何しろまだ高校生であり、何か失礼なこともあると思いますので、それもまちとしての協力の一環で受け入れてくださいと伝えてあります。試してきた後には、必ず議論させます。グループ、もしくはグループをまたいで議論させ、その次にどうしたらいいかというものをまた導き出すのが本校の探究活動です。その中で、地域に出ていく活動が入ってきます。これをやらせたいがためにどうしようかと考えていくと、地域に出ていくことになったのです。ですので、順番としては、こういうことをやらせたいと思った方が先です。それをどんどん深めて、理想に向かっていく経験をして、自己肯定感を持ってくれたらと願っています。しかし、まだ解決までには行かないと思います。ただ、そういう体験を通じて意欲を持たせたいと考えています。

経済産業省では、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な12の能力要素を「社会人基礎力」と定義づけています（図3）。「前に踏み出す力」となる主体性、働きかける力、実行力。「考え抜く力」となる課題発見力、計画力、創造力。この課題発見力が一番大変で、いろいろな方から意見を聞いて、葛藤しながら自分の意見を課題にしていく作業は難しいと思います。それから、「チームで働く力」となる発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ストレスコントロール力も大事です。規律性とは、自分だけのツールではなく、社会のルールと照らし合わせながら考えていくことです。ストレス

図3　「社会人基礎力」とは
（出典）経済産業省　http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdfより一部抜粋

コントロール力とは、チームで取り組むときや、まちに出ていくとさまざまな先輩方がいるので、打ちのめされて帰ってくることもありますが、そのときにストレスをうまくコントロールする力です。こうした力が身に付きます。

21世紀型スキルも、よくいわれることです（図4）。中でもわれわれは、地域とグローバルの良い市民であることを教員間で共有しながら、生徒と向き合っています。

| | |
|---|---|
| 思考の方法 | ① 創造性とイノベーション<br>② 批判的思考、問題解決、意思決定<br>③ 学び方の学習、メタ認知 |
| 働く方法 | ④ コミュニケーション<br>⑤ コラボレーション（チームワーク） |
| 働くためのツール | ⑥ 情報リテラシー<br>⑦ ICTリテラシー |
| 世界の中で生きる | ⑧ 地域とグローバルの良い市民であること<br>⑨ 人生とキャリア発達<br>⑩ 個人の責任と社会的責任 |

図4　21世紀型スキル
（出典）静岡大学大学院教育学研究科　益川研究室
http://connect.ed.shizuoka.ac.jp/masukawa/index.php?ATC21s

学習指導要領ではこれからの方向性として、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な知識や力を育む」ことが示されているので、このような学校が増えてくると思います。「何ができるようになるか「何を学ぶか」「どのように学ぶのか」という課題の下に、教室だけではなく、外に出ていくことの重要性が込められていると思います。また、社会に開かれた教育課程の実現のため、ただイベントに行ったり講師を呼んだりして終わりではなく、そこに学びをきちんと持たせるということです。本校はそこに注意して取り組んでいます。

ただ連携するのではなく、そこにきちんと学びがあり、その学びが地域につながることができたらとても素敵だと思っています。育成すべき資質・能力にしても、どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るかというのはとても大事だと思います。ライフワークバランス（Life Work Balance）も学べたらいいと思うのですが、まだまだそこまでは行けていません。それから、何を理解して何ができるようになっているのか、理解していることやできることをどう使うかについても、高校で取り組みたいと思っています。

## ■段階的・体験的に身につける

では、どういうふうに身に付けているかというと、段階を踏んでいます（図5）。いきなりまちに行って、まちの人と話をしてきて、課題を探してきてと言っても話はできないので、まずはオープンマインドの発想法をしています。その後、ディベートで批判的思考や多角的・多面的思考、論理的対話をしています。それから、2年生前期の半年間で市役所プランに出ていきます。次に、自分のテーマを社会課題について考えさせ、最後は実施したことを認知して、進路につなげていきます。

図5 習得の段階

1年生前期は第一単元「序」として、発想技法を学んでいます。1年生後期の第二単元「論」では、ディベートの形で取り組んでいます。ディベートで試合を何回かしているので、感情に任せて相手に意見をぶつけても通用しないことは分かっています。なので、普段はあまり新聞を読むことがない生徒でも、生きた情報をかき集めます。こうしたことから発展していって、今度は夏休みに自分でフィールドワークに出て、話を聞きに行く生徒も出てきています。まちづくりセンターに通っている生徒もいました。

2年生前期は、第三単元「活」の市役所プランです。最初は市長から辞令をもらい、市職員になったことにして、課に属させました。環境、防災、健康増進、広報などの課の職員にしたのですが、なかなか自分事になっていませんでした。まだ行政からの目線になっていたのですが、市役所内を前指導主事とぐるぐる回っている中で、「力こぶ」というパンフレットを手に持っていて、まちづくり課がぱっと目に入ったのです。ここへ行けば、やりたいことが全てあるのではないか、生徒が入り込めるのではないかと思っ

て、今はまちづくり課と協働しています。

この市役所プランでは昨年（2015年）は10地区、今年（2016年）も10地区にお世話になりました。1地区に24〜25人、4人組が10チーム行きます。ただ、富士市は海から山まで、沼津から富士川まで広いので、各地域でいろいろな特徴があり、生徒は他の地域の情報も得ながら学習できていると感じています。今年（2016年）の10地区のうち、吉永だけは学校のすぐ近くにあるので2年連続ですが、26地区すべてで実施していきたいと思っています。

図6　フィールドワークの様子

地域と連携する機会は、主に三つありました。一つはフィールドワークです（図6）。5月にマイクロバスで向かい、町内会長などさまざまな方を呼んでいただいて、まち歩きをしました。歩いて終わるのではなく、まちづくりセンターに行って、高校生が事前に調べたことを話しながら協議して、また次の課題に向かっています。実際に試しなさいということで、今年（2016年）は夏祭りに自分たちで参加しました（図7）。行っているうちに、「何かイベントをやってよ」と言われました。高校生は射的などのイベントを文化祭でやっているので、テントのところでやっていました。最後は軽トラックに乗って、お菓子まきもしていたようです。

図7　夏祭り参加の様子

それから、まちづくりセンターで講座がたまたまあったので、高校生が参加しました。私もここに行きました。3年前（2013年）ですが、とても雰囲気が良くて、終わってから参加者に「高校生はいかがでしたか」と聞いたら、「とても楽しかった」と答えてくれました。まちづくりセンターの係の人も、「こんなに楽しそうな表情は久しぶりに見ました」と言っていました。高校生にもどうだったかと聞いたら、「すごく楽しかった」と言っていました。最後には手をつないで、自分の孫のように交流して、素晴らしい時間だったと思います。

次に、学校で中間発表をします。そのときにはまちの人にも来てもらって、話をしました。普段あまり話をしなくて、先生の前に行くと結構固まっている生徒でも、地域の人がいたりすると、顔を上げてかなり話をしていました。こういう一面があるのだから、このような機会はやはり必要だと思いました。教員の前ではなかなか殻が破れないけれども、地域の大人なら自由に話ができる生徒は、地域に愛着があり、地域に育てられてきているので、こういう子にはもってこいの機会だと思いました。

それから、やはり持続していかなければいけません。持続していくためには公民館やまちづくりセンターが一番だと強く感じています。今回このような機会をいただいてとても感謝しているのですが、持続していきたいと思っています。昨年（2015年）は文部科学大臣からキャリア教育優良校の表彰を受けました。

そんなことをやっているうちに、高校生を中心にいろいろな輪が広がっていきました。福祉施設に高校生が行ってさまざまなイベントをしたり、大学の先生が来たりして、輪が広がってきています。地域防災で一緒に歩いて、危険箇所を見つけたりもしました。防災担当から言われたのは、市が提案すると地域住民には抵抗があり、例えばブロック塀などは市が「危ない」と言うと抵抗がありますが、高校生が「危ない」と言うと受け入れてくれるそうです。それから、防災グッズなどの配布も行きづらいのですが、高校生が関わってくれるととても行きやすいので、これから高校生を活用していきたいと言っていました。それから、年に3〜4回、地域の親子にグラウンドへ来てもらって、高校生が交流したりもしています。

高校生には実行して終わりではなく、必ず振り返りをさせています。全員が気付きをきちんと落とし込んで、学びにさせます。なので、準備が大変です。私も10カ所のまちづくりセンターを大体2周ほど回りました。まちづくり協議会長にも「今日は協議会があるから7時に来てくれ」と言われて、学校が終わってから行って意図を説明したりもしました。準備が大変な割に学びがなかったら意味がないので、きちんと学びになるように振り返りをさせています。そうして高校生に意識を持たせることで、10年後、20年後に帰ってきてくれて、何か変化が起こるのではないかと考えています。

アンケートも取っています。こういう活動をしてきて、日常の中で知りたいな、不思議だなと思うことがある生徒は90％います。ただ勉強しているだけではなくなってきていて、自分から不思議だなと感じています。それから、相手や目的に合わせて自分の考えや根拠を明確に整理して表現できる生徒が78％います。なので、高校生に来てもらってもいいと思います。結構話せるようになっていると思いますし、最近は小中で鍛えられています。高校でも鍛えているところが増えてきているので、どんどん語りかけていいと思います。失敗しても、繰り返しやってくださいというスタンスでいるので、87％が最後までやり遂げようと思っています。ですので、若者にはどんどん失敗させて、本物の経験をさせてあげたいと思っています。自分の将来について考えることがある生徒が90％以上います。人の役に立ちたい生徒、異なる立場の考えを受け入れ、理解しようと思う生徒も90％いますので、ぜひ語りかけてほしいです。

自分の生活だけでなく、社会全体のことを考えたいと思う生徒も、まだまだ割合を上げたいところですが70～80％います。地域社会の一員として自分にできることはないかと考えたことがある生徒が63％です。高校生で5割を超えれば素晴らしいと思います。社会や地域の課題解決に向け、主体的に活動したいと思う生徒も67％です。こんなことを高校生は考えています。

総合的な学習の時間「究タイム」で、普段の自分の生活や将来に役立つと思って取り組んでいるから、外に出てもあまり後ろ向きの生徒はいません。こういったことで肯定感が増して、自信を持てて、行動力が出て、最終的にそれが活性力となっていってくれたらと思います。

ここは、さまざまなところを巻き込んでやっていく必要があると感じています。やはり一番身近なのは、生活範囲です。そこを越えての活動はイベントで終わってしまいます。東京にも行きますし、今週の日曜日からは海外探究研修でボストンやドイツ、オランダ、台湾などに行っているですが、1回の訪問でとても濃密な経験はするのですが、一発なので持続性がありません。やはり生活範囲の地域の方が持続しやすく、愛着が湧きやすいと感じています。

さまざまな新聞にも取り上げられました。生徒がそれを見ることで、私はこういう活動をしたのだなということをわざと根付かせるように、プレスリリースもできるだけ多くしています。これも学校の宣伝ではなくて、地域とのWin-Winになるような高校生に対する仕掛けの一つです。

## ■地域との連携

社会探究を他の授業にも取り入れています。市議会議員や財務省職員を呼んで話をしたり、これは実際に自分たちで出ていったのですが、東京大学でイノベーション教育をしている先生を年10回呼んだり、外国人を招いてプレゼンをしたり、いろいろなところと連携しています。富士市観光課の富士山・シティプロモーション推進室の方に来てもらったりもしています（図8）。図9は、本校の主な連携先です。これからの学校の方向性が、社会につながる学びや活用力になっているので、どんどん連携しようとしています。子どもの学びが残る連携ができたらと感じていますので、地域の方の協力が必要です。そして、それを見守ってほしいと思っています。

図8　東京大学内イノベーション大学講師（左）
外国人を招いてプレゼン（右）

県外における地域連携としては、可児高校の「エンリッチ・プロジェクト」があります。これはインターネットにも出てきます。あとは、岡山県矢掛町や愛媛のシビックプライドもあります。また札幌大通高等学校の「社会に近い。開かれた高校」という取り組みもありますし、岩手県もつい最近、本校に視察に来ました。鹿児島県や東京でもやっています。

静岡大学・常葉大学・神奈川大学
産業能率大学・東北芸術工科大学
ハーバード大学・ＭＩＴ
東京大学内イノベーションクラブ
財務省
富士市市民部まちづくり課
富士市まちづくりセンター
富士市観光課富士山シティプロモーション推進室
ＪＡＬ・あずさ監査法人・マイナビ
ＯＥＣＤクラスター
リディラバ

図9　富士市立高校の主な連携先

高校生の立ち位置としては、地元を離れてしまいますが、大学や地域、社会を結ぶ年齢期であることは確かです。県内には高校が144校あって、社会貢献をしたのは昨年（2015年）で約90校あるというデータが出ています。社会がこういう方向へ向かっているので、ぜひ連携・協働をしていきたいと考えています。

最後に地域課題解決型キャリア教育についてですが、ずっとこういう取り組みをしていて二つのことを確実に感じています。一つは、高校生は地域に貢献したいと考えています。最初はそれほど感じていなくて、こちらがびくびくしていて行けなかったのですが、これは確実です。冷めたような子はほぼいないと思います。先ほどのアンケートで見ても、本校生徒の約90％はそうなっています。

もう一つは、地域の人は若者の意見を取り入れたいと考えています。どこのグループワークで聞いても、こうした意見は出てきます。私は富士市の男女共同参画委員やキャリア教育推進委員も務めていますが、そういったところで話を聞いても、若者の意見は必要だという声を聞いています。

基調報告２

# 富士市市民部まちづくり課の取り組み

鈴木　剛（富士市市民部まちづくり課）

私は市役所勤務19年目で、最初は林政課、次に交通安全の担当課、その後に秘書課、そして現在のまちづくり課は6年目です。社会教育担当や教育委員会には在籍したことがないので、皆さんにとって当たり前の話をしてしまうかも知れませんが、ご容赦ください。

まちづくり課は、他の市町村では都市計画や建築関係のことを指す場合が多いですが、富士市の場合は人によるまちづくり、コミュニティによるまちづくりを担当しています。まちづくり課で支援しているのは、まちづくり活動、つまり地域の自治に関することです。住民主体で地域を運営していくための自主活動を持続可能にするために支援していくことが仕事です。

今回いただいたテーマに世代間交流という言葉があったので、市の施策としていろいろな世代にアプローチする人材育成と、それらを交流させるアクセスポイントを作ることで人をつないでいく世代間交流の仕掛けも併せて説明したいと思います。その取り組みの中で、2年前（2015年）から市立高校と手を組んで行っていることを具体的にお話ししたいと思います。

## ■富士市を取り巻く現状

少し、富士市の現状について知っていただきたいと思います。富士市は静岡県の東部にあり、あまり知られていないかもしれませんが、県内第3の人口があり、特例市です。25万6000人の人口を擁し、世帯数が10万強です。高齢化率（65歳以上の割合）が25.66％、少子化率（若年人口の割合）は13.35％で、県内ではまだ比較的高齢化率は低い方に入るかと思います。富士市の特徴としては、地域コミュニティの活動がかなり盛んということです。昭和41年の2市1町の合併以降、活発に取り組まれてきて、特に小学校区単位でコミュニティ活動が盛んに行われています。例えば体育祭、文化祭、お祭り、清掃活動、美化活動が小学校区単位はもちろんのこと、自治会単位などいろいろな単位で行われています。年間を通じて、各地でイベントが行われているまちという印象もあります。

一番身近な自治組織であるコミュニティは、富士市では町内会もしくは区と呼ばれており、市内に389存在しています。加入率が約84％で、静岡県内のこのぐらいの規模の都市では高い方かと思います。ですので、町内会の組織はしっかりしています。それをもう少し拡大すると、地区という単位になり、小学校区を範囲に26地区あります。この範囲でコミュニティの活動が盛んに行われており、さまざまな分野の団体や役割を持った推進員が20〜30ぐらい地区内で活動する形になっています。

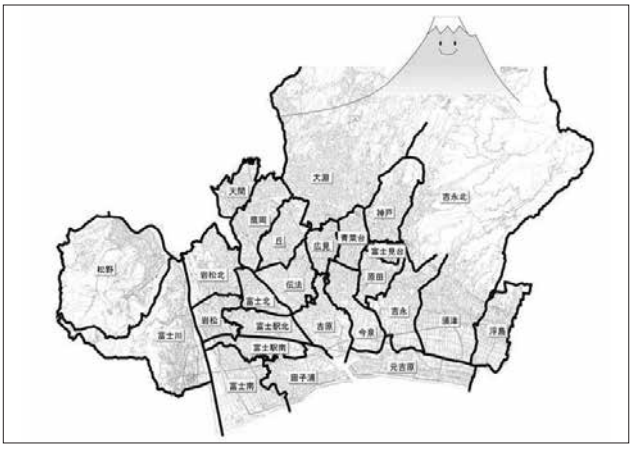


図1　富士市26地区の区割り

市が設置しているまちづくりセンターは平成20年まで公民館だったのですが、市民に軸足を置いた市政という当時の市長の意向もあり、市長部局へ移ってまちづくりセンターに変わりました。これが小学校区単位に26カ所あります。図1が26地区の区割りです。遠藤先生から話があったとおり、富士市は、海から富士山の麓まで南北にかなり高低差があり、東西にも長い地区になっ

ています。ですので、地区それぞれの魅力や特性があります。

地区内にはさまざまな団体が活躍していて、小学校区単位に町内会長が集まる連合町内会があったり、これは富士市独自の団体ですが、生涯学習推進会があります。最初は青少年健全育成を目的に立ち上がった団体ですが、今は交通安全や文化活動など幅広く活動しています。更には、福祉関係やPTA、子ども会あるいは老人クラブ、交通安全や花の会など多種多様な団体が小学校区単位で活動しています。

これらの団体をつなぐ役割として、まちづくり協議会が26地区すべてに設置されています。もともと個々の活動は活発だったのですが、これからの時代を考えたときに、個々の活動だけではなくて、手をつないで地区単位で同じ目標を持って活動するための仕組みが必要と考え、まちづくり協議会という仕組みを市が提案し、平成26年度にすべての地区に設置されています。このまちづくり協議会が、市役所プランに協力し、高校生を受け入れて取り組みを進めています。

今年（2016年）11月1日、市制記念50周年の記念日に、富士市まちづくり条例が制定され、この条例にもこの協議会が位置づけられています。ですので、地区を代表する組織として市もしっかり支援していく形になっており、現在はこのまちづくり協議会の事務局をまちづくりセンターの職員が担う形になっています。将来的には住民主体の事務局体制に移行していきたいと考えておりますが、現状は市の職員が事務局として一緒に取り組んでいます。

図2はまちづくり協議会のイメージです。さまざまな団体が手をつないで、代表者が集まって物事を決めるような場や協力しながら動く場をつくりながら、個々の活動は生かすけれども、地域全体で連携して、一緒にできることはやっていこうという相互協力の関係をつくっていくのがまちづくり協議会のイメージになると思います。活動拠点は、まちづくりセンターです。26地区すべてに設置されていて、市の職員が正規3人、臨時2〜3人配置されています。役割は、発行事務などの市民サービスコーナー、社会教育講座などの講座開催、そこから生まれた自主グループ活動への支援や、まちづくり協議会事務局として地区活動へのサポートなどがあります。

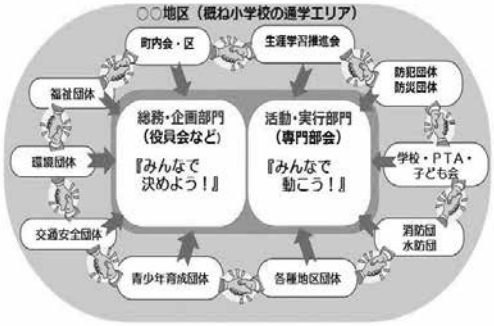


図2　まちづくり協議会のイメージ

## ■地域の力こぶ増進計画

現在進めている「地域の力こぶ増進計画」は、地区単位のコミュニティを活性化して持続可能にしていくための計画です。この計画をつくるに当たり、やはり活発な活動でも少しずつ問題・課題が出てきていました。少しデータの話をすると、ご多分に漏れず人口減少、少子高齢、ライフスタイルの多様化の中で、コミュニティ意識が下がってきています。

図3は、昭和50年以降の人口と世帯数のグラフです。平成10年ごろまでずっと右肩上がりで人口も世帯数も増えていて、人口の波は少し緩やかになっていきますが、世帯数の波は相変わらず右肩上がりの状態です。平成20年に富士川町と合併したので、人口と世帯数がぽんと上がっていますが、それを機に人口は減少に入っています。世帯数は相変わらずの伸びです。ということは、核家族や1人でお住まいになっている人が増えてきている状況が見て取れます。

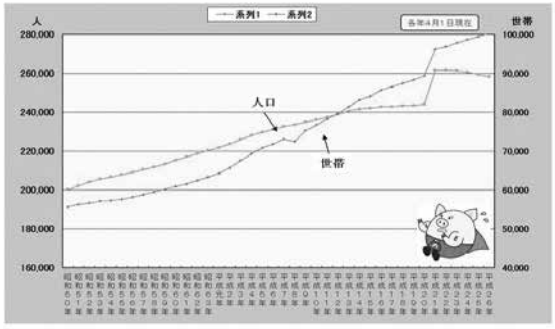


図3　人口と世帯数

人口減少のペースも、総合計画で予想していたのが点線なのですが、それよりも速いスピードで落ちてきています（図4）。年代別の人口分布を並

べてみると、平成16年（図5）、平成21年（図6）、平成28年（図7）で人口の構造が変わってきています。大きな人口のピークとしては団塊世代と、40代ぐらい団塊ジュニア世代の二つがありますが、これからどんどん高齢化しています。一方、若年層が減ってきているので、人口構造のバランスが悪くなって、それが一番の問題になってくると捉えています。もちろん人口が多い年代が、高齢になっても元気で地域の活動に参加してくれれば一番いいのですが、社会保障などのお金がどんどん増えていくことが予想されていますので、今後、どうしていくかという課題もあると思います。

もう少しミクロの視点で見るために、26地区の人口動態を平成16、21、28年で並べてみました（図8）。26地区中17地区がこの11年ほどで減少傾向になっています。6地区はまだまだ人口が増加しているエリアです。まだ分譲地やマンションがどんどんできていて人口が増え続けているエリアもあります。逆に言うと、世帯数はほぼ全地区で増加傾向となっています（図9）。富士見台地区は世帯数も既に落ち始めています。これからいろいろな地区で、世帯数の方も落ちてくる時代になってくると予想されます。

こうして人口減少、人口構造の変化、ライフスタイルの多様化が進む中、実際に地域の皆さんから聞かれるのが、役員のなり手不足、事業のマンネリ化、さらには活動のやらされ感があって、何のためにしているのか分からないという声が出たり、全体としてコミュニティ意識がどんどん低下している印象を受けます。こういうことが進んでしまうと、これから拡大が予想されるさまざまな地域課題に対応できないので、富士市としては今の活発な活動をいかに将来につなげていくかという問題意識の下、「地域の力こぶ増進計画」を平成24年に策定しました。ねらいとしては持続可能な地域コミュニティづくりを目指したものです。

計画期間は平成24～28年度で、ちょうど今年（2016年）が最終年度です。平成22、23年の2カ年かけて計画を作り、関係団体や関係機関からさまざまな意見をいただいて、この計画では、持続可能な地域コミュニティづくりに向けて、三つの視点が必要だろうと結論づけて取り組みを進めています。

一つ目が活動実施体制です。まちづく

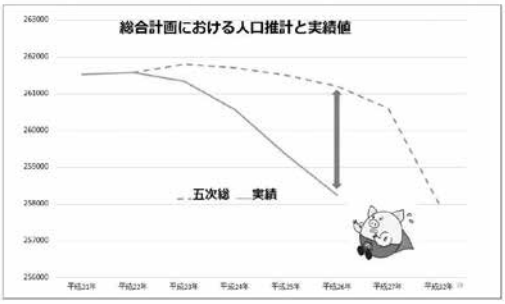


図4　総合計画における人口推計と実績値

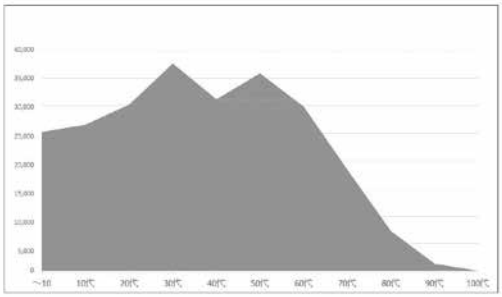


図5　年代別人口分布図（平成16年）

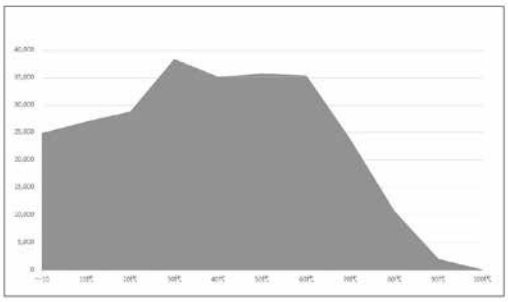


図6　年代別人口分布図（平成21年）

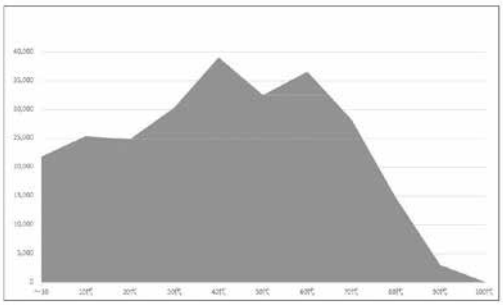


図7　年代別人口分布図（平成28年）

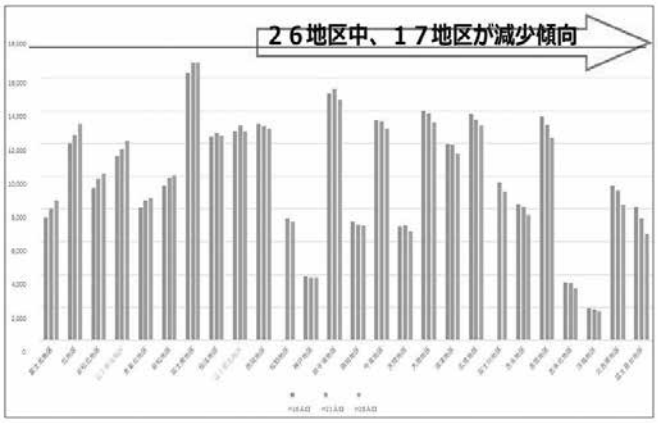


図8　地区別人口動態（平成16年、平成21年、平成28年）

り協議会のような仕組みやそれを支える計画、あるいは条例などを作って支えていく仕組みの面です。二つ目に、やはりまちづくりは人づくりですので、人材をいかに発掘、育成し、つなげていくかという視点です。三つ目は、そういった仕組みと人がうまく連動して回っていけるような活動の場・連携です。場の提供や施設の運営、あるいはさまざまな主体が交流する場をつくることです。そのような三つの視点から課題を捉えて取り組みを進めてきました。

計画の体系図が図10です。三つの視点から、これまでさまざまな取り組みを進めてきました。まちづくり協議会の設立や、地区の将来のビジョンを描いたまちづくり行動計画の策定、更には、それを支えていくための条例が現在できています。また、これらに合わせていろいろな人材育成や連携の場をつくっています。

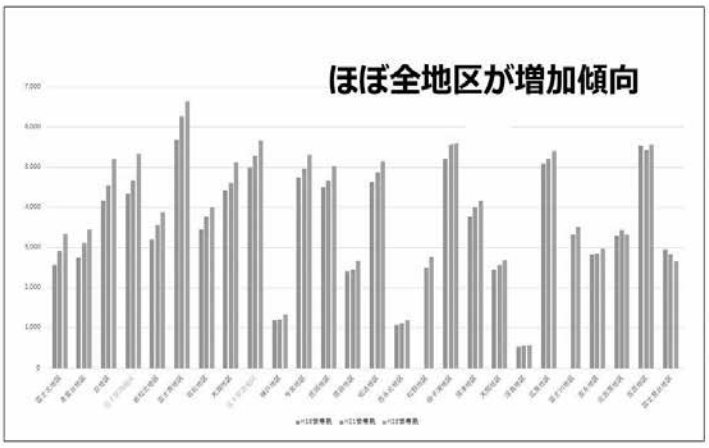



図9　地区別世帯数動態（平成16年、平成21年、平成28年）

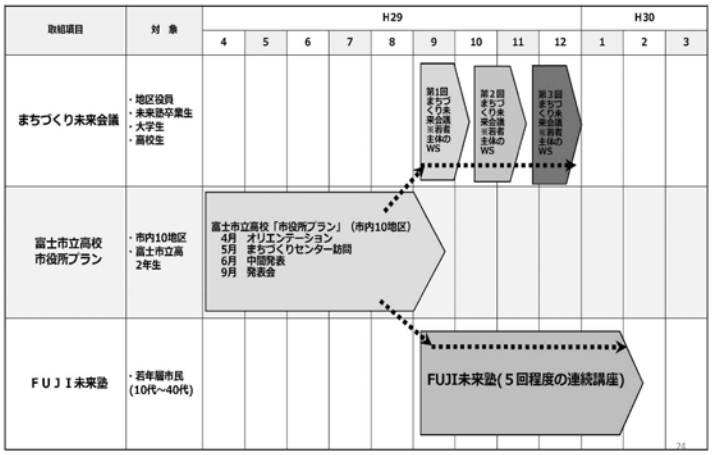



図10　計画体系図

## ■次代に向けた「ひとづくり」

ここからが本題です。次代に向けた「ひとづくり」ということで、市立高校と協働で取り組んでいる人材育成についてお話ししたいと思います。まちづくりの核になるのは「人」です。物事を動かしているのは「人と人のつながり」であって、コミュニティであって、これが一番大事な部分になると思います。

人口減少・少子高齢化で人が減り地域力が減退してしまうと言ってもなかなかイメージしづらいと思うので、図で表現しますと、例えば人口5人のまちがあったとします（図11）。すると、人のつながりは10通りあります。しかし、高齢化などで人口が4人に減ったとします。そうすると、人口は5人から4人に2割減るのですが、人と人のつながりは6通りに減り、4割減ってしまう計算になります。これはコミュニティレベルでとても大きな問題だと思います。

わかりやすいように少ない数字で示していますが、こうなった時に今までやっていた活動の負担を6通りのつながりで回さなければならなくなるということは、残された人の負担が増加してしまい、また人口が減り、負担が増え、といった形で負のスパイラル（spiral）に陥る可能性があるわけです。ですので、市もどうしていくかを考えなければならないし、地域の皆さんの中で主体的に考えていかなければならない時代

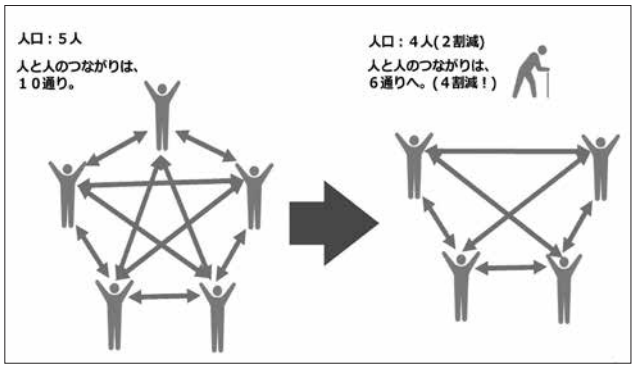



図11　人と人のつながりイメージ

になってきていると思います。

そんな中で、残念な結果が出ています。世論調査で、まちづくりに市民が参加しているかを問う調査をしたところ、「まちづくりに市民が参加していると思うか」の設問に対して、そう思わない人の割合が増えています（図12）。左側の2本のグラフは、まちづくりに参加していると思う人の割合の平成22年と26年の比較で、右側の2本が参加していない人の割合の比較です。平成22年は、全体としてまちづくりに参加している層が5割を超えていたのですが、この5年で逆転してしまって、参加していない層の方が増えてしまっています。これは結構問題だと思っていて、速効性がある取り組みも必要ですし、長いスパンで変えていく仕掛けも必要だということで、取り組んでいます。

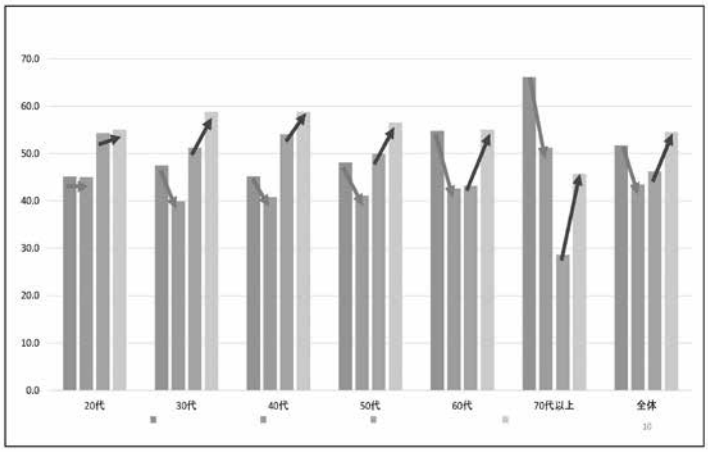



図12　世論調査「まちづくりに市民が参加していると思うか」
平成22年・平成26年の比較

そこで、持続可能な地域コミュニティづくりに向けて、「ひとづくり」の観点から市は何ができるのかを、われわれは常に考えて取り組んでいます。その中の一つの取り組みとして、市立高校と組ませていただいているわけです。

具体的には、当事者意識を持って関わる人の数を増やすことです。まちづくりのこと、自治のこと、自分たちの地域のことを自分のこととして捉える人がいかに増やしていけるかです。地域の人たちがそういう人たちを育てていくのは当然ですが、市としてもどう仕掛けて、増やして、つなげていけるかを意識して、施策に取り組んでいるところです。

速効性がある施策としてはまず、まちづくり協議会の役員の皆さんのモチベーションが上がるような取り組みです。具体的には今日は違う観点なのでお話ししませんが、地区間の会長たちが情報共有する場をたくさんつくったり、市の担当者と協議会の役員が情報交換して、必要な取り組みについて意見を出したり、まちづくり協議会の活動を紹介するようなPRをしながらモチベーション（motivation）を上げていただいて、地域の中で地域の人材をつくるところにつなげていってほしいという思いがあります。

もう一つが、次代を担う若者の当事者意識の向上です。先ほどのまちづくりへの参加意識の世論調査でも、やはり若者層の参加意識が下がっています。これは長いスパンで見ると大変な問題だと思うので、じっくり腰を据えて取り組むためにも市立高校と協働で取り組んでいます。

市立高校の市役所プランにおける協働の取り組みのほか、先ほども少し出ましたが、FUJI未来塾という10〜40代ぐらいの社会人・学生をターゲットにした人材育成塾、さらにはまちづくり未来会議といって高校生、大学生、社会人と協議会の人たちをつなぐような仕掛けもしています。個々の層にも仕掛けながら、個々をつなぐようなアクセスポイントとして世代間交流の場をつくって、活性化につなげたいという意図があります。

まず、FUJI未来塾についてです。地区単位ではなくて、市全域の人材育成塾になっていて、まちの未来を考え、このまちのために自分たちができることをテーマに取り組んでいる連続講座です。講師に、伊豆でドットツリープロジェクト（Dot tree project）を始めとした地域活性化の取り組みを行っているNPOサプライズの飯倉清太代表理事をお呼びしています。今年（2016年）は2期目として、取り組みを進めています。第1期は21人の参加で、高校生から大学生、社会人まで平均年齢40代半ばの人たちが集まっています。今年（2016年）の第2期は17人の参加です。

あまり地区や地縁組織は意識しないで、富士市の未来を考えたときに自分たちは活性化に向けて何がで

きるのかを、5回の連続講座の中でプランを作って発表してもらいます。この講座の目的は発表するだけでなく、活動につなげることです。こういう人材育成塾は大体、プランをつくって終わってしまうのですが、この講座は違って、終わったら即活動につなげたり、あるいは、講座の間にトライアルで活動してみて、それを発表する取り組みをしています。

企画の実現ということでは、第1期生の活動は、高校生がリーダーになったチームで、富士市立中央図書館と組んでビブリオバトルを行ったり、大学生が就職活動に入る前に職業観を学ぶために、OBの社会人を呼んでお話を聞いて交流するような「職しごとカフェ」を3回ぐらい開催しているチームがあります。他にも、福祉施設を慰問するようなイベントや、ボランティアしたい人とボランティアを受け入れたい側の施設をつなぐような具体的な動きをしているチームがあります。

活動して終わりではなく、さらにつなげるような仕掛けもしていて、第2期FUJI未来塾では、第1期生の5チームのリーダーをティーチングアドバイザー（teaching adviser）として招き、第2期生の3チームにアドバイザーとして入ってもらっています。それから、まちづくり未来会議にも参加してもらって、大人の立場から高校生、大学生と意見交換をしてもらっています。

次に、まちづくり未来会議です。まちづくり未来会議とは、地域の力こぶ増進計画が今年（2016年）で最終年度になるので、この先どういう市の支援の在り方があった方がいいのかを考えるために、若者の意見を取り入れる目的がありました。さらに、せっかくやるのなら、当事者意識を持ってもらう仕掛けにしたいので、若者の視点で地区のまちづくり活動を考えるための意見交換の場として、連続3回で開催することにしました。この3回の中で出てきた意見は、計画の今後の方向性に反映していこうと考えています。

9月に始まって、現在、11月の2回目が終わったところで、最終回の12月12日に、若者たちから提言をいただく形になっています。会場は市立高校で、参加者は市立高校生10名ぐらい、常葉大生5名ぐらい、FUJI未来塾第1期生5名ぐらいの20人で行います。

第1回は若者たちだけで、グループごとに決められたテーマについて、地区まちづくり活動に関する仮説を立てています。まちづくり活動はどんなことをしているのか、会長になったら何をするのか、何をしてみたいか、地区まちづくり活動の印象はどうか、参加を増やすには何が必要かということを、知らないままに若者たち目線で話し合ってもらい、発表して全員で共有してもらいました。

第2回は、第1回の参加者の中から「実際にまちづくり協議会の会長さんたちの声を聞いてみたい」という声が上がり、実は第3回に会長たちを呼んで講評してもらおうと思っていたのですが、構成を変えて第2回に交流してもらうことにしました。第2回まちづくり未来会議への参加を26地区の会長に呼び掛けたところ、3人の会長が手を挙げてくださって、当日来てくださいました。この日は、高校生たちは、どんなことを聞きたいかを最初に考えた後、3人の会長を囲んで意見交換をしました。最後に、地区まちづくり活動は何のためにやっているのか、どんな意義があるのかを確認、共有して第2回は終わりました。

第3回は、前の2回を踏まえて、若者たちが将来に向けてできること、あるいは市がどんなことができるのかを提案してもらう場にしたいと考えています。

最後に、市役所プランによって地域に起こったことを紹介したいと思います。「てんまんじゅう」プロジェクトは昨年（2015年）、実際に市役所プランの高校生の提案から天間地区で生まれたプロジェクトです。きっかけは昨年（2015年）9月の市役所プランの発表会で、高校生のあるチームが天間地区にオリジナルスイーツを作る企画を提案しました。なぜかというと、天間地区の魅力や資源を考えたときに、天間地区は地区内に大きな天満宮があり、そこから天間という地名にもなっています。それと、まちづくりの軸として、天満宮にちなんだ「梅の里づくり」にずっと取り組んできています。高校生はそれを捉えて、梅の花をモチーフにした「てんまんじゅう」というオリジナルスイーツを作って活性化につなげてはどうかという提案をしました。要は、地域の資源と高校生のアイデアが掛け合わされた形だと思います。

これを聞いてプランで終わってしまう地区が多い中、天間地区の皆さんは実際に取り組んでみることにしました。今年（2016年）2月に、天間地区を代表する大きなお祭り「梅まつり」があったのですが、そ

こでお披露目に向けて昨年（2015年）9月以降、市立高校と地区の皆さんが一緒に取り組むことになり、高校の調理室などを使って試作を重ねて、箱も五角形にすることにしました。実際に販売した2月の天間地区の梅まつりでは、1時間で完売してしまう盛況ぶりで、当日は市長にも見てもらいましたし、この取り組み自体が地元新聞の1面を飾りました。

何よりすごいのがこのてんまんじゅうを作ることにより、天間地区にプロジェクトチームが新たに立ち上がり、今もそうですが、女性部を中心に毎月、調理室に集まって、てんまんじゅうを育てていく動きにつながったのです。これは大きなインパクトで、今年（2016年）の市役所プランの中で、青葉台地区という高台の地区があって茶畑がきれいな地区なのですが、高校生の中からお茶を使ったクッキーを作れないかという話が出て、来年（2017年）は地区にとって20周年の年なので、そこで商品化して売ろうという動きにもつながっています。ですので、高校生の意見が地域の中で求められていることを実感しますし、それを何とか生かして、自分たちの地区に落とし込もうという大人への刺激にもつながっていると感じます。

最後に、全体像を確認していただきたいと思い、図10に表してみました。市立高校生を軸に考えると、4月に市役所プランが始まって、オリエンテーション、まちづくりセンター訪問、6月の中間発表、9月の発表会という形で、高校生たちが半年をかけて市役所プランをまちづくり協議会やまちづくりセンターと一緒に取り組んで進めた後、続けて高校生が入ってきやすいように、FUJI未来塾を9月にスタートしています。ですので、去年（2015年）の第1期、今年（2016年）の第2期も高校生が1人ずつ参加していますし、それを踏まえた上で、今年度のまちづくり未来会議も起こしています。

これまでの成果を元に、地域を知った高校生たちが高校生だけで考えるのではなく、大人や大学生などと世代を超えて話し合う場を設けています。また、そのような個々のプロジェクトをつないでいくように、全体像をデザインしていくことが大事だと思います。これについては来年度（2017年度）以降も同様の仕掛けで、長いスパンにはなると思いますが、継続的に若者の当事者意識を高めていきたいと考えています。

このように、今後も世代間交流の場を増やしていきたいとは考えていますが、ここ数年で見えてきたことは、地区の役員と若者世代は相思相愛関係だと強く思います。地区の役員側は伝えたいので「こういう活動を一生懸命やっているから、ぜひ参加してほしい」と話しかけますし、若者たち（特に高校生）は知らないので知りたいという関係性があると思います。そうした場をつくることで、まちづくり活動は何のためにしているのか、誰のためにしているのか、どんなことをしているのかということを、世代を超えて共有できるわけです。こういう場をつくることは大事だということに気づきました。

そして、お互いの「知らなかった！」を埋めることになりますので、若者の視点は地区役員の刺激になるし、若者にとっては地域が自分たちを求めていると強く感じる気づきの機会になると考えています。世代間交流は、地域にとっても若者にとってもメリットがある仕掛けになると思うので、個々の世代層による仕掛けも必要ですが、それぞれをつなぐ仕掛けをこれからも続けていきたいと思います。

課題として見えてきたのは、そういう意識を持った若者たちがすぐに現場サイドの地区内で活躍の場があるかというとなかなか難しいことです。その地に住んでいる人たちがつくっている組織だと、何かしら団体に所属したりして活動に参加していることが多く、意識を持った若者がいきなり入ってきてもなかなか受け入れられないことがあるので、そこを何かしらつなぐような仕掛けが今後できないか、市としても考えているところです。

今お話ししてきたことは、われわれまちづくり課で取り組んでいる地域づくりの観点からのひとづくりです。各層の人材育成も大事ですが、そこをつなぐようなアクセスポイントをつくることも意識して仕掛けているところです。

最後になりますが、私も地域の一員ですし、結局のところ、まちづくりの主役はひとりひとりだろうと考えています。われわれ自身も地域のことを自分事として気にしながら、地域活動に参画していかなければならないという思いを日々強く感じているところです。

事業報告

# 2015年度地域連携生涯学習部門事業の実施報告

## 1　公開講座

### ■イノベーション社会連携推進機構（地域連携生涯学習部門）

| 講座名 | 開催日 | テーマ | 講師 | 対象 | 受講料 | 会場 | 定員 | 実数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 伊豆半島における地質・自然・文化遺産と人びとの関わり［全3回］ | 8/29 | 韮山代官江川氏と伊豆半島の幕末維新 | 人文社会科学部准教授・今村直樹 | 一般市民、伊豆半島ジオガイド協会会員およびジオパーク関係者 | 無料 | 三島市民文化会館 | 各80 | 186（延べ） |
| | 9/12 | 石棺と築城石―考古学から見た伊豆石の利用― | 人文社会科学部教授・篠原和大 | | | | | |
| | 9/26 | 伊豆半島の植物と植生 | 理学部准教授・徳岡 徹 | | | | | |

### ■人文社会科学部

| 講座名 | 開催日 | 講師 | 対象 | 受講料 | 会場 | 定員 | 実数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 中国人による中国講座―日本人の知らない中国［全10回］ | 4/11・18・25、5/16・23・30、6/13・20、7/4・11 | 人文社会科学部准教授・張 盛開<br>静岡大学非常勤講師・王 元武<br>静岡大学非常勤講師・盧 思<br>静岡大学非常勤講師・周 佩芳 | 一般市民 | 無料 | 静岡大学静岡キャンパス | 60 | 370（延べ） |

| 講座名 | 開催日 | テーマ | 講師 | 対象 | 受講料 | 会場 | 定員 | 実数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人間生活のリスクと幸せ［全6回］ | 10/6 | リスクと幸せの心理学 | 人文社会科学部教授・橋本 剛 | 一般市民 | 無料 | アイセル21（静岡市葵生涯学習センター） | 各30 | 197（延べ） |
| | 10/13 | 環境リスクを読み解く | 人文社会科学部教授・平岡義和 | | | | | |
| | 10/20 | ライフコース・リスクと幸福感 | 人文社会科学部准教授・吉田 崇 | | | | | |
| | 10/27 | リスクの個人化とメンタルヘルス | 人文社会科学部教授・荻野達史 | | | | | |
| | 11/10 | メンタルヘルスのリスク・マネジメント | 人文社会科学部教授・笠井 仁 | | | | | |
| | 11/17 | 人はなぜ幸福を語るのか | 人文社会科学部教授・田中伸司 | | | | | |

### ■教育学部

| 講座名 | 開催日 | 講師 | 対象 | 受講料 | 会場 | 定員 | 実数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 安心登山・アウトドア活動のための読図とナヴィゲーションスキル（初級編） | 4/29 | 教育学部教授・村越 真<br>オリエンテーリング日本代表・小泉成行 | 登山・アウトドア活動を行う一般市民 | 3,000 | 静岡大学静岡キャンパス及び屋外 | 25 | 23 |
| 安心登山・アウトドア活動のための読図とナヴィゲーションスキル（中級編） | 10/3 | 教育学部教授・村越 真<br>プロアドベンチャーレーサー・宮内佐季子 | 過去に初級編を受講した方、又は地形図の基礎知識がある登山経験者で6㎞程度を歩ける方 | 3,600 | 静岡市郊外（屋外） | 20 | 20 |
| 音楽授業のための民謡入門［全3回］ | 7/31、8/4・25 | 教育学部教授・志民一成 | 小・中学校教員（音楽）及び小・中学校の教員を目指している方 | 無料 | 静岡音楽館AOI | 30 | 48 |

| 講座名 | 開催日 | 講師 | 対象 | 受講料 | 会場 | 定員 | 実数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 弾いてみよう和楽器、歌ってみよう日本音楽［全3回］ | 8/5・12・13 | 教育学部准教授・長谷川慎<br>長唄演奏家（長唄三味線方）・<br>東音高橋智久<br>長唄演奏家（長唄唄方）・<br>東音小林百合 | 小・中・高等学校教員及び伝統音楽指導に興味のある方 | 無料 | 静岡音楽館AOI | 16 | 64 |
| トレイルランナーのためのランニングとリスクマネジメント | 2/20 | 教育学部教授・村越 真<br>teamTECNICA・山田高志 | 日常的にロード・トレイルを問わず）を実施し、トレイルランニングに興味を持つ市民 | 3,900 | 静岡キャンパス及び屋外 | 15 | 8 |

## ■農学部

| 講座名 | 開催日 | 講師 | 対象 | 受講料 | 会場 | 定員 | 実数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 施設栽培技術講習会［全4回］ | 6/10・24、7/15・29 | 農学部准教授・切岩祥和<br>(株)ヒノン農業取締役社長・影山雅也<br>ダブルエム研究所所長・狩野 敦<br>静岡県農業技術研究所職員<br>(株)アームズ取締役・三倉直巳<br>農学部教授・鈴木克己 | 一般市民 | 2,100 | 静岡キャンパス | 15 | 36 |
| サツマイモを食べよう！<br>～サツマイモの収穫・調理教室～ | 10/31 | 農学部助教・浅井辰夫<br>技術部技術専門職員・西川浩二<br>技術部技術専門職員・成瀬和子 | 一般市民（小学生以上） | 600 | 農学部附属地域フィールド科学教育研究センター藤枝フィールド | 20 | 21 |

## ■情報学部

| 講座名 | 開催日 | テーマ | 講師 | 対象 | 受講料 | 会場 | 定員 | 実数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 情報学部公開講座2015 | 11/7 | 機械と人間 | 情報学部教授・竹内勇剛 | 一般市民 | 無料 | 静岡大学浜松キャンパス | 各50 | 70 |
| | | | 情報学部教授・大島律子 | | | | | |
| | | | 情報学部講師・原田伸一朗 | | | | | |

## ■技術部

| 講座名 | 開催日 | 講師 | 対象 | 受講料 | 会場 | 定員 | 実数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 私のミカン～ミカンの通年管理教室～［全5回］ | 5/12、7/14、9/15、11/17、3/1 | 技術部技術専門職員・成瀬博規<br>技術部技術職員・周藤美希<br>農学部准教授・八幡昌紀 | 一般市民 | 10,000 | 静岡大学農学部附属地域フィールド科学教育研究センター藤枝フィールド | 10 | 50 |

## ■グリーン科学技術研究所

| 講座名 | 開催日 | テーマ | 講師 | 対象 | 受講料 | 会場 | 定員 | 実数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 遺伝子の世界を見てみよう［全2回］ | 8/5 | 爪や髪の毛からDNAを抽出する | グリーン科学技術研究所准教授・道羅英夫 | 県内高校生 | 無料 | 静岡大学静岡キャンパス | 20 | 40 |
| | 8/6 | 光る大腸菌を観察する | | | | | | |

## ■キャンパスミュージアム

| 講座名 | 開催日 | テーマ | 講師 | 対象 | 受講料 | 会場 | 定員 | 実数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 静大キャンパス探訪～静岡キャンパスの自然と歴史～［全3回］ | 10/3 | 静大キャンパスの土壌生物 | ふじのくに地球環境史ミュージアム・岸本年郎 | 一般市民、学生、小中高生（中学生以下は保護者同伴） | 無料 | 静岡大学静岡キャンパス | 20 | 34 |
| | 10/17 | 大学構内の植物探訪 | 理学部准教授・徳岡 徹 | | | | | |
| | 10/24 | 静大キャンパスの歴史ー縄文から静大までー | 人文社会科学部教授・篠原和大 | | | | | |

## 2　静岡大学創立60周年記念事業を継承した連携講座

### ■静岡大学・読売新聞連続市民講座「〈生きる〉を考える」

| 回 | 開催日 | タイトル | 講師 | 参加者 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 8/22 | 変貌する身体と生命～サイボーグ化とデジタル化の未来～ | 人文社会科学研究科特任教授・松田 純 | 118 |
| 2 | 10/11 | 老いを科学する～老化と寿命はどこからやってくるのか?～ | 理学部教授・丑丸敬史 | 183 |
| 3 | 10/31 | 医療と身体を考える<br>～図像から読み解く西洋中世医学の文化史～ | 人文社会科学部教授・久木田直江 | 157 |
| 4 | 11/22 | 〈死〉とともに生きる～死ぬとは?生きるとは?～ | 農学部教授・竹之内裕文 | 174 |
| 5 | 1/9 | 生むこと、生まれること～家族と社会を問い直す～ | 人文社会科学部准教授・白井千晶 | 148 |

・会場：あざれあ（静岡県男女共同参画センター）6階大ホール
・参加費：無料
・主催：静岡大学、読売新聞東京本社静岡支局

### ■静岡大学・中日新聞連携講座「光の不思議な世界」

| 回 | 開催日 | タイトル | 講師 | 参加者 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 10/3 | 光子をとらえよ：X線の新しい情報を引き出すフォトンカウンティングCT | 電子工学研究所教授・青木 徹 | 81 |
| 2 | 11/8 | 瞳をキャッチ：近赤外光を利用した瞳孔検出技術・視線検出装置の開発 | 大学院総合科学技術研究科教授・海老澤嘉伸 | 54 |
| 3 | 12/5 | 自然界にない光で見えるものとは：テラヘルツ波の発生と応用 | 電子工学研究所特任教授・佐々木哲朗 | 67 |
| 4 | 1/23 | トンボの目で極限現象を見る：ヒトとは違う見方で、見えてくる | 電子工学研究所准教授・香川景一郎 | 56 |
| 5 | 2/13 | 近未来は光健康診断：光を使って体の活動や健康状態を測る | 大学院総合科学技術研究科准教授・庭山雅嗣 | 72 |

・会場： 静岡大学浜松キャンパス
・参加費：無料
・主催：静岡大学、中日新聞東海本社

### ■静岡大学・ユーコープ連携講座「伊豆半島における地質・自然・文化遺産と人びとの関わり」

| タイトル | 講師 | 三島会場 | | 静岡会場 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 開催日 | 参加者 | 開催日 | 参加者 |
| 韮山代官江川氏と伊豆半島の幕末維新 | 人文社会科学部准教授・今村直樹 | 8/29 | 66 | 11/22 | 24 |
| 石棺と築城石－考古学から見た伊豆石の利用－ | 人文社会科学部教授・篠原和大 | 9/12 | 58 | 11/29 | 25 |
| 伊豆半島の植物と植生 | 理学部准教授・徳岡 徹 | 9/26 | 62 | 11/8 | 16 |

・会場：［三島会場］三島市民文化会館　　［静岡会場］静岡市葵生涯学習センター
・参加費：無料
・主催：静岡大学、生活協同組合ユーコープ
※その他：上記講座に加え、以下のとおり実施した。
「アンチエイジングはどこまで可能となったか?」（1/23）講師：理学部教授・丑丸敬史
［浜松会場／静岡大学浜松キャンパス］

## 3　地域連携応援プロジェクト

静岡大学学生・教職員が主体となり、すでに地域団体や自治体等と協働で取り組んでいる、または新たに取り組もうとする地域の活性化につながる活動を学内で公募し、支援している。2015年度は16件の応募があり、うち11件を採択した（下表）。これらの取り組みが進むことにより、学生・教職員の主体的な地域連携活動が促進され、地域とより密着に連携した静岡大学になることを期待する。

| 部局 | 代表者 | プロジェクト名 |
|---|---|---|
| 教育学部 | 池田 恵子 | 湖西市における多様性に配慮した地域づくりのための地域女性団体サポート事業 |
| 教育学部 | 大塚 玲 | きんもくせい土曜教室（発達障害児の学習等支援活動） |
| 教育学部 | 河村 道彦 | 人、自然、世界とふれあう「しきじ土曜倶楽部」支援プロジェクト |
| 教育学部 | 川原﨑 知洋 | デザインで地域を活性化する「笑顔でつなぐポスター展」プロジェクト |
| 教育学部 | 後藤 友香理 | 遊びや体験活動を通して学びに熱中する子ども育成の場「ちびっこ寺子屋プロジェクト」 |
| 教育学部 | 田宮 縁 | 静岡市東豊田学区における雑紙回収率アップ事業 |
| 教育学部 | 藤井 基貴 | 学生と地域社会の協働による地域防災力向上プロジェクト |
| 教育学部 | 松永 泰弘 | 静岡市子どもクリエイティブタウン「まある」との連携による動くおもちゃものづくり・あそび・まなび体験支援プロジェクト |
| 教職大学院 | 矢崎 満夫 | 学生ボランティアによる「<つながりづくり>実践事例集」の開発～学校・地域における多文化共生理念の共有化を目指して～ |
| 情報学部 | 杉山 岳弘 | 浜松市における地域文化の情報発信のための「浜松鈴鈴（りんりん）」発行事業 |
| 情報学部 | 田中 宏和 | 静岡県西部地域の農業活性化に向けたサポート事業 |

## 4　地域課題解決支援プロジェクト

2013年度から開始した「地域課題解決支援プロジェクト」は、これまで大学との接点がなかった地域や団体から課題を公募し、新たな地域連携・貢献活動につなげようという取り組みである。第1期の公募で寄せられた27課題に対し、各研究室・学生とマッチングを進め、取り組みが始まっている。

各課題の進捗状況を下記ウェブサイトで紹介している。

ウェブサイト　http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_index.html

## 5　主催事業

### ①博物館フォーラム「ジオパークにおける博物館の役割と学生参加のあり方～伊豆半島ジオパークとふじのくに地球環境史ミュージアムについて～」

大学・ジオパーク・博物館関係者がそれぞれの役割について相互に理解を深め、ジオパークや博物館の活動への学生参加のあり方について議論することを目的にフォーラムを開催した。前半は、伊豆半島ジオパーク推進協議会およびふじのくに地球環境史ミュージアムから活動紹介がなされ、後半は博物館でボランティア活動をしている学生を交えパネルディスカッションを行った。博物館ボランティア活動継続における課題等を中心に活発な議論がなされた。

・日時：2016年1月28日（木）12:40～14:30

・会場：静岡大学共通教育B棟301教室

・プログラム：

［講演①］「伊豆半島ジオパークは地球の活動を伝える博物館になりえるか」

講師：鈴木雄介（伊豆半島ジオパーク推進協議会専任研究員）

［講演②］「ふじのくに地球環境史ミュージアムの挑戦」

講師：岸本年郎（ふじのくに地球環境史ミュージアム准教授）

［発表］「静岡大学登呂博物館ボランティアの活動経緯と今後の課題」
発表者：井口美奈（静岡大学人文社会科学部2年）
［パネルディスカッション］「ジオパークにおける博物館の役割と学生参加のあり方」
パネリスト：上記3名、坂内沙紀（静岡大学理学部2年）
コーディネーター　石川宏之（静岡大学イノベーション社会連携推進機構准教授）
・参加費：無料
・参加者数：80人

②公開シンポジウム「地域課題から地方創生へ～地域と大学で何ができるか？～」

地域の様々な課題を公募し、その解決支援を試みる「地域課題解決支援プロジェクト」が立ち上がり、県内各地で活動を始めた。今回、応募自治体である東伊豆町との共催で公開シンポジウムを開き、県内の取り組み事例を報告しながら、地域と大学が連携・協働することによって何ができるかを考えた。

・日時：2016年2月21日（日）13:00～16:30
・会場：東伊豆町役場1階大会議室
・プログラム：
［報告①］「静岡大学＜地域創造学環＞が目指すもの」報告：平岡義和（静岡大学地域創造学環教授）
［報告②］「内発的発展による観光まちづくり～熱海市の事例を中心に～」報告：川瀬憲子（静岡大学人文社会科学部教授）、川瀬研究室・地方財政論ゼミ生
［報告③］「学生参画による地域連携の取り組み」
・「静大フューチャーセンター概要」
・「伊豆地域における静大フューチャーセンターの取り組み」
報告：宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター准教授）、静岡大学フューチャーセンターディレクター
［パネル・ディスカッション］
・コーディネーター：阿部耕也（静岡大学イノベーション社会連携推進機構教授）
・参加費：無料
・参加者数：46人

③公開セミナー「学ぶって楽しい！～大学で学ぼう～」

知的障害のある人が、学校卒業後も生涯学習の機会を持ち、より豊かな人生を送ることができるようになることを目的に実施した。前期と後期の2回、それぞれ別の内容で実施した。

［前期］（通算20回）
・日時：2015年6月28日（日）9:15～12:15
・プログラム：
［演習］「アイスブレイク～学びのなかま～」講師：大畑智里（静岡県立静岡北特別支援学校教諭、学校心理士）
［講義①］「伝統漁法　柴上げ漁から考える環境問題」講師：大村大輔（環境保全活動団体balance代表）
［講義②］「心理学で考える「やる気」との付き合い方」講師：伊田勝憲（静岡大学教職大学院准教授）
・参加者数：88人
［後期］（通算21回）
・日時：2015年10月18日（日）9:10～12:15
・プログラム：
［講義①］「強勢とリズムでわかる英語の音・日本語の音」講師：亘理陽一（静岡大学教育学部英語教育教室准教授）

［講義②］「美味しいハンバーガーの秘密」講師：海野愛花（日本マクドナルド（株））
・参加者数：79人
［共通事項］
・会場：静岡大学大学会館3Fホール
・参加費：無料
・参加者：静岡県の知的障害養護学校等卒業の社会人（18歳以上）、県立特別支援学校等の教員、青年学級等の関係者・保護者、静岡大学教育学部特別支援教育（障害児教育）専攻の学生、静岡県障害者就労研究会会員など
・企画：静岡県障害者就労研究会
【公開講演会】
・日時：2015年10月18日（日）13:30〜15:30
・会場：静岡大学大学会館3Fホール
・講師：松為信雄（文教学院大学教授）
・演題：「障害者の就労継続を考える〜最近の社会・国の動向を捉えての就労の準備〜」
・参加者数：48人
・参加費：無料
・参加者：一般市民、主に小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教諭等の関係者
・企画：静岡県障害者就労研究会

④地域連携応援プロジェクト成果報告会

2015年度「地域連携応援プロジェクト」の公募に際し、前年度のプロジェクトの成果報告会を開催した。
・日時：2015年5月8日（金）13:30〜15：15
・会場：［静岡会場］静岡大学事務局別館1A会議室
［浜松会場］静岡大学イノベーション社会連携推進機構棟1階カンファレンスルーム
※遠隔テレビシステムで2会場を結んで実施
・プログラム：
①「静岡県内の公共機関と協働する子どもたちのための造形プログラムの開発運営事業」
プロジェクト代表者：川原﨑知洋（静岡大学教育学部講師）
②「敷地でまなび、世界をつなぐ「しきじ土曜倶楽部」　支援プロジェクト」
プロジェクト代表者：河村道彦　（静岡大学教育学部准教授）
③「本が好きな子、集まれ！キッズチャレンジ静大図書館」
プロジェクト代表者：鈴木雅子（静岡大学学術情報部図書館情報課長）、
松下昭重（静岡大学学術情報部図書館情報課電子情報係主任）
・参加者数：21人
・参加費：無料

## 6　共催事業

①生涯学習指導者研修事業「公民館の力を磨く」

静岡県内の公民館活動などを通して、生涯学習事業を展開している生涯学習指導者への教育研究情報の提供と大学とのネットワークづくりを進めるとともに、指導者の資質の向上をはかることを目的に、静岡県公民館連絡協議会との連携事業として実施している。

公民館を取り巻く環境は近年大きく変化し、社会教育・生涯学習の場として、また地域づくりの拠点として、これまで以上に地域の住民・機関・団体との連携・協働が求められている。地域のもつ資源、人材、

ネットワークなどを活かしながら、地域全体の総合的な取り組みが必要な課題と向き合い、地域内での連携・学び合いの中で、課題解決を図る様々な事例に学び、公民館のもつ教育力・地域力を高める方策を探った。

・日時：2015年11月27日（金）10:20〜16:00
・会場：静岡市興津生涯学習交流館
・プログラム：
①基調講演「暮らしと密着した自主防災〜公民館が活かす自然、知恵、結の心〜」講師：藤井礼子（島根県浜田市立安城公民館主事）
②事例報告「学生の力を活かすまちづくり〜静大フューチャーセンターの取り組み〜」報告者：静大フューチャーセンター運営学生
③グループワークとディスカッション　講師：久保 渉(静岡県教育委員会社会教育課指導主事)
コメンテーター：菅野文彦（静岡大学教育学部教授）
・参加者数：36人
・参加費：無料
・主催：静岡県公民館連絡協議会、静岡大学イノベーション社会連携推進機構

②焼津市大村公民館教養講座「歴史講座３回シリーズ」

①8/7（金）「百年前の中国人留学生―教育を通した日中交流の栄光と挫折―」
講師：戸部 健（静岡大学人文社会科学部准教授）
②9/1（火）「ヨーロッパ史「中世チェコの都市とビール」」
講師：藤井真生（静岡大学人文社会科学部准教授）
③10/1（木）「スコットランド独立投票から考えるイギリス史」
講師：岩井 淳（静岡大学人文社会科学部教授）
・参加費：無料
・会場：焼津市大村公民館
・主催：焼津市大村公民館、静岡大学イノベーション社会連携推進機構

③2015ビジネス講座「再生可能エネルギーを事業化する」

福島大学が文部科学省からの委託事業（平成27年度「成長分野等における中核的専門人材養成等の戦略的推進事業」）の一環として開催する講座を、静岡版として共同で開催した。太陽光、木質・畜産系バイオマス、小水力などの再生可能エネルギーを活用した発電事業に興味関心のある事業者、NPO、地域活動者等の方々を対象に、事業化のための実践的・実用的な知識を身につけることを目指して、講義とグループワーク・ディスカッションを行った。

・日時：2015年10月8日（木）〜12月3日（木）13:30〜17:00
・会場：　静岡市産学交流センター（B-nest）
・プログラム：
①10/8（木）　「地域参加型太陽光発電事業の実践」講師:鈴木俊雄(白河地域再生可能エネルギー推進協議会)
②10/22（木）「木質バイオマス活用による地域電熱併給事業」講師：白石昇央（福島ミドリ安全株式会社）
③10/29（木）「畜産系バイオマス・食品残渣活用によるバイオガス発電事業」講師：佐藤理夫（福島大学共生システム理工学類教授）
④11/20（金）「小水力発電の開発ステップ」講師：松尾寿裕（全国小水力利用推進協議会）
⑤12/3（木）　「地域資源を活用した再生可能エネルギー事業の取り組み」講師：服部乃利子（しずおか未来エネルギー株式会社）

・参加費：無料
・主催：　福島大学地域創造支援センター、静岡大学イノベーション社会連携推進機構

## 7　企画協力事業

①公開シンポジウム「津波防災まちづくりシンポジウム～松崎町の津波対策と防災まちづくりを考える～」

・日時：2015年9月5日（土）13:00～16:00
・会場：松崎町環境改善センター文化ホール
・プログラム：

【基調講演】
演題①「津波の想定と津波防災対策について」講師：原田賢治（静岡大学防災総合センター准教授）
演題②「津波避難対策と防災まちづくり」講師：照本清峰（人と防災未来センター研究主幹）
【報告】「新たな津波対策への取組について」報告者：下田土木事務所
【パネルディスカッション】「松崎町の津波対策と防災まちづくりを考える」

・コーディネーター：原田賢治（静岡大学防災総合センター准教授）
・参加費：無料
・参加者数：300人
・主催：静岡県、松崎町
・企画協力：静岡大学イノベーション社会連携推進機構

②地方創生市民シンポジウム「浜松型次世代交通システムと観光産業振興による地方創生！」

・日時：2015年9月12日（土）9:10～12:25
・会場：Uホール（浜松市勤労会館）
・プログラム：

【研究報告】
演題①「観光産業振興（浜名湖観光圏）による地方創生」
演題②「浜松型次世代交通システムによる地方創生」
【特別講演】「地方から創生する我が国の未来」講演者：石破 茂（地方創生担当大臣）
・参加者数：350人
・参加費：無料
・主催：浜松都市環境フォーラム
・企画協力：静岡大学イノベーション社会連携推進機構

③地方創生市民シンポジウム（第２回）「浜松創生・市民案～みんなで考える浜松の未来～」

・日時：2016年1月11日（月）13:00～17:00
・会場：静岡文化芸術大学講堂
・プログラム：

【提案発表】
①「若者がつくる未来」発表者：大高真寛（浜松西高1年）
②「音楽と観光がつくる未来」発表者：青木優太、小浜諒（浜松西高1年）
③「LRTがつくる未来」発表者：内田宏康（浜松都市環境フォーラム代表）
・ファシリテーター：日比谷憲彦（静岡文化芸術大学准教授）
・参加者数：120人
・参加費：無料

・主催：浜松都市環境フォーラム
・企画協力：静岡大学イノベーション社会連携推進機構

④静岡市・大学連携事業 市民大学リレー講座「死を見つめ今を生きる～豊かな人生を送るヒント～」
・日時：2015年10月3日（土）～10月31日（土）［全5回］10:00～11:45
・会場：アイセル21
・プログラム：
①10/3（土）「日本人の霊魂観」講師：吉田真樹（静岡県立大学准教授）
②10/10（土）「世界の死生観と死者儀礼」講師：川野美砂子（東海大学教授）
③10/17（土）「死後の世界と生まれる前の世界」講師：高橋清隆（静岡英和学院大学教授）
④10/24（土）「在宅での看取り」講師：渡部洋子（常葉大学教授）
⑤10/31（土）「対話を通して生と死を探究する」講師：竹之内裕文（静岡大学農学研究科教授）
・参加費：無料
・主催：静岡英和学院大学、静岡県立大学、静岡大学、東海大学、常葉大学、静岡市
・企画協力：静岡大学イノベーション社会連携推進機構

⑤静岡市北部生涯学習センター美和分館アカデ美和歴史講座「江戸時代の静岡農村」
・日時：2015年11月28日（土）13:30～15:30
・講師：今村直樹（静岡大学人文社会科学部准教授）
・参加費：無料
・参加者数：48人
・会場：静岡市北部生涯学習センター美和分館
・主催：静岡市北部生涯学習センター美和分館、美和歴史たまご会
・企画協力：静岡大学イノベーション社会連携推進機構

⑥吉田町大学特別公開講座「吉田町と周辺地域の歴史」
・日時：2015年11月25日（水）～12月17日［全4回］19:00～20:30
・プログラム：
①11/25（水）「今川氏の遠江進出と吉田地域」講師：小和田哲男（静岡大学名誉教授）
②12/3（木）「徳川・武田両氏の攻防と小山城」講師：本多隆成（静岡大学名誉教授）
③12/10（木）「近世成立期の榛原地域」講師：本多隆成（静岡大学名誉教授）
④12/17（木）「近代の吉田地域」講師：山本義彦（静岡大学名誉教授）
・参加費：2,000円
・会場：吉田町中央公民館
・対象：高校生以上の方（町内外問わず）
・企画協力：静岡大学イノベーション社会連携推進機構

⑦静岡市北部生涯学習センター美和分館講座「映画「スターウォーズ」とアメリカ」
・日時：2016年2月20日（土）18:30～20:30
・講師：花方寿行（静岡大学人文社会科学部教授）
・参加者数：18人
・参加費：無料
・会場：静岡市北部生涯学習センター美和分館

・主催：静岡市北部生涯学習センター美和分館
・企画協力：静岡大学イノベーション社会連携推進機構

⑧日本経済新聞連載企画「静岡大発　私の提言」
・執筆者：
①宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター准教授）専門：キャリア教育、就職支援
②白井千晶（静岡大学人文社会科学部准教授）専門：家族社会学、医療社会学
③日詰一幸（静岡大学人文社会科学部教授）専門：行政学、地方自治論

## 8　市民開放授業

静岡大学市民開放授業は、静岡大学の学生が受講している正規の科目の一部を一般市民の方に開放し、正規学生と一緒に受講できるようにしたもので、2005年度から実施している。受講者数、開講科目数等のデータは以下の表のとおりである。

①受講者数

| 年度 | 受講者数 | 平均年齢 |
|---|---|---|
| 2005年度 | 106 | 58.2 |
| 2006年度 | 154 | 59.9 |
| 2007年度 | 137 | 62.0 |
| 2008年度 | 166 | 61.7 |
| 2009年度 | 203 | 60.8 |
| 2010年度 | 217 | 62.3 |
| 2011年度 | 274 | 63.2 |
| 2012年度 | 339 | 63.5 |
| 2013年度 | 333 | 64.0 |
| 2014年度 | 309 | 65.0 |
| 2015年度 | 298 | 65.0 |

②開放科目数

| 年度 | 共通 | 人文 | 教育 | 理 | 農 | 工 | 情報 | 法科 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2005年度 | 116 | 89 | 14 | 12 | 7 | 6 | 10 | | 254 |
| 2006年度 | 127 | 87 | 21 | 118 | 13 | 7 | 10 | | 383 |
| 2007年度 | 128 | 114 | 21 | 77 | 7 | 9 | 10 | | 366 |
| 2008年度 | 143 | 85 | 17 | 93 | 88 | 7 | 0 | 1 | 434 |
| 2009年度 | 96 | 106 | 21 | 103 | 85 | 4 | 12 | | 427 |
| 2010年度 | 144 | 114 | 19 | 112 | 83 | 10 | 11 | | 493 |
| 2011年度 | 151 | 98 | 18 | 109 | 82 | 9 | 12 | | 479 |
| 2012年度 | 159 | 111 | 17 | 114 | 81 | 8 | 9 | | 499 |
| 2013年度 | 154 | 92 | 17 | 106 | 79 | 8 | 8 | | 464 |
| 2014年度 | 87 | 93 | 16 | 115 | 77 | 7 | 12 | | 407 |
| 2015年度 | 92 | 106 | 14 | 111 | 73 | 10 | 11 | | 417 |

③受講科目数

| | 共通 | 人文 | 教育 | 理 | 農 | 工 | 情報 | 法科 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2005年度 | 56 | 33 | 5 | 0 | 2 | 0 | 0 | | 96 |
| 2006年度 | 63 | 47 | 7 | 9 | 2 | 1 | 3 | | 132 |
| 2007年度 | 48 | 46 | 5 | 11 | 5 | 0 | 1 | | 116 |
| 2008年度 | 50 | 58 | 5 | 13 | 14 | 0 | 0 | 1 | 141 |
| 2009年度 | 50 | 61 | 3 | 26 | 23 | 2 | 4 | | 169 |
| 2010年度 | 57 | 63 | 4 | 33 | 21 | 4 | 7 | | 189 |
| 2011年度 | 62 | 64 | 3 | 24 | 26 | 3 | 2 | | 184 |
| 2012年度 | 88 | 63 | 5 | 29 | 22 | 0 | 5 | | 212 |
| 2013年度 | 74 | 67 | 9 | 29 | 28 | 0 | 3 | | 210 |
| 2014年度 | 56 | 70 | 3 | 35 | 27 | 0 | 5 | | 196 |
| 2015年度 | 50 | 65 | 4 | 36 | 20 | 2 | 4 | | 181 |

④受講者状況
□居住地別受講者数

| 居住地 | 2005年度 | 2006年度 | 2007年度 | 2008年度 | 2009年度 | 2010年度 | 2011年度 | 2012年度 | 2013年度 | 2014年度 | 2015年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 神奈川県足柄郡 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 伊豆の国市 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 |

| 居住地 | 2005年度 | 2006年度 | 2007年度 | 2008年度 | 2009年度 | 2010年度 | 2011年度 | 2012年度 | 2013年度 | 2014年度 | 2015年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 伊東市 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 下田市 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 熱海市 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 1 | 2 | 3 |
| 裾野市 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 |
| 沼津市 | 2 | 2 | 3 | 3 | 1 | 1 | 3 | 5 | 1 | 3 | 4 |
| 富士市 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | 7 | 12 | 12 | 8 | 8 | 5 |
| 富士宮市 | 1 | 3 | 2 | 2 | 2 | 3 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 三島市 | 2 | 2 | 0 | 2 | 3 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| 駿東郡 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 1 |
| 御殿場市 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 志太郡 | 3 | 3 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 菊川市 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 1 | 1 |
| 掛川市 | 1 | 1 | 2 | 1 | 2 | 0 | 1 | 3 | 4 | 5 | 2 |
| 静岡市 | 75 | 99 | 101 | 130 | 141 | 129 | 161 | 206 | 208 | 204 | 195 |
| 藤枝市 | 4 | 11 | 12 | 12 | 12 | 14 | 24 | 16 | 21 | 17 | 14 |
| 焼津市 | 4 | 3 | 0 | 0 | 8 | 13 | 12 | 14 | 17 | 9 | 11 |
| 磐田市 | 0 | 4 | 0 | 3 | 0 | 2 | 1 | 5 | 5 | 5 | 8 |
| 御前崎市 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 4 | 4 | 2 | 2 | 0 | 0 |
| 引佐郡 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 湖西市 | 0 | 3 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 3 | 3 | 2 | 1 |
| 島田市 | 4 | 4 | 2 | 2 | 0 | 0 | 5 | 7 | 7 | 9 | 9 |
| 榛原郡 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 3 | 5 | 1 | 0 | 1 | 2 |
| 浜松市 | 4 | 13 | 9 | 4 | 20 | 27 | 32 | 51 | 48 | 34 | 33 |
| 袋井市 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 4 | 6 | 4 | 3 | 2 |
| 牧之原市 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 2 | 2 | 0 | 1 | 3 | 2 |
| 周智郡 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 豊橋市 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 愛知県春日井市 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 計 | 106 | 154 | 137 | 166 | 203 | 217 | 274 | 339 | 333 | 309 | 298 |

### □年齢別受講者数

| 年齢 | 2005年度 | 2006年度 | 2007年度 | 2008年度 | 2009年度 | 2010年度 | 2011年度 | 2012年度 | 2013年度 | 2014年度 | 2015年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ～19 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 20～24 | 1 | 4 | 1 | 3 | 1 | 1 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 25～29 | 4 | 5 | 2 | 1 | 6 | 0 | 1 | 0 | 1 | 5 | 5 |
| 30～34 | 4 | 4 | 1 | 2 | 7 | 5 | 4 | 3 | 0 | 3 | 2 |
| 35～39 | 2 | 0 | 5 | 6 | 3 | 6 | 1 | 7 | 4 | 3 | 4 |
| 40～44 | 7 | 6 | 5 | 2 | 8 | 9 | 2 | 5 | 6 | 6 | 5 |
| 45～49 | 6 | 11 | 7 | 7 | 9 | 12 | 18 | 14 | 9 | 6 | 5 |
| 50～54 | 8 | 6 | 6 | 13 | 10 | 10 | 13 | 19 | 18 | 8 | 15 |
| 55～59 | 13 | 23 | 10 | 12 | 17 | 17 | 21 | 18 | 13 | 13 | 10 |
| 60～64 | 33 | 39 | 30 | 40 | 54 | 57 | 79 | 119 | 113 | 72 | 58 |
| 65～69 | 16 | 33 | 37 | 42 | 42 | 45 | 61 | 79 | 94 | 110 | 106 |
| 70～74 | 9 | 15 | 20 | 24 | 28 | 33 | 46 | 45 | 44 | 54 | 51 |
| 75～79 | 2 | 6 | 11 | 9 | 13 | 14 | 18 | 20 | 20 | 17 | 26 |
| 80～84 | 1 | 2 | 2 | 2 | 4 | 5 | 4 | 7 | 9 | 10 | 11 |
| 85～89 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 3 | 3 | 1 | 2 | 0 |
| 計 | 106 | 154 | 137 | 163※ | 203 | 217 | 274 | 339 | 333 | 309 | 298 |

※3名年齢未記入

□一人当たりの受講科目数

| 受講科目数 | 2005年度 | 2006年度 | 2007年度 | 2008年度 | 2009年度 | 2010年度 | 2011年度 | 2012年度 | 2013年度 | 2014年度 | 2015年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1科目 | 51 | 92 | 77 | 89 | 123 | 129 | 168 | 224 | 216 | 191 | 194 |
| 2科目 | 34 | 34 | 44 | 45 | 47 | 42 | 69 | 79 | 79 | 77 | 70 |
| 3科目 | 10 | 21 | 12 | 22 | 18 | 28 | 23 | 22 | 24 | 24 | 16 |
| 4科目 | 6 | 4 | 2 | 3 | 9 | 14 | 11 | 13 | 11 | 10 | 13 |
| 5科目 | 3 | 2 | 0 | 4 | 3 | 1 | 3 | 1 | 1 | 4 | 2 |
| 6科目 | 2 | 0 | 2 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 2 | 2 | 1 |
| 7科目 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 8科目 | 0 | 1 | 0 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 9科目 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 計 | 106 | 154 | 137 | 166 | 203 | 217 | 274 | 339 | 333 | 309 | 298 |

静岡大学
生涯学習教育研究　第19号

発行日――2017年3月31日
編集・発行――静岡大学イノベーション社会連携推進機構
地域連携生涯学習部門
〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷836
☎054-238-4817
印刷――株式会社三創

# Bulletin of
# The Center for Education and Research of Lifelong Learning

Shizuoka University

**No.19**

---

## CONTENTS

**Articles**

A Role of Universities and Citizen Groups for Utilizing Disaster Wreckage to Achieve Sustainable Community Development
:Case Study of the 5.6 Million Tourists Area Development Workshops in the Lake Toya Hot Spring Area
…… ISHIKAWA, Hiroyuki 3

Design of the Session in Future Center for Giving the Participants Awareness and Motivation of Action
：The Case Study of Shizuoka Conference of Consumer Education for the Future
…… UGATA, Eiji SATO, Naoki AMANO, Hirohumi 15

**Report**

An Ideal Form of Geoparks, Museums and Students Partnership
Case Study of the Izu Peninsula Geopark and the Museum of Natural and Environmental History in Shizuoka
…… 27

Staff Development Forum in Lifelong Learning Centers
：*Kouminkan* supporting learning of the youth …… 45

---

Division of Regional Collaboration and Lifelong Learning
Shizuoka University
Shizuoka, Japan

2017